

きにもあらでやみたること

おしひ出るこのさまよ
郭公の哥などの事はおしひも出すして。只
くひたりし物と思ひ出しよ

したわらびこそ 清少や密相などの心を
しはかりて后宮の御たはふれ

うけはりたりや
孟世抄に詔承諾。はむかる事もなきない
ふ世云々。清少のあまりはむかりなく厭な
したふ事をたはふれての給ふ

かいつらん いひつらんといふおなじ詞
之。大和物語に「見きまないひそ人のきか
くに」とある哥を。源氏帯木巻には。見き
まなかけそさけり。同じ心なればなるべ
し

「可」ものにくる。かいつらんは。心ニカ
クナアアウ
わらはせ給ふもはづかしながら何か。イ本
もはづかしながら何かといふ詞なくて。わ
らはせ給ふ此うたすへてさ
いひて下すのさすしらす
併一字のさすしらす。時節たがふ事し
らむやうに。一向に此道しらすにはあら
れぬ心
うたよむといはれしすまへ
清少は彼源授父が曾孫元輔がむめなれば

し事
の事などいひ出るに。宰相のきみ。いかにぞ手づからをり
たる事
たるといひし下わらびはどの給ふをまかせ給ふて。おも
ひ出ることのさまよとわらはせ給て。紙のちりたるに
后宮
したわらびこそこひしかりけれ
上旬を申せ
とかせ給ひて。もといへど仰らるゝもをかし
清少納言
ほどしきすたつねて聞し聲よりも
后宮の御詞
とかきてまゐらせたれば。いみしうけはりたりや。かう
公を思ひすてし事
までだにいかで郭公のことをかけつらんとわらはせたま
ふもはづかしながら。何かこのうたすべてよみ侍らじと
清少の詞
なんかもひ侍る物を。ものゝをりなど人のよみ侍るにも。
其座には侍ら下おもふこと
よめなどおほせらるれば。えとふらふまじき心ちなんま
侍る。いかでかは。もじのかずしらす。春は冬の哥をよみ。秋
は春のまよみ。梅のまよりは菊まよまよむ事は侍らん。され
ど哥よむといはれ侍しするずるは。すこし人にまよりて。

なき人のためいさほしく
元輔さしもの哥仙なりしに。其むすめさし
てこなる事なくば。父のおもてふせなれ
ば

かう下んせさせ給ひて
庚申を守る事。庚申の夜れば三戸まで
悪き虫人の身中に入て癩癩の病をなす。其
其故に今宵ねざる事古今際統にもあり。拾
芥云。庚申夜誦。彭侯子彭常子命兒子。悉入
幽冥之中。去離我身。袋双紙云。庚申せで癩
腫文「しや虫はいれや去りれや我床をた
れどねれぞれ、どねたるぞ」

さる事うけ給はりて
前に后宮のまらば心にまらす。我はよめ
もいば下このたまひし事。まやうの御詞
承りて

此人の哥こそよけれ
未々さばいへ元輔が女なれば
其ざりの哥はこれこそありけれ。さばいへどそれが子な
れはなどいはれたらんこそかひあるこちし侍らめ。露
てひいてたる事もなくして清少の申下
どりわきたるかたもなくて。さすがに哥がましく我はど
おもへるさまに。さういそによみ出侍らんなん。なき人のた
のためおもてふせ
めいとほしく侍るなごまめやかたにけいすれば。わらはせ
給ひて。さらばたし心にまかす。わればよめともいはじと
清少の詞
の給はすれば。いと心やすく成侍ぬ。今は哥の事思ひかけ
侍らじなどいひてある比。かうじんせさせ給て。内大臣殿
の伊周公庚申の御川意
いみしう心まうけさせ給へり。夜うち更るほどに題出
して。女はうに哥よませ給へば。みなけしきだちゆるがし
清少のうたよまんせせぬ
出すに。宮の御まへに近くさふらひて物けいしなごこと
事さのみいふを。おとご御らんじて。なごか哥はよまでは
なれるなる。題とれとの給ふを。さる事承りて。うたよむ
まじくなりて侍れば。思ひかけ侍らず。ことやうなる事。ま
清少の詞
伊周公の詞之格別なる事

けぞうさうきいもいたて
氣清也。いさゝかもうたよむきけしきな
く。潔白にさりおはせりし。

もすけがのち
清少は元輔がむすめとして今夜うたよま
あらばいかゞの心

その人の後
前になき人のためいさほしく侍るなどい
る所の心なり

是より出まうてこまし
つゝしむ事なくはよめさの仰なくも此方
よりさし出て千首も願侍んぞ
御かたゞ君達
后宮の御妹の御かたゞ。伊周公等の君達
なるべし。イ本しきにおはします比八月十
四日の月あかき夜などいふ事此段の上に

實に御ゆるしにやき后宮へ問給ふ聞
ことばにさる事やは侍る。なごかはゆるむせ給。いとあるま

じき事也。よしこと時はしらす。こよひはよめなごせめさ
せ給へど。けぞうさうきいもいられやさふらふに。こと人ごも

よみ出して。よしあしなごごだめらるゝはごに。いさゝか
なる御文をかきてたまはせたり。あけて見れば

もとすけが後といはるゝきみしもや
こよひのうたにはづれてはさる

とあるを見るに。をかしき事ぞたらひなきや。いみしく笑
へは。何事ぞくゝとおとゞもの給ふ

その人の後といはれぬ身なりせば
こよひのうたはまづぞよまし

つゝしむ心元輔の名をなしむ心なるべし
つゝしむ事さふらははずは。千首なりとも是よりぞ出まうて

こましとけいしつ
これより后宮の御前にて有し事共のものたり
御かたゞ君達うへ人など。御まへに人おほくさふらへ

は。ひさしの柱によりかゝりて。女房と物語してゐたるに。
物をなげ給はせたる。あけて見れば。思ふべしやいなや。だ
い一ならずはいかゞととばせ給へり。御前にて物語など
ふ心を註釋する聞
清少日比いひし聞
にかせん。只いみしうにくまれあしうせられてあらん。二
三にてはしぬともあらじ。一にてをあらんなどいへば。一
乗の法なりと人々わらふ事のすぢをめぐり。筆かみ給はり
たれば。九品蓮臺の中には下品といふともどかきてまゐ
らせられたは。むけにおもひくんしにけり。いとわろし。いひ
そめつる事はさてこそあらめとのたまはすれば。人にま
たがひてこそぞ申。それがあろきぞかし。だい一の人に。又
一におもはれんとこそ思はめとおほせらるゝもいとを
かし

有。然ごも聞かまなりてよろしかられば今
不聞也
「増」弘云。此所にイ本さあるは。萬歳抄の事
なるべし。萬には此段の上に左の數句あり
「しきにおはします比。八月十四日の月あか
き夜。右近の内侍にひはひかせてはしちか
くおはしまして。是か物いひわらひなど
するに。ひさしのはしちによりかゝりて。
ものもいはてさふらへば。なごかうさも
せぬ。ものいへさうくしきにさおほせら
るれば。たい秋の月心を見侍るこままう
せば。さていひつべしさをほせらる」
思ふべしやいなや
后宮よりなげ給へりし物に書給へる詞
之。清少我を思はんやさの戯之
だい一ならずはいかゞ
第一の人に清少をさほはずは。清少も相お
もふまづくやさの心
二三にては。第二第三に思はれては死すと
もあるま下さき
一乗の法なりと
是等御品の文の心也。一乗の法とは。法華
經の事也。最上第一の經なれば。彼清少の
第一に思はれん二三にてはあらじといふに
つけて。人々なぞらへいひし事の筋を。今
后宮の第一ならずは如何と仰らるゝ也。法
華經方便品云。十方佛土中唯有二乘法。無
二亦非三除三佛方便說俱說三無上道
九品蓮臺の中には。願の詞也。后宮の御
票みにかゝらば。たゞ下品にては満足
也。極樂寺建立願文度保願。十方佛土之中
以三四方爲最の九品蓮臺之間雖下品應是足。極樂に生るゝに。其人々によりて。上品上生に生れ。或は上品中生上品下生。或は中品上生など。すん
て九品の淨土ある事觀無量壽經に委

は。ひさしの柱によりかゝりて。女房と物語してゐたるに。
物をなげ給はせたる。あけて見れば。思ふべしやいなや。だ
い一ならずはいかゞととばせ給へり。御前にて物語など
ふ心を註釋する聞
清少日比いひし聞
にかせん。只いみしうにくまれあしうせられてあらん。二
三にてはしぬともあらじ。一にてをあらんなどいへば。一
乗の法なりと人々わらふ事のすぢをめぐり。筆かみ給はり
たれば。九品蓮臺の中には下品といふともどかきてまゐ
らせられたは。むけにおもひくんしにけり。いとわろし。いひ
そめつる事はさてこそあらめとのたまはすれば。人にま
たがひてこそぞ申。それがあろきぞかし。だい一の人に。又
一におもはれんとこそ思はめとおほせらるゝもいとを
かし

いひそめつる事はさてこそ 始め第一に思はれんといふほどならば。後まで其心をなへず。そあるへけれど。下品をいふこともいへるをな
かめ給ふ御たはふれ。 なみ／＼の人にこそ第一に思はれんとも申さめ。其人によりて下品にても満足と。后宮のいとも辱をいはいんさて
人にしたるひてこそ

是より別の事之際家の事
中納言殿まらせ給ひて。御扇奉らせ給ふに。たかいへこ
給ふ詞云 扇の骨云

そいみしきはねをえて侍れ。それをばらせてまらせんと
とするをおほろけの紙はばるまじければ。もどめ侍る也
と申給ふ。いかやうなるにかあるととひ聞えさせ給へば。

すべていみしく侍る。更にまだ見ぬほねのさま也となん
人々中。まことにかはかりの侍ざりつと。ことたかく申
給へば。さて扇のにはあらでくらげのなりとまことゆれば。

これはたかいへか。ことにしてんとてわらひ給ふ。かやう
の事こそ。かたはらいたき物のうちに入つべけれど。人ご
とをおとしそと侍ればいかゞはせん

是亦別の秀句のものたり
雨のうちにはふるころ。けふもふるに。御使にて式部のせ
かりし蔵人なれば云

うのぶつねまらりたり。例のしとねさし出したるを。つね
かたはらいたき物の内に
自登めきたる事いふは此双紙の片腹痛き物
の内に入て。こゝには待ますけれど。入毎
にな書落しそといへば。せんかたなくて書
しと云

式部のさうのぶつね
藤原信經は。中納言兼輔の曾孫。雅正の孫。
陸奥守爲長の子也。勅物云。信經。長徳元年
正月十一日藏人。三年正月式部丞云云

くらげのなり 増賀上人の哥「みつわさす
八十餘りの老の波瀾月のほれにあひける
かな」

せんぞくれう
懸障料にや。順和名云。藤原也。今案毛席
也。俗猿の皮にて作る云々。中巻記
せんぞくれう。せんぞくれいひて。足のよ
これし事をいふに付て。洗足料にこそなら
めき秀句に云云

かたはらいたく 旁類く人のいひしを含め
し詞云

おほきさいのみや
勅物云。皇后宮安子康保元年四月廿四日崩
卅八云々。村上の后。九條右大臣師輔の女。
皇太后宮は贈宮也

美濃守にてうせにける藤原のさきから
物云。時柄康保五年正月廿八日美濃守。長
保二年五月三日藏人兵部丞。被和作物所
別當

かたきにえりて。隠相手に擬ひ出て。い
つてさやうに参名出合へまぞと云。案求に

増訂枕草子春曙抄卷の五

よりも遠くおしやりてあられは。あれは誰がれうぞとい
めは。わらひて。かゝる雨のほり侍らば。あしがたつきて

いとふびんにきたなげになり侍りなんといへば。なごせ
んぞくれうにこそはならめといふを。これは御まへにか
しこうおほせらるゝにはあらず。のぶつねがあしがたの
事を申さざらましかば。えのたまはざらましとて。返々い

ひしこそをかしかりしか。あまなりなる御身ほめかなどか
たはらいたく

はやうおほきさいの宮に。ゑぬたまきといひて名たかきし
もづかへなんありける。美濃守にてうせにける藤原の時

から。藏人なりける時。下づかへともある所に立よりて。
これや此高名のゑぬたまき。なごせも見えぬといひける。返

事に。そればときからとも見ゆる名也。といひたりける
なん。かたきにえりて。いかでかざる事はあらん。殿上人

蔵也相手云 擬云

かたきにえりて。隠相手に擬ひ出て。い
つてさやうに参名出合へまぞと云。案求に

かたきにえりて。隠相手に擬ひ出て。い
つてさやうに参名出合へまぞと云。案求に

かたきにえりて。隠相手に擬ひ出て。い
つてさやうに参名出合へまぞと云。案求に

陸奥布隊に出合て。豊間陸士龍名のりしに。當座。日下荷崎鶴名のりしに似たり。又さりけるなめりき今迄かくいひ傳るる。今迄かく世に傳るは。此兩人の珍名の問答。實にさやうに有けるなるべしと。それ又時から。此ふぬたきか答へも。前段の清少の秀句を。のぶつれがいほせしといひしこと。是も亦時からがいほせしといふこと。是もふみも好も。ししを。時哥のよきも。題次第なるがごとく。あむたさが答へも。時からが詞によりてぞ口するさま。げにさる事ある事。是は時から哥よまぬ人なれば。題出して哥よめて物うがらせんといへる詞。手もいみしう。

上達部までも興ある事にの給ひける。又さりけるなめりき。今までかくいひつたふるはときとえたり。それ又時からがいはせたるなり。すべて題出しがらなん。ふみも哥もかしこきといへば。清少の詞。題がらるの理をいふ。さん。哥よみ給へといふに。いとよき事。ひとつはなれせん。おなじうはあまたをつかふまつらんなどいふほどに。御題は出ぬれば。あなおそろしまかりいでぬとてたちぬ。手もいみしう。まなもかんなもあしうかくき。人もわらひなごすれば。かんとてなんあるといふもさかし。

つくも所 作物所。細流云。金銀細工の所なるべし。若芥云。作物所在。通物所。四。春前當預熱食の時。此別當に補せられし比の事。勅物前註。物のみやうやるとして。細工人の。たへ時柄給やうなして仰付る。これがまにうらふまつらば。如此見苦しき手跡のまに。細工せば異風。に悪からんこと。時柄が手跡をわらはんといふこと。

しげいしや東宮に 中關白道隆公の御むすめ。三條院の春宮にておはせしころまわり給て。淑景會におはする事。榮花物照見はての夢の巻に。かくて攝政殿をば帝おとさなびさせ給れば。關白殿と聞えさす。中庭君十四五ばかりにならせ給め。東宮にまわらせ給ふありま。ま花々さめてたし。さてまわらせ給ひぬれば。宣耀殿はまひで給ひぬ。淑景會にぞすませ給。何事も。ややくやうなれば。いはむかたなくめでたし云々。是正暦三年の事。いづれは。[指]演云。いかいはめでたからざらんめでたからぬとなしとの恐。上に疑て次句に云

是より時から手もいみしうあしく事の物たり。つくも所の別當する比。たれがもとにやりけるにかあらん。物のゑやうやるとしてこれがやうに仕るべしとかきたるまんなのやう。もじの世にしらずあやしきを見つけて。それがかたはらにこれがまにいつかうまつらば。ことやうにこそあるべけれど。殿上にやりたれば。人々とりて見ていみしうわらひけるに。おはばらだちてこそうらみしか。これより別段。しげいしや春宮にまわり給ふほどの事など。いかなる事にか。めでたからぬことなし。正月十日にまわり給ひて。宮の御かたに御文などはしげうかよへど。御たいめんなどはなき。二月十日宮の御かたにわたり給ふべき御せうそこあれば。つねよりも御しつらひ心ことにみぎつろひ。女房なども皆よういしたり。夜なかばかりにわたらせ給ひ

げにめてたくうつくしき
前に后宮のうつくしき君なりきのたまひし
なうけて。げにき清少の見たる心と

「あなたにむきで
今清少ののぞく方にむきで。面白殿のおは
す」

めでたき御ありまきまをうちまみて
后宮淑景舎なき御形を。面白殿より二ひ見
給ふまき

「面白殿。洒落などいふと。下のまき
ふさあるも同くやうのにて人を笑はしむ
ることをいふと」

しげいしやのまにむきたるやうに
うらはしく行儀たしきまき。源氏若紫
に。殿上のありまきを只まにむきたる物の
姫君のやうにむきたる同し儀なるべし

せんようでんぢやうわ殿
これ淑景舎より登花殿へゆく道つゞきな
り。宜禰殿。和名云。藤原殿の北にあり。貞
親殿。和名云。常陸殿の北にあり。これを御
匣殿といふ云々。淑景舎は。昭陽舎の北。麗
景殿のうしろにあれば。其西宜禰殿。其西
貞親殿なきはりて。其西登花殿に至るべし。
今の御しつらひ登花殿の東の二間あり。
拾芥抄。宮城の圖。順和名等にて勘べし。

「おらきぬ。和名云。背子形如半臂。無履閣
之袷衣也。桐子漢語抄云。背子婦人袷衣。以
之給衣之」
北野の三位。菅原輔正。勘解由長官在野一
男現。神北野殿是也。正暦三年二月十五日
叙三位。公卿補任大系圖等にて有り

御手水雷のうれめ
百寮訓要抄云。采女と申は。國々より可憐
美女をえらびて天子のまむらす。御陪
膳などもゆるまる。女房云々。御手水
の役をもつむるなるべし

みぐしあげまかりて
河海云。昔は女御更衣以下常に髪を上る事
本儀也。也足軒云。内の女房は暗の時は髪
上して髪なごして髪をいたゞきへ上る云々
。后宮の御ぐしな女職人など役するまき

「すみのまより
清少のほのぞに見ゆるをの給ふ。古今」

いみしくけにめたくうつくしと見え給ふ。殿はうすい
ろのなほし。もえぎのおりもの、御さしぬき。紅の御ぞど
も。御ひもとしてひさしの柱にうしろをあて。こなたぎ
まにむきておはします。めでたき御ありまきまもさうち
あみて。れいのたばふれごきさせ給ふ。しげいしやの
るにかきたるやうにうつくしけにでるさせ給へるに。宮
いとやすらかに。いませこしおとまびさせ給へる御けし
きの。紅の御ぞに匂ひあはせ給ひて。猶たらひはいかでか
と見えさせ給ふ。御てうづまある。彼御かたは。せんようで
ん。ぢやうらわでんをどほりて。わらは二人。しもづかへ四
人してもてまあるるめり。からびさしのことなたのらうにぞ
女房六人はかりさふらふ。せはしとてかたへは御おくり
してみなかへりにけり。櫻のかさみ。もえぎこうはいなど
いみしく。かさみながくしりひきて。とりづきまあるらすい

取次
となまめかし。おり物のからきぬどもとほれ出て。すけま
まこのうまのかみのむすめ少將のきみ。北野の三位のむす
め宰相のきみなどぞちかくはある。あなをかしと見るほ
ど。この御かたの御てうづはんのうねめ。あさすうごの
も。からぎぬ。くんたい。ひれなどして。おもてなどいとしろ
くて。下づかへなどどりつぎてまあるほど。これはたおほ
やけしうからめいてをかし。おもものゝをりになりてみら
しあけまありて。藏人どもまかなひのかみあけてまあるら
するほどに。へだてたりつる屏風もおしあけつれば。か
まみの人。かくれみのとられたる心ちして。あかずわびし
ければ。みすときちやうどの中に。柱のもとよりぞ見
奉る。きぬのすそ裳などからきぬはみなみすのうとにお
し出されたれば。殿のはしのかたより御らんじ出して。た
そや霞のまより見ゆるほど。どがめさせ給ふに。少納言が

して、よふ道と
「可」うちとは打橋と。源氏に多くあり
殿上より

此段原本には前の段に書つ、いけぬ
はやくおちにつけり
明詠。大庚嶺之梅早落誰問粉粧。これは紀
納言長谷推の時序の文也。イ木前段につい
けし本にしたがはば、その内階よりおち
ぬべき折に合せたれば、早落にけりと答た
るにや

二月ついでり
是も正暦三年の比前の段とかな下比にや
かうしてきふらふさいへば
かゝのこさくの用事ありてまわりしさいふ
公任の君。宰相中將殿の
公任と宰相中將殿と兩人のおこせ給ふとい
ふ。公任は堀河相國賴忠公の男。和漢の
才人

宰相中將は登信卿にや
すこし春ある。雪など降流て春色の少き心
也。此詞を取て俊成卿一埋火にすこし春あ
る心して夜深き冬を慰る歌
難々すこし春あるとばそれく
此連歌をこせ一座の人々を。誰にかかは
すこし春あるとばそれく
おほさのこもりたり
帝の渡御にて后宮の御變なりしと

おほさのこもりたり
帝の渡御にて后宮の御變なりしと
おほさのこもりたり
帝の渡御にて后宮の御變なりしと

おほさのこもりたり
帝の渡御にて后宮の御變なりしと
おほさのこもりたり
帝の渡御にて后宮の御變なりしと

おほさのこもりたり
帝の渡御にて后宮の御變なりしと
おほさのこもりたり
帝の渡御にて后宮の御變なりしと

殿上より梅の花のみなちりたる枝を。これはいかんとい
ひたるに。たゞはやくおちにけりといらへたれば。其詩を
けし詩を誦しと云之黒戸瀧口戸の西にあり前委
じゆじてくろごに殿上人いとおほくあるを。うへの御
前さかせおはしませて。よろしき哥などよみたらんより
も。かゝる事はまごりたりかし。よういらへたりと仰らる
も。かゝる事はまごりたりたりかし。よういらへたりと仰らる
も。かゝる事はまごりたりたりかし。よういらへたりと仰らる
も。かゝる事はまごりたりたりかし。よういらへたりと仰らる

二月ついでり風いたくふきて空いみしくくろまに。雪す
こしうちよりたるほど。黒戸瀧口戸の西にあり前委
てふらふといへば。よりのたるに。公任の君。宰相中將の
しとあるを見れば。ふとこころ紙にたゞ
すこし春あるとこころすれ
とあるは。ゆにけふのけしきいれいとよくあひたるを。これ
がもとばらかゞつくとからんと思ひわつらひぬ。誰々か
ととへば。それくといふ。みまはづかしき中に。宰相中
將の御いらへばはらかゞつくとをなしひにひ出んと心ひと

とあるは。ゆにけふのけしきいれいとよくあひたるを。これ
がもとばらかゞつくとからんと思ひわつらひぬ。誰々か
ととへば。それくといふ。みまはづかしき中に。宰相中
將の御いらへばはらかゞつくとをなしひにひ出んと心ひと

とあるは。ゆにけふのけしきいれいとよくあひたるを。これ
がもとばらかゞつくとからんと思ひわつらひぬ。誰々か
ととへば。それくといふ。みまはづかしき中に。宰相中
將の御いらへばはらかゞつくとをなしひにひ出んと心ひと

とあるは。ゆにけふのけしきいれいとよくあひたるを。これ
がもとばらかゞつくとからんと思ひわつらひぬ。誰々か
ととへば。それくといふ。みまはづかしき中に。宰相中
將の御いらへばはらかゞつくとをなしひにひ出んと心ひと

とあるは。ゆにけふのけしきいれいとよくあひたるを。これ
がもとばらかゞつくとからんと思ひわつらひぬ。誰々か
ととへば。それくといふ。みまはづかしき中に。宰相中
將の御いらへばはらかゞつくとをなしひにひ出んと心ひと

五十一段

千日のさうじはじむる日。はむびのをひねりばじむる日。
御嶽精進なごにや
はんひのをひれり始る
和名云。半臂は衣名也。橘葉葉云。或抄云。
近代半臂以二小緒結之。往古之例以二大緒
二筋結之。今世少三知人云々。猶委今案照
半臂といふもあり。冬は綾夏は生の綾を用

千日のさうじはじむる日。はむびのをひねりばじむる日。
御嶽精進なごにや
はんひのをひれり始る
和名云。半臂は衣名也。橘葉葉云。或抄云。
近代半臂以二小緒結之。往古之例以二大緒
二筋結之。今世少三知人云々。猶委今案照
半臂といふもあり。冬は綾夏は生の綾を用

御嶽精進なごにや
はんひのをひれり始る
和名云。半臂は衣名也。橘葉葉云。或抄云。
近代半臂以二小緒結之。往古之例以二大緒
二筋結之。今世少三知人云々。猶委今案照
半臂といふもあり。冬は綾夏は生の綾を用

千日のさうじはじむる日。はむびのをひねりばじむる日。
御嶽精進なごにや
はんひのをひれり始る
和名云。半臂は衣名也。橘葉葉云。或抄云。
近代半臂以二小緒結之。往古之例以二大緒
二筋結之。今世少三知人云々。猶委今案照
半臂といふもあり。冬は綾夏は生の綾を用

ふ。昔はうす物をたいて付といへり。但此草紙にいへるは。往古の大権二筋をもちて結ぶといへる時の事なるべし。是をひれるに通なる故あるにや。今世知人まれなりと云々可尋之

十二年の山こもり 後辨の問書にも有前註
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもささりければ。さあるをいふなるべし

まさひる 源方弘左馬權頭時明男前註
なにしに。いへるものにはつかはる。いそ人にかく笑はる。方弘にはいひてつかはる。いそ

人よりはよくてきたるを
異本きたるを紙燭さしつけやきあるはこれ
は。こま人にさあり
「訂」万及びイ本にも。此の十一字ありて然して。是は。こま人に云云さあり
是は。こま人にさせばや
方弘には似合すさなぶりていふと
里にさのあものさりに
方弘。殿上に宿直して里亭へ夜の輪取にや
るなるべし

ひさますがめに二ますはいるや 一升入へ
き瓶に二升はいらうと。一人して二人の
物ばえもつまじと。瓶は方弘をさりあり。
人の力はさざりなき事なもしらうといへるま
ことには笑はるべし

かまごにまめやくふたる
せはしき事のため。こまにいふにや
此殿上のすみふでは
被返尋がいんさて懸筆のなければ尋るまで
いふにや

女院なやませ 湯東三條院也。一條院の御
母前註
御つかひにまわりて
宮の御いたよりの御見まひの使に方弘がま
わりしなるべし
四五人ばかりさいふに
「訂」原本にはさも下なし。今古本に從ひて加
へつ

さてはいぬる人さもぞ
其外には退出の人々ありしと。事もなき
返事なれば笑ふと
人まによりきて
人のなき間に方弘清少のまに來てこ
わび君

「増」弘云。此の「そは指辭のこそは異之。
こそよむべし。源氏夕がほの巻に「右近
の君こそまづもの見たまへ」とあるも同意
也。こは俗にいふ君御ソレといふ戦
むくるいめに。 驅籠全身みななたへより
給へるの心

ちもくの中の夜 餘目は三ヶ夜せなばる
一中の夜之前委註
さうだいのさしき 燈籠の下にししく物

「増」弘云。後辨卷十懸二よみ人しらすの問書に「なごこのほご久しうありてまうてきてみ心のい
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもさ
さりければ。さあるをいふなるべし

「増」弘云。後辨卷十懸二よみ人しらすの問書に「なごこのほご久しうありてまうてきてみ心のい
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもさ
さりければ。さあるをいふなるべし

よむははるなるべし
とりしてよみはじむる。十二年の山こもりのはじめての
はる日

「増」弘云。後辨卷十懸二よみ人しらすの問書に「なごこのほご久しうありてまうてきてみ心のい
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもさ
さりければ。さあるをいふなるべし

是より例の筆すまびの物がたりと
まさひるは。いみしく人にわらはる。物哉。おやなどい
わらはる。事なと。 方弘が供の侍など
にきくらん。ともにあつくものども。いと人々しきをよび
人々のよびて
よせてなにしにかよるものにはつかはる。いかに
はゆるなどわらふ。ものいとよくするあたりにて。下がさ
ぬの色。うへのきぬなども。人よりはよくてきたるを。是は
こと人にきせはやなどいふに。ゆにぞ詞つかひなどのあ
やしき。里にどの物とりねやるに。男二人まかれといふ
に。ひとりしてとりねまかりなんものをとといふに。あやし
の男や。一人してふたりのものをはいかでもつべきぞ。ひ
とますがめだ。二ますはいるやといふを。なやう事とする

人ばなけれど。いみしうわらふ。人のつかひきて御返事と
くといふを。あなにくの男や。かまごにまめやくべたる此
殿上のすみ筆は。何ものいぬすみかくしたるぞ。いひさけ
ならばこそはしうして人のぬすまめといふを。又わらふ。
女院なやませ給ふとて。御使にまわりてかへりたるに。あ
んの殿上人はたれ。かありつると人のとへは。それか
れなど四五人はかりといふに。又はととへは。さてはいぬ
る人どもぞありつるといふを。またわらふも又あやしき
事にこそはあらめ。人まによりきて。わが君こそ。まづ物さ
こえん。まづ。人のの給へる事ぞといへは。何事にかと
てきちやうのもとによりたれば。むくるごめにより給へ
といふを。五たいごめにとなんいひつると云て又わらふ。
ちもくの中の夜。さしあふらするに。さうだいのうちしき
さふみてたてるに。あたらしきゆたなれば。つようどら

「訂」原本にはさも下なし。今古本に從ひて加
へつ

さてはいぬる人さもぞ
其外には退出の人々ありしと。事もなき
返事なれば笑ふと
人まによりきて
人のなき間に方弘清少のまに來てこ
わび君

「増」弘云。此の「そは指辭のこそは異之。
こそよむべし。源氏夕がほの巻に「右近
の君こそまづもの見たまへ」とあるも同意
也。こは俗にいふ君御ソレといふ戦
むくるいめに。 驅籠全身みななたへより
給へるの心

ちもくの中の夜 餘目は三ヶ夜せなばる
一中の夜之前委註
さうだいのさしき 燈籠の下にししく物

「増」弘云。後辨卷十懸二よみ人しらすの問書に「なごこのほご久しうありてまうてきてみ心のい
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもさ
さりければ。さあるをいふなるべし

「増」弘云。後辨卷十懸二よみ人しらすの問書に「なごこのほご久しうありてまうてきてみ心のい
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもさ
さりければ。さあるをいふなるべし

「増」弘云。後辨卷十懸二よみ人しらすの問書に「なごこのほご久しうありてまうてきてみ心のい
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもさ
さりければ。さあるをいふなるべし

「増」弘云。後辨卷十懸二よみ人しらすの問書に「なごこのほご久しうありてまうてきてみ心のい
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもさ
さりければ。さあるをいふなるべし

「増」弘云。後辨卷十懸二よみ人しらすの問書に「なごこのほご久しうありてまうてきてみ心のい
さつらきに十二年の山こもりしてなむ久しうきこたざりつるさいひ入たりければ。よびいれて物なごいひて返しつかはしける。またおこもさ
さりければ。さあるをいふなるべし

之。すなはち油草之
つようさちへられ
油草に方弘が足をつけまつはされし
したうつ。和名藤亦作。藤和名之太久頭足
衣也。桃華葉葉云。藤葉の小袖を着する時
は、藤葉を用ふる。宿老は白き平絹のねりは
りたる也云々
頭つき給はぬほごは
殿入頭は。貫首まで殿上の管領ならば。盛
盤につきて食する時も。頭のつゝさるには。
殿上人何もつかぬ。方弘は頭より先に豆
なくひしこ

あふさかのせき。近江云。忍熊王武内宿禰
と戦まけて退し。武内宿禰追てこゝにて
行達て終に忍熊王を亡たる故逢坂と云。日
本紀九有
くきたの關。細流云。奥州の菊田關也。
俗にくきたのせきと云ふ。
たごしへなくこそ。たごしへがたなき心。
只こゆるさといふ名も。障るさといふはたご
へくら入がたき心
はこりのせき
増源云。後拾遺錄一よみ人しらす。しるら
めや身こそ人めなほはこりの關に涙はこま
らざりけれ
よこはしりの關
増源云。無盛集
「よこはしり清見の關のよこはしりにいづこ

へられにけり。さしあゆみてかへれば。やがてどうだいば
るゆみ。方弘がしたうつのおげゆく
たふれぬ。したうつはうちしきねつきてゆくにまこと
道こそしんどうしたりしか。頭つき給はぬほどは。殿上の
大はん人もつかず。それにまごひろはまめひともりを
とりて。こさうじのうしろにてやきらくひければ。ひきあ
してこ
らはしてわらはるゝ事ぞかきりなまや
せきは
あふさかのせき。津の國云。伊勢云。くきたの關。しら
川のせき。衣の關。たごこそこのせきは。はこりのせきとた
ごしへなくこそおほゆれ。よこはしりの關。きよみがせき。
見るめの關。よしなくのせきこそ。いかにおもひ返した
るならんといとしらまほしけれ。それをなこそその關とは
いふにやあらん。あふ坂などをさまで思ひ返したらはわび
しからんかし。あしがらのせき
入雲と相模云々

おほあらしのもり
大荒木 八雲山城云々
しのびのもり。未知。但八雲しのぶの藤陸
奥云々。是を書たがへしにや忍びの岡は河
内云
こひの森
増源云。拾遺裏に右大臣願光
「こひにたにつれくさなく部公ましてこ
いひの森はいかにぞ」
こからしの森
増源云。古今六帖
「入しれぬ思ひするもの國にこそみなこが
らしのもりは有けれ」
いはせのもり。盤瀬。八雲云。大和又播津
信濃にもあり云々
増源云。新勅撰及に田原天皇
「神なびのいはせのもりの時鳥ならしとの岡
にいづかさな心」
くるべきの森。八雲にもしらす
神なびの。神南備縣云。津國今かうないこ
いふ所云
うきたの森
増源云。万十
「かくしてやなほやみな大荒木のうき
たの森のしめならなく」

おほあらしの森。しのびのもり。こひのもり。こがらしの
森。しのだのもり。いくたの森。うつきのもり。きくたのも
り。いはせの森。立聞のもり。とまはのもり。くるべきのも
り。神なびの森。うたねのもり。うきたのもり。うへ木のも
り。いはたの森。かうたての森といふが。みよとまるとそ
あやしけれ。もりなどいふべくもあらず。たゞひと木ある
を。何れつけたるぞ。こひのもり。こはだのもり
卯月の晦日に。はせ寺にまうづとて淀のわたりといふも
のせしかは。舟に車をかきするてゆくに。しやうぶこも
などの末みじかく見えしき。とらせたれば。いとながより
ける。こもつみたるふねのありきしこそらみしうさかし

信賢 六條左大臣重信公の息宮方敏種可御

たいきよき衣を 誰もやつれて参るにのぶ
かたは淨衣にてもうでんきていゝる詞
かならずしもあしくてよき 金峯山の魔王
も必悪くやつれてまわれよきはよもの給は
すべし

あなやまぶき

桃華葉。衣色異脱云。青山吹波青真黄此衣

二月にも用る事あり云々

たのみつのもりのすけ

勅物云。隆光主殿助長保三年藏人年廿九。

三條右大臣定方より五代左衛門佐宣季の息

云々

すわらん 桃華葉云。水干事。紗にても

不相生にても又色は白くても何にても大納

言の時まで内々に着用之

いひけんになつてはすもき とき衣きてまじ
でんになつて事あらんといひしにたのほ
すも有ける職の心云

十月一日のほど

時國風七月節云。十月蟬蟬入三秋林下

いみしき人とまきとゆれど。こよなくやつれてまうづとこ
そはしりたるに。右衛門のすけ信賢はあぢきなき事なり。
たゞきよき衣まきてまうてんに。なまうことかあらん。か
ならずよもあしくてよきみたけのたまはじとて。三月つ
ごもりひらさきものいとこまきとしぬき。しろき。あきやま
ぶきのいみしくおどろくしきまどにて。たかみつがど
のもりのすけなるは。あきいろの紅のきぬすりもどろか
したるするかんはかまにて。うちつゞきまうでたりける
に。歸る人もまうづる人も。めづらしくあやしき事に。すべ
て此山道にかゝるすがたの人見えざりつとあさましが
りしき。四月晦日にかへりて。六月十餘日のほどに筑前の
かみうせにしかはりになりしこそ。けにいひけんれた
がはずもとまきとえしか。是は哀なる事にはあらねども。
みたけのついで也。九月三十日十月一日のほどに。只ある

「ケリ」夜寒に秋なるまゝによりる
「あ」の道まじりく「四行

秋ふかき庭の露草に 家持集。松陰の露草

のうへの白露なけたすて玉にぬく物にの

も」

川竹の風に イ本夕暮曉に川竹の風ふか

れたるめまましてきていたる事あり。此本ま

心いん

「増」源云。此所のすてといふ詞は。夕ぐれ

とあつつきを夜と。三ながら川竹の音のあ

はれなるをいふ

弘云。かは竹はたも竹のこと。漢字にて

漢竹。皮竹。川竹などもかけ文字になつ

むことなれ

二十六七日 はつあまむむのなむき

よむし

年うちすしたる

年者過たる

明味。香火一燈灯一盞白頭夜禮佛名想云々

いさあらうはあらぬ風の

一脱是も荒たる家の葺繕なま生たる所にふ

く心なるべし

寺にこもり

三井寺にや。いつくにてん

かなきかにきつつけたるきりぎりすのこゑ。にはどりの
子いだきてふしたる。秋ふかき庭のあさぎに露のいろい
ろ玉のやうにてひかりたる。川竹の風にふかれたる夕ぐ
れ。あかつきにめましたる夜などもすて。おもひかは
したるわかき人の中に。せくかたありて心にしもまかせ
ぬ。山里の雪。男も女もまよひけるがくろき衣きたる。二十
六七日はかりのあかつきに。物がたりしてあかして見
れば。あるかなきかに心ほそけなる月の。山のはちかく見
えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うちすしたる僧
たちのおこなひしたる。あれたる家にむららひかより。
よもぎなどたかくおひたる庭に月のくまなくあかき。い
どあらうはあらぬ風の吹たる」
是より例の筆すまひん
正月に寺にこもりたるはいみしく寒く。雪がちに氷たる
こそまかしけれ。雨などのふりぬまきけしきなるはいと

くればし 樽殿にや初瀬にある物
 うつは物置云。樽にのほり給ふ入るはどの
 くれはしは。色々の木をまげくにつく
 て。下より流る。水は涼しく見ゆへく作る
 云々

おひばりしたる 小箱に御はかりにて衣
 きざるにや。イもは夜斗おひたるにや
 【増】演接。源氏浮舟に。おひつちのけつ云々。
 神佛のまへにしておひおひさふものした
 るとあれば。此説ならん。下文におひつ
 ちをつけてながみ奉るに。清少みづから
 ちまをいへり。されどもに女のこころ。
 一は。いづれおひなれ法師のまへ
 【町】弘云。註に。おひなれ法師のまへ。
 笑の假字もおひなるを。演接に従ふし
 つ。みもなく。少のつ。し。みもなく。意
 中。心。の。い。つ。も。なく。無。意。也。あ。や。つ
 け。の。な。ま。な。

【町】弘云。此註非。つ。み。なく。を。少。の。つ。
 し。み。なく。の。こ。は。甚。し。く。誤。解。の。こ。は。万。葉
 五の巻好去好來の註に。つ。み。なく。と。ま。ま
 くいまして。こ。有。て。障。事。なく。な。い。ふ。意。の。
 平安にの意もあり。故に無意と大意は似
 よひたり

俱舎の下
 大藏經目指要録七云。俱舎一巻。天親
 菩薩造也。就一切有部作八品。一分別界品。
 四十四項。二分別根品七十四項。三分別世
 界品九十九項。四分別業品一百三十一項。五
 分別國界品六十九項。六分別聖賢品八十三
 項。七分別智品六十一項。八分別定品三十九

わろし。ぱりせをどにまうる。つはねをどするほどは。く
 れはしのもとに車引よせてたてるに。おひばかりしたる
 わかき法師はらの。あしたとらふ物さばきてらふ。かつ
 しみもなくおりのほるとて。何ともなきを經のはしうちよ
 み。俱舎のじゆきすこしらひつゞけありくこそ所につけ
 てをかしけれ。わがのほるはらとあやうく。かたはらによ
 りて。かうらんおこへてゆくものさ。只板じきまどのやう
 に思ひたるもをかし。つはねしたりなごらひて。くつども
 もてきておろす。せぬかへさまにひきかへしなごしたるも
 あり。も。からきぬ。なごこは。く。し。く。さ。う。ぞ。ま。た。る。も。あり。
 深履和名 中律和名中靴桃花
 ふかふつ。ぱうくは。なごばきて。らうのほごなごくつすり
 いるば。うちわたりめきて又をかし。うちとなごゆるさこれ
 たる若き男ども家の子など。又立つゞきて。そこもどはか
 ちたる所に待り。あがりたるなごをしへゆく。何もの
 外者

一。已上六百項爲御之本也
 【増】弘云。こは上巻と下巻とをたのへて替用
 したるがみしきないふ
 ぶつ。つ。は。う。く。は。和名云。深履。其。頭。想。者
 謂之。中律。桃華。葉。云。靴。深。香。同。事。也
 云々。靴。履。は。赤。地。の。錦。靴。帯。は。ひ。き。は。た。の
 皮也。昔はかな物あり。節會の時内舞外舞
 の公卿。若は行幸供奉の時用之。
 又云。牛靴は御幸の供奉直衣騎馬の時用之

大ふせぎの中を
 觀音のちにする所のさま
 【増】弘云。御堂のうち内陣と外の方との隔て
 にあるまご垣のまご。いづれの寺の御堂に
 も有もの
 まづ心もおこさる
 其たふとまごまを見より先信仰の心發起
 すること

ていごにふみなまいて
 御灯文なるべし。願文など。源氏玉のつ
 らの巻にも初瀬よてみあがし。みみの事あり
 せめてしほり出したる聲々
 【増】弘云。上の二巻よせみごに。ごあるに同
 下。迫りたる聲にてみあがし。文をみあぐ
 るさま
 千ごうの御心さし 千燈もす事なるべ
 し。イ本千たんと有。ま旨御本にも千灯と
 あればイ本用へからず

かあらん。いとちかくしあゆみ。ごらだつものなごをし
 ばし。人のおはします。かへはまごらぬわさなりなごら
 ふま。ゆにとてすこし立おくるもあり。又まもられず
 我まづとく佛の御まへにとゆくもあり。つはねにゆくは
 ども人のるなみたるまへまごほりゆけは。いとうたてあ
 るに。大ふせぎの中を見いれたる心ちいみしくたふとく。
 なごて月比もまうです過しつらんとて。まづ心もおこさ
 る。みあかし常灯にはあらで。うちに又人の奉りたる。おそ
 ろまごまでもえたるに。佛のまらくと見え給へるいみ
 しくたふとゆけ。てごごにふみまごさへけてららはんむ
 かひてろまごちかふも。さばかりゆすりみちて。これほどと
 りはなちて聞わくべくもあらぬに。せめてしほり出した
 る聲聲の。ごすがに又まごされず。千ごうの御心さしはな
 がしの御ためとわづかひきてゆ。おびうちかけてまがみ

おびつちりつけて
おけおびのまきにて敷すのたのつるる
東なるへし
「世」上に委しく入り

法師のよりきて
清少の宿坊の法師の寄來たる。願文讀し
人
しつゝの人こもちを給へり。是も清少の
宿坊の法師我もまた又こもちを給へりする人の
事なごのたりきかせて歸るまま

はんさう
區ハンザツ和名云。柄中有道可三以注水之
器也。俗用三椀字。所出未詳。或説云。有柄
半挿其内。故呼爲半挿。
御さも人はりの坊に
堂にての清少の肩掛ければ。供の人々は宿
坊へさそふ

すきやうの鐘のせ
誦經鐘也。誦經の經をよむ事也。源氏浮舟
卷に。すきやうののれの風につきてきこえ
くるなつくつくし聞ふし給へり云々
我ななりさきけば
我がましましむる所願の鐘の音成けりまこ

たひくち出さまほし
彼男の忍びのにおつぎ經をも高つち出す
な。堅高く固にたたままほしとせん
けさやうに

あさやうにあらはなる

日比こもりたるに
前にも日比こもられしなるへし

はやうは有し
前にはやうに晝夜さはびしはなりし
となるへし

かひないきたつく
昔は十二時に貝を吹した。千載集に「けふ
も亦午の貝を吹つなれひつ下のあゆみ近
付ぬらし」赤染衛門
すきやうの物。誦經の布施物なり。浮舟の
まきに。御すきやうをせまを給へりて其れう
の物文なき書へりてもたたり云々
たう童子

堂童子は。法會の時花笠をさひなひをさめ
なごする物也。江次第に佛事に見えたり。
り。禁中の法會に其座以下。禮圖抄に有
御さんたひらに
御座の祈禱なご申さまこ。平に守給へり申
教化などしたる
法理なべて此佛驗むなし。るま下き由を
教化しきとするにや

教化などしたる
法理なべて此佛驗むなし。るま下き由を
教化しきとするにや

奉るに。こゝにかうごぶらぶとひいて。しきみの枝ををり
てもてきたるなどのたふとまきなども猶をかし。犬ふせぎ
のかたより法師よりきて。いとよく申待ぬ。いくかはかり
こもらせ給ふべきなどごふ。しかくの人こもらせ給へ
りなどいひきかせていぬる。すなはち火をけくた物など
もてきつゝかす。はんさうに手水などいれてたらひの手
もなきなどあり。御さもの人ばかの坊になどいひてよび
もてゆけば。かばかりとぞゆく。すきやうのかねのおと我
ななりとまきけばたのもしくまきこゆ。かたはらによるしき
男のいと忍びやかにぬかなどつく。たちるのほごも心あ
らんと聞えたるが。いたく思ひ入たるけしきにて。いもね
すおこなふこそいとあはれなれ。うちやすむほごは經高
くはまきこえぬほどによみたるもたふとけなり。たかくう
ち出せまほしきにましてはなごまきけさやかにま

清少のこもりたるに
宿坊より持來て借す區ハンザツ半挿もつく手水入る物也
宿坊より持來て借す區ハンザツ半挿もつく手水入る物也
區和名手洗同
御さもの人こもらせ給へりする人の
事なごのたりきかせて歸るまま

はんさう
區ハンザツ和名云。柄中有道可三以注水之
器也。俗用三椀字。所出未詳。或説云。有柄
半挿其内。故呼爲半挿。
御さも人はりの坊に
堂にての清少の肩掛ければ。供の人々は宿
坊へさそふ

すきやうの鐘のせ
誦經鐘也。誦經の經をよむ事也。源氏浮舟
卷に。すきやうののれの風につきてきこえ
くるなつくつくし聞ふし給へり云々
我ななりさきけば
我がましましむる所願の鐘の音成けりまこ

たひくち出さまほし
彼男の忍びのにおつぎ經をも高つち出す
な。堅高く固にたたままほしとせん
けさやうに

あさやうにあらはなる

日比こもりたるに
前にも日比こもられしなるへし

はやうは有し
前にはやうに晝夜さはびしはなりし
となるへし

かひないきたつく
昔は十二時に貝を吹した。千載集に「けふ
も亦午の貝を吹つなれひつ下のあゆみ近
付ぬらし」赤染衛門
すきやうの物。誦經の布施物なり。浮舟の
まきに。御すきやうをせまを給へりて其れう
の物文なき書へりてもたたり云々
たう童子

堂童子は。法會の時花笠をさひなひをさめ
なごする物也。江次第に佛事に見えたり。
り。禁中の法會に其座以下。禮圖抄に有
御さんたひらに
御座の祈禱なご申さまこ。平に守給へり申
教化などしたる
法理なべて此佛驗むなし。るま下き由を
教化しきとするにや

教化などしたる
法理なべて此佛驗むなし。るま下き由を
教化しきとするにや

奉るに。こゝにかうごぶらぶとひいて。しきみの枝ををり
てもてきたるなどのたふとまきなども猶をかし。犬ふせぎ
のかたより法師よりきて。いとよく申待ぬ。いくかはかり
こもらせ給ふべきなどごふ。しかくの人こもらせ給へ
りなどいひきかせていぬる。すなはち火をけくた物など
もてきつゝかす。はんさうに手水などいれてたらひの手
もなきなどあり。御さもの人ばかの坊になどいひてよび
もてゆけば。かばかりとぞゆく。すきやうのかねのおと我
ななりとまきけばたのもしくまきこゆ。かたはらによるしき
男のいと忍びやかにぬかなどつく。たちるのほごも心あ
らんと聞えたるが。いたく思ひ入たるけしきにて。いもね
すおこなふこそいとあはれなれ。うちやすむほごは經高
くはまきこえぬほどによみたるもたふとけなり。たかくう
ち出せまほしきにましてはなごまきけさやかにま

屏風などの高さ
彼通夜の人の肩をうごはしたためなるべし
いとよくしんたいし
通退也屏風の高大なるをよよくもてあつひ
たるさまなり

そよ／＼とあまた
うきは離りし人の今歸るさまなり

あひまやうづまひりたるさま
愛敬めき臨たること。愛敬有なるはほらし
さ置のさまなり

めりとの名母なごうち出たらん 彼らこの
乳母の名なよび母なごいひ出たるなり
これならんさいさしらまほし 其めの母
なごは是ならんを見出知たさまなり

其寺の佛經
たとへば。初編にては觀音經。ついでに

はらのもたふくもあらぬ屏風などのたかき。いとよく
しんたいし。たよみなどほうとたておくと見れば。たごつ
ほねに出で。犬ふせきにすだれをさら／＼とかくるさま
なごぞいみしく。しつけたるはやすけなり。そよ／＼とあ
またおりて。おとなたちたる人のいやしからずしのびや
かなる御けはひにて。かへる人にやあらん。そのうちあや
うし。火の事せいせよなごいふもあり。七つ入つばかりな
るまのこごのあゝぎやうづみおこりたる聲にて。さふらひ
人よびつけ物なごいひたるけはひもいとをかし。又みつ
はかりなるちごのねをびれてうちしはふきたるけはひ
もうつくし。めりとの名母なごうち出たらんも。これなら
んといとしらまほし。夜ひとよいみしうのしりおこな
ひあかす。ねもいらざりつるま。ごやなごはてし。すこしう
ちやすみねぬるまに。其寺の佛經をいとあら／＼しう

ては。臨誦經のたぐひなり

ぬれうしたる
國邊也。この青鏡の指貫きたるを。侍の
のたぢめり湯仰したるさまなり

そのくつはれごまなごの
女中の扇のわたりに立さまよひのそくさま
なり

別當などよびて
其寺の別當に其扇の事なごいひて
えは物さに見えずかし
心あさま若人さに見えずいひて
敬ありげなるさまなり

たかくうち出てよみたるに。わざとたふとしどもあらず。
すぎやうじやだちたる法師のよむなめりとごふどうち驚れ
てあはれにきこゆ。又よるまごはかほしらで。人々しき人
のおこなひたるがあをにびのさしぬきのはたはりたる。
白き衣ごもあまたきて。子ごもなめりと見ゆる若きをの
このをかしううちうごきたる。わらはなごして。さぶら
ひの物ごもあまたかしてまりのぬうしたるもをかし。か
りそめに屏風たてぬかなごすこしつくめり。かほしら
ぬは誰ならんといとゆかし。しりたるはさなめりと見る
もをかし。わかき人ごもは。とかくつはねごもまごのわた
りにさまよひて。佛の御かたにめ見やり奉らず。別當など
よびてうちごめき物がたりして出ぬる。えせ物ごは見
えずかし。二月廿日三月朔日ご。花さかりにこもりたる
もをかし。きよけなるまのこごの忍ぶごみゆる二三人

直垂。或は袴衣などにも。櫻は表白裏赤花。柳は表白裏青。

「此草紙人の家につきくしきものさうぞくよくしたるまぶくる」さあるを見る人しすもごるかし。後によりまなみだれをたさなるべし。

「増」弘云。しのぶもぢすりさいふも。もごるかして扱れる事。故にもごるかしも亂らし扱りの事。

「入」々。金鼓和名云。最勝經云。妙寶菩薩於夢中見大金鼓云々。こなる佛事に樂人物の音を發せんとして。胸背金鼓をうつ。又頭師音聲を發せんとして。金鼓を打事江次第十三に分ゆ。

「増」源云。此はそやかなるものは今いふ鐘木なるべし。くしては金鼓にぐして。金鼓はたいきかねいってはいらん。

此方には見付たれどもあなたに後見付れば我とはいかでしらん。すべて例ならぬ所に寺籠にかきらす。惣て常ならぬ所に旅居なごせんに。我一人斗籠るはかひなし。同じ心の女友達なごしてありたき。

櫻青柳などをかしようて。くよりあけたるさしぬきのすえもあてやかに見なごる。つぎくしきさのこにさうぞくをかしようしたるまぶくるいだかせて。ことねりわらばごも。こうはいもえぎのかりきぬに。いろくのきぬ。すりもごろかしたるはかまなどきせたり。花などをさらせて。侍めきてほそやかなるものなごらしてごんごうつこそをかしけれ。さごかしと見ゆる人あれど。いかでかはしらん。うちすきていぬることさすがにさうくしけれ。氣色を見せまし物をなごいふもをかし。かやうにて寺ごもり。すべて例ならぬ所に。つかふ人のかぎりしてあるはかひなくこそおほゆれ。猶おなごほどにて。ひとつ心にをかしき事

もさまぐいひあはせつべき人。かならずひとりふたりあまたもさそはまほし。其ある人の中にも。口をしからぬもあれども。めなれたるなるべし。さごこなごもと思ふに

ことそあめれ。わざとたづねよびもてありくめるはいみしことろづきなきもの

まづりみそぎなどすべてをのこの見る物見車に。只ひとりのりて見る人こそあれ。いかなる人にかあらん。やんごとなからずごも。わかきさごごもの物ゆかしと思ひたるなど引のせて見よかし。すきかけにたゞひとりかゞよひて。心ひとつよまもりたるらんよ。いかばかり心せはくけにくきならんごごおほゆる。物へもいさ。寺へもまうづる日の雨。つかふ人などの我をばおほさず。何がしこそ只今時の人などいふをほのきうたる。人よりはすこしにくしごおもふ人の。おしはかりごごうちし。すゞろなる物うら見しわれさかしがる」

わびしげに見ゆる物

六七月のうまひつじの時はかりに。きたなげなる車にえ

五十九段

「此段衍文。た一人のりてさいふ以下は前のにくき物に有。其外はかくにくはしくあれはこには註せず」

「増」源云。末に心づきなきものさあるいごくはしければ。こはまきれていりたるなるべし。萬歳抄には。こにのみ此段をあけて。末のくはしき段を脱せしは。なかくに誤なるべし。いつれにも同下題二所にあるべきやうなし

六十段

「増」わび歎息の意。けはやうす。歎息す入きやうすといふ義にて。俗にイナニムル。イナニ思フなどの意

はりむじる 雨覆ひ服車などにむしるをは
る事四宮記に有共たぐひなり

「たる 乞見。和名云。列子云。齊有貧者一
幣乞於城市。乞見云。天下之辱莫過於是」
和名加多非
「増」弘云。土佐日記。二月四日の條に。日もえ
はいらはわつたぬなりけり」と見えたり

せんくしたる 前座之。馬にのりて供養し
たる也

なつはされじよし
雨にぬれても冬のつうに寒くはらばなるん

すわんのかま 近衛の番長也。撰聖野云。
近衛顯身の上臈を番長といふ。泰氏下毛氏
等今に顯身たる也。勢東は。稱。衣冠。又は狩
衣に花をつけたり。時に依て出立様々
のふのけさ

稱毀袈裟。稱和名云。俗云。能不。智度論云。
五比丘白佛言。齊三何等衣。佛言。應著袈裟。
衣。袈裟。和名毀袈裟。此云無垢衣。
又功徳衣。俗云介佐

ての少將 出居次將は。賭博などに習熟し手筋をきりて。主上の出御に警備を勤す。江次第に。五月の最勝講。七月の相撲節などにも。出居
次將着座の事あり。是らの折あつげなるにや。出居の座段上にあり。盤圓抄に委
きんのふくる 河海云。管絃の器管段に在る。事本條下尋。すほうのあざり 修法圖開樂。諸聲なき琴する僧と
あつげのあざり 和名云。殿治打。金鼓。爲。器也。俗云。殿治。世也。くろむらうつも。六七月には。暑するべけれど。あつげといへば。又あつげなる
にや

せ牛かけてゆるがしゆくもの。雨ふらぬ日ばかりむしるし
たる車。ふる日ばかりむしるせぬも。年老たるかたる。いとさ
むき折も。暑きにも。けす女のなりあしきが子をわひたる。
ちひさき板屋のくろうきたなけなるが。雨にぬれたる。雨
のいたくふる日ちひさき馬にのりてせんくしたる人のか
うぶりもひしげ。袖も下襲もひとつになりたるいかにわ
びしからんと見えたり。なつはされじよし

あつげなるもの
ずるじんのさぎのかりきぬ。のふのけさ。である少將。いみ
しくこえたる人のかみおほかる。きんのふくる。六七月の
ずほうのあざり。日中の時などおこなふ。又おなじ比の銅
のかざり

なまの心の中

い本にこのむ思の心の中ざり。女はお
るに。色好む男のすかし安く思はんが
恥すし心也。恥あはに委
【可】可云。高麗抄に。此の上にいるのむの
五下ありて。このむをこの「さあ
り。なきてしるるんし
いささかおの僧
夜なもれぬ心也。河海云。夜居僧内裏の二間
に候ひて。夜もす。加持まむる僧云々。
其恥しき心跡にあり
くらまされにふさるるに

盗人の隠れわたる見なもしらで家人の物盗
む
あなうたてかし。まじ
御前ちかき人の。夜居の僧のきく事を心得
させんさていふ詞と
いひくつのはては
拾遺「世の中をひくひくしてはては
いかにやいにならんさすらん
このうたの詞半を用
うたておふまなす
男の心に思ふやうならすも。かしき見ん女
も先さしむひては。ふく思ひがほにす。
したのむるさ
情ありこのまじき人にしられたる
情あり好色人にてあり世にもしられたる
男はさ
心のうちにもあらす
男の心中の恥しきみにあらす。こわさ

はづかしきもの

さどこのころのうさ。さどとさよるの僧。みぞかぬす人
のさるべきにまねかくれるて。いかに見るらんをたれか
はしらん。くらまされに物ひきいる人。人もあらんかし。
おのれもす人なれば
それはおなじ心にさかしてや思ふらん。よるの僧はいと
しき事をいふ
はづかしき物也。わかき人のあつまりては。人のうへをい
ひわらひ。そしりにくみもするさ。つくづくときよあつむ
よの僧の心の中は。はづかし
る心のうちもはづかし。あなうたてかしかまじなど。御前
ちかき人々の。物けしきはみいふを。さしられずいひく
てのはては。うちとけてねぬる後も恥かし。男はうたて思
はづかしき事をいふ
ふさまならす。もどかしう心づきなき事ありと見れど。さ
しむかひたる人をすかしたのむるこそはづかしけれ。ま
つれの男たには。さしき
してなげけ有このまじき人にしられたるなどは。あろか
なりと思ふべくも。もてなすさかし。心のうちたのみもあ

にもうちさげのたき所有と

我が事をばしらす
男の心中を察していへる詞也。女の我が事
なほく人に見たりをいへる詞也。只く
外の女の事をいへるを。我をこよなく思ふ
故かたる成けりとのみ女の思はんを思ふ
思ふが恥かしき事

心もなき物なめり
又あは下思ひつめたる男に對しては。心
もなき女ぞと見えてもはづかしからぬと
さすかに人のうへをば
さやうに情なき男の。かへりて人の事はう
らみもさきて。我が非をいひつくるふと

たぐにもあらず成たる
彼宮仕へ人の顔態せしをも情なく見捨て其
事をもさりあつしてやみはてしき
又結句「なほく人に見たりをいへる詞也」
な。清水には「なほく人に見たりをいへる詞也」
る」とあり

らず。又みなこれが事はかたにたり。かれが事はこれに
いひきかすべからざるを。我がことをばしらす。かくかたる
をばこよなきをめりとおもひやすらんと思ふこそはづか
しけれ。いであはれ。又あはじと思ふ人にあへば。心もなき
物なめりと見えてはづかしくもあらぬ物ぞかし。いみし
く哀に心なるしげに見捨がたき事なごき。いこそか何事
ども思はぬも。いかなる心ぞとこそはあたましけれ。さす
かに人の上をばもごき。物をいよよくいふよ。ことばにた
りもしき人もなき宮づかへの人なごきをかたらひて。たぐ
にもあらず成たるありさまなごきもしらやみぬるよ

むとくなる 無徳也せんなくしなき事
増「源氏乙女の巻に「水のうへむとくなるけ
ふのあつはしきかな」さあるも此所も同
意也。無徳なごいふにかなへり
すまひのまけて

相撲の節とて禁中にある也。年中行事廿合
註云。相撲といへる事は諸國の供御人をめ
しあつめて。七月に相撲の節といふことを
おこなひて。天子御覽する也。始めを召合
せといふ。後にすぐりてめされんするをば
ぬきてさ申す。下界猶江次第雲抄に委し
心さ出来たる。イ本此次になま心をさりし
たる人のそいなる事いひむつかりて一つ
にもふさ下云々あり。前のれたき物にあ
れば不川

「町」風抄にも。此次に「なま心をさりした
る人さ心なることいひむつかりて云々」と
いふより數十句あれど大方は上の五巻に
れたきものさある末文と大同小異にて重複
すれば吉きつ
こまいぬしくまふもの。和名四。曲調類
高麗樂曲の中に。和名とてあり。此まひを
舞もの。興に乗て躍るが無徳なるにや。
俗人にさふへし

修法は佛眼眞言 是は無徳なる物にあらず
例のふと書出たる筆すまびなるべし。佛眼
尊は受胎羅羅の中央にあり。一切諸の佛菩
薩に圍繞せられ。諸の佛菩薩の功徳を具足せり。
身作「百日」兩目微笑二手住「摩訶入三摩地」
に尋ねし。「町」漢接。例の筆すまびにはあらず。こは修法はといへる一段也。かくいへるは下文陀羅尼はなごの例なり

むとくなる物

しほひのかたなる大なる舟。かみみじかき人の。かづらと
りおろして髪けづる程。大なる木の風に吹たふされて。根
をさしめてよこたはれふせる。すまひのまけているうし
ろ手。えせものしづさかんがふる。翁のものとよりばなちた
る。人のめなどの。すゞるなる物えんじしてかくれたるを。
必尋ねさごがん物をと思ひたるに。さしも思ひたらず。ね
たけにもてなしたるに。さてもえ旅だちるたらねは心と
出来たる。こまいぬしくまふ物のおもしろがりばやり出
てきざるあし音

修法は。佛眼眞言などよみたてまつりたる。なまめかしう
たふとし

亦佛母尊とも親せり。瑜祇經云。時金剛薩埵對一切如來前忽然現三作一切佛母身住三大白蓮一
身作「百日」兩目微笑二手住「摩訶入三摩地」に尋ねし。「町」漢接。例の筆すまびにはあらず。こは修法はといへる一段也。かくいへるは下文陀羅尼はなごの例なり

はしたなき物 物の相離せりゆと。よむき物につよくあたる類之

【堀】源氏。今いふつらむらむさいふにちかし。語の原ははしたなき意にてなきいそへたる詞のみ之
弘云。はしたは。源氏末緒花の巻に「はしたなる大きき女」竹取に「立つもはした居るもはしたにてむたまへり」其他にも多くある詞なれど。伴にいふ。不都合の意。なきは。いさげなき。いはげなき。などのなきと同意にて甚のむすの意。源氏夕顔の巻に「はしたなきは」にちかし。【堀】あるも甚不都合の時分にならぬ前にも解してよく通ふべし。故に此所も甚不都合なるものといふ意之

【堀】只よはぬにさへさし出るに。まして物とらする折はいさひはしたなきの意。原註わるし今改めつ
其人のある前
其そしられたる人の前にて意の意地わよく告たるなるべし

入幡の行幸 一條院の行幸也。榮花物語さまんくの悦ひの巻云。永延元年といふ二月は例の神わざもしきりて。所々の使たち何くれといふほどに過り。三月は石清水の行幸あるべければいみじういそがせ給ふ云々。此時の事にや江次第十六に。石清水行幸の大策あるべければ今撰たり
さばかりの御ありさま
遷幸の諸官侍奉のめでたき帝の御ありさまにて。女院の御消息を教せ給ふ事之みなあらはれ 願はるべし。泪に白粉の

はしたなきもの

こと人をよぶに。我もどとさし出たるもの。まして物とらする折はいとゞおのづから人のうへなどうちいひそしりなどもしたるを。さなき人のきこりて。其人のある前にいひ出たる。哀なる事など人のいひてうちなくなればいと哀とばきこながら。泪のふつといでこぬいとばしたなし。なきがはつくり。けしきことばせといさかひなし。めでたき事をきくには。又すまろにたゞいさきにこそ出くれ。八幡の行幸のかへらせ給ふに。女院御さじきのあなたに御こしきとどめて。御せうそこ申させ給ひしなど。いみしくめでたく。さばかりの御ありさまにてかしこまり申させ給ふが。世にしらすいみじきに。まことにてこぼるれば。けさうしたるかはもみまあらはれて。いかに見くるしかるらん。せんじの御使にてたゞのふの宰相中將の御

ちちたる
せん下の御使
帝より女院への御使也。宣旨御使なるべし
隨身四人 宰相中將の召具せられし

すこしきほうよりおりて
女院の御機敷より遠くより齊信廻下馬し給ふなり。禮儀之
院の別當 女院の大別當也。藤原抄追加云。大別當 大臣公卿清華之人任之
女院も大畧。院も同云々

さてうちわたらせ
女院の御機敷の前を帝の渡御也

それにはながなきを
かやうのめでたき事には清少の泪とめがたくて笑はるゝ物の哀なる事をきいてはかへりて泪出てぬここのありなるべし
かうだにおもひまわらすもかしこしや
いはんや帝女院などの御事は。猶ややうにかもふも恐れ多しと云
くる戸より
黒戸。拾芥に瀧口の戸の四とあり。大鏡云。こまつ帝と申す此御時に藤原の上の御局の黒戸はあきたるを問侍るはまことと云

の御機敷へ

ごじきば

身四人

るばかり

馬をうち

りて。そは

給ひし。御返

ひて。御こ

なりや。さて

の御心

えしか。それ

しききは

おもひ

關白

なくさ

翁を

か

權大納言殿 勅物云。伊闕公正曆三年權大納言

したのされのしりなかく 橘花葉葉云。櫻は下殿の尻也。昔はついでけたる若する時願ひ有によりて。切はなして着之也。仍一としてひはる事なし。たけは代々の不同也。但近代攝家に用来る分は。納言以前は八尺。大臣一丈。關白の時一丈二尺ばかり。大梁のくごさし。又可い時

宮の太夫殿 勅物云。御堂正曆二年權大納言中宮太夫如元 榮花物語三云。六月一日正曆元年后にたせ給り定子太夫には右衛門督のななきこえさせ給へれ。あり。是中關白の御弟御堂の關白道長公

忌の日 齊日の事。六齊日には殺生を断事。拾芥にも見ゆ

老人をわらはんこにをこなりとわらひ給ふらんとわけいでさせ給へは。戸

口に人々の色々の袖うちしてみすまひきあけたるに。權大納言殿御くつとりてはかせ奉らせ給ふ。いと物くし

うきよけによそほしけにしたがさねのしりながく所せ

くさふらひ給ふ。まづあなめでた。大納言はかりの人にくつぎとらせ給ふよと見ゆ。山のゐの大納言。そのつぎ

さらぬ人々くろきものをひきもちらしたるやうに。藤つは

のへいのもどより。とうくごでんのもへまでるなみたる

に。いとほそやかにいみしうなまめかしうて。御はかしな

どひきつくるひやすらばせ給ふに。宮の太夫殿の清涼殿

のまへにたせ給へれば。それはあるさせ給ふまじきなめ

りと見る程に。すこしあゆみ出させ給へば。ふとあるさせ給

ひしこそ。猶いかばかりの昔の御おこなひのほどならん

と見奉りしこそいみしかりしか。中納言の君の忌の日と

たへ其すしはし 句を切へし其珠敷を暫給はれん。中納言のあまりに行給ふをあざけりされて。珠敷をもとりて妨るま

も實に關白殿の果報はめでたきこと佛になりたらん とも宿業の善果をうけ

ば。關白どの御身よりはおなひて佛果をえまほしきこと

太夫どの 道長の中關白殿につくまはせ給ふ事

此のちの御ありま

道長公の後の御榮花を后宮御存命にて見給はれん。此草紙は清少の老後后宮御去のいちかけるにや

ことわりとおぼしめされ かく威勢ある御堂殿も道隆公にはつくばひ給へる事な。后宮おぼしめしあはせば。我がく感下をもひし事はこまはりと思召れんこと

糸もたえさまに雨のうり 物の糸のきれ

女房の中へ出給ふにをこなりとわらひ給ふらんとわけいでさせ給へは。戸口に人々の色々の袖うちしてみすまひきあけたるに。權大納言殿御くつとりてはかせ奉らせ給ふ。いと物くしうきよけによそほしけにしたがさねのしりながく所せくさふらひ給ふ。まづあなめでた。大納言はかりの人にくつぎとらせ給ふよと見ゆ。山のゐの大納言。そのつぎさらぬ人々くろきものをひきもちらしたるやうに。藤つはのへいのもどより。とうくごでんのもへまでるなみたるに。いとほそやかにいみしうなまめかしうて。御はかしなどひきつくるひやすらばせ給ふに。宮の太夫殿の清涼殿のまへにたせ給へれば。それはあるさせ給ふまじきなめりと見る程に。すこしあゆみ出させ給へば。ふとあるさせ給ひしこそ。猶いかばかりの昔の御おこなひのほどならんと見奉りしこそいみしかりしか。中納言の君の忌の日と

にも八月の定考にも。上欄以下の公卿諸臣等に三献或は四献の、ちする物なり。江次第列見の所に四献併設云々。定考にも、本朝所宴座懸座等皆用、列見儀、江次第八に見えたり。

増し和名抄云。楊氏漢語抄云。真餅中納言合、賜賜等子并雜菜二而方載。一名餅。玉冠云。飛邊返着也。

花文鏡花抄のたぐひのやうに。うるはしくいれし。行成卿は三献の一人也。

〔註〕源按。花文の既い。解文なるべし。解文は今いふ願書の如く。膳司より諸名へさあげなす下書云。其書法。朝野群載などに多くありて目錄の書法の如し。こゝもへいたんを奉るにこそしくしく目錄に書て作名などして奉るも一の風流云々の源順大江匡房などが目錄歌も思ひ合すべし。傍註にちらしきこといへるもこゝに誤りみまのなりゆき。

任那成行成卿の作り名なるべし。これな。平惟仲。權中納言時武忠。左中辨中宮大夫。大宰權帥中納言從二位公卿補正此辨少納言など。此行成より我得たるなききはし隠して同調之列見定考に辨中少納言などに辨餅等をする事あれば辨少納言のもとに云云。

たるたて文に。けもんのやうにかきて進上へいざん一つ。少納言殿に。月日かきて。みまのなりゆきとて。おくに。此まのこはみづからするらんとするを。ひるはかたちわろしとてまらぬ也と。いみしくをかしけにかき給ひたり御前にまありて御らんせさすれば。めでたくもかゝれたるかな。をかしようしたりなどはめさせ給ひて。御文はとらせたまひつ。かへり事はいかすべからん。此へいざんもてくるには。物などやとらすらん。知たる人もがなといふを。まこしめして。これなかこ

あしつる。よびてとへのたまはすれば。はしに出て左大辨にものきこえんと。さふらひしていはすれば。いとよくうるはしようてきたり。あらずわたくし事也。もし此辨少納言などのもの。かゝる物もてきたるに下部をいば。す

る事やあるととへは。さる事も侍らず。只とめてくひ侍る。何しにとばせ給ふ。もし上官のうちにてえさせ給へるかといへば。いかゞはといらふ。只返しをらみしうあかきうすやうに。みづからもてまうでこぬ下部は。いとれいたうなりとなん見ゆるとて。めでたき紅梅につけて奉るを。行成の清少へ。すなはちおはしまして。下部さふらふどのたまへは。出たるに。さやうの物に哥よみしておかせ給へるとおもひつるに。びゞしくもいひたりつる哉。女すこし我はと思ひたるは哥よみかましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ。まろなどにさる事いはん人は。かへりてむじんならんかしとの給ふ。のりみつなりやすなど笑ひてやみにし事を。殿のまへに人々いとおほかりけるに語り申給ひければ。いとよくいひたるとなんの給はせしと人の語し。是こそ見らるしき我ほめども成かし。まごてつかさえはじめたる六位しやくに。しきの御きうしのたりみのすみのつらぢ

上官のうちにて。トやう官は六政官の外記史などないふ。其へいたんはもし大政官の官人などより得給へる。みづからもてまうでこぬ下部は。いとれいたう前に行成の此男はみづから奉んとするなきいはるを請て自身持て來り下部は非道ぞと。行成のみづからおはせぬなきがめし。これいざんは道理にや。道理に背きもどりし心。下部さふらふ。彼清少のみづからもてこぬ下部は。いとへるに付て行成の下部侍よとの給ふ。さやうの物。赤き襦袢に書て紅梅に付たる物は哥よみておかせたると思ひしに。のりみつ。前に左衛門尉則光さて清少の哥よみしは更に見侍らしてあふ返したる人。なりやす。誰さも不知是も哥を嫌へる人に笑ひてやみにし事を。清少に哥讀懸られて。則光なども恥笑て止にしに。行成にはさはなして。此詞をいひおかせし。願自殿の前にて行成のほめ贈給ふ。これこそ見らるし。人のほめ給ひし事を。此草紙にづく事。見若き自殿と。なごてつかさ。是より清少のさき女房などのいひまらひこそいふことをさけり。

六位しやくに
 新蔵人の笏に此結地の板をせし事清少の在
 世の比有しにや。つひさしは下めは任
 官の初めなふふ。六位は兩人なるべし。
 「訂」弘云。六位の笏は粗末なる故にかくい
 るなるべし。註は非。
 ほそながをさしひつべし。 弄花抄に云。
 ほそながは貴女の着る物也。一勸幼き上臈の
 上に着る物也。其形細く長ければ其名さ
 いふべしと。
 「訂」漢接。なぞは上の句につけてむべし。
 下に「けよみてはなその詞のさしめなし。
 けるささき多くあり
 「訂」弘云。ほそなが。かさみ。かさね。下
 がされ。是等の事は駿東抄に委
 かしみはしりなが。
 花鳥に云くかさみは童女の着る物也。西宮
 抄汗衫がさみ尻長き物なるべし
 かしねはみしりかさねと
 和名に背子形如三半臂無腰云々。腰なきゆ
 りにみしりかさねと云ふはゆと
 うのさねのはさま
 表袴の事也。桃花盛葉云。表袴中少將より
 大臣大將に至る迄も着す。若年の時は白き
 浮線袴。寝殿の浮文を用る。裏は紅打平絹
 と下略
 桃花盛葉云。赤大口生平絹紅に染て用る。
 漢装束には。漢平絹也。名目抄云。大口は
 生平絹幼年の白。長年の紅
 「訂」本唐書は俗にイヤイヤといふ語と同下と
 いて

の板をせしぞ。さらに西東をもせよかし。又五位もせよか
 しなごいふ事をいひ出て。あじきなき事をもさ。きぬなど
 にすろなる名どもをつつけんいとあやし。きぬの名に
 ほそながをさしひつべし。なぞ。かさみはしりながと
 いへかし。さのわらはのきぬるやうに。なぞからきぬはみじ
 かききぬとこそいふはめ。されどそれはゆるこしの人のき
 るものなれば。うへのきぬのはかまざらふべし。下がさぬ
 もよし。又あはくち。ながさよりはくちひろければ。はかま
 何のゆゑにいふ名であらきなしと
 いとあぢきなし。さしぬきもなぞ。あしきぬもしはさやう
 の物はあしふくろなごもいへかしなご。よろづの事をい
 ひのしるを。いであなかしかまし。いまはいはじ。ぬ給ひ
 ぬといふいらへに。よめる僧の。いとわろからん。夜ひとよ
 こそ猶のたまはめと。にくしとおもひたることをさまにて
 いひ出たりしこそ。をかしかりしにそへておどろかれに

いはれたり
 漢云。此説いまだ考たらぬ。いづの詞は。
 原何の錢にて。いづれ。いづら。いづちな
 どのいづないで通下ていふにて今譯して
 いはにナンデモナヤ。ドウシテ。なごいふ
 に近く疑の意なふくみながら物をいひさだ
 むら詞也。物語にいさ多し合考すべし
 故殿の御ため。入道關白道隆公亮して後の
 事也。長徳元年四月十日に漢の由。榮花物語
 にあり

しか
 故殿の御ため。月ごとの十日。御經佛くやうせさせ給ひ
 しを。九月十日しきの御さうしにてせさせ給ふ。上達部殿
 上人いとあはかり。せいばんかうじにて。とく事ともいと
 かなしければ。ことに物の哀ふかゝるまじきわかき人も
 みななくめり。果て酒のみ詩ずんしなごするに。頭中將た
 りのふの君。月と秋とさきして身いづくにかといふ事をう
 ち出し給へりしかは。いみしうめでたし。いかでかはおも
 ひいで給ひけん。おはします所にわけまるるほどに。立出
 させ給ひて。めでたしな。いみしうけうの事にいひたる事
 江こそあれとの給はすれば。それをけいしにとて。物も見
 さしてまゐり侍つる也。猶いとめでたうこそ思ひ侍れど
 きこえさすれば。ましてさおほゆるらんとおほせらる。わ
 り寄信と清少の中の事をいへり
 さとよびぬいで。おのづからあふ所にては。なごかまろを

月と秋とさきして
 明詠三品の句也。南極殿月之八月興秋
 期而身何去。文粹十四。願文の句也
 いみしうけうの事にいひ。興ある事と云。
 彼詠吟の事をの給ふ。又希有の事にても
 あるべし。いづれも大切の事と云
 ましてさおほゆるらんと
 寄信。清少に心ある申なれば。清少は一入
 寄信をめでたくおほえんと御たはふれの詞
 こと
 わらふよびぬいで。おのづから

し
 遣屋公の忌日
 清少詞といひは發語の詞也
 法事果て
 寄信御前二註
 期
 既法
 遣屋公の忌日
 清少詞といひは發語の詞也
 法事果て
 寄信御前二註
 期
 既法

野信の清少を懸よびいでても。又自然あふ所なきにてうらみ給ふ事を云ふ。殿上なきにあげくれなき。今野信の殿上人にて。清少もかく度々見ゆる時違ひたらはで。昇進の後など殿上にもあらしらん時は何を思ひ出にせんや。野信當官頭中將。さら也。勿論の事。若夫婦となりてはあたら野信をえほめまわらすまふ事。いかにか。句なきるべし。人のほむる時も夫婦なる身になりては。いかにほめまわらせんや。心のおに出来ていひにく。ほめたき折も心に夫婦とおもふを遠慮出来ていひにくらんや。心の鬼は心のあやまりを我と耻おもふやうの心。それにくからずはこそあらめ。夫婦なる人をほむるにこそよめる。我は遠慮あり。たひき。

【清少の御物言合の巻に】
「うれしきはもろのみのみは梓弓君もったひく心ありけり」
漢接。此のたひきの詞。後に音假にていひまといふはたひきをのべいひのみ。別の詞にあらず。細河百首にも「梓弓ひきくたれもいゆるらん」とよめり。たのもしげな事や。思ふ人を懸くいふを懸立人こそ頼もしけれ。それを踏しはたのもしげなきや。畢竟清少の遠まふき色なれば。頼むたなき心をこめていへるなるべし。

八雲云々るはしく也。まほにちかくはかたらひ給はぬ。さすかにはくしなど思ひたるさまにはあらずとしりたるを。いとあやしくなん。さはかり年ごろに成ぬるとくいの。うとくてやむはなし。殿上などにあげくれなきをりもあらは。何事をか思ひ出にせんどの給へは。さら也。かたかるべき事にもあらぬを。さもあらんものちにはえほめ奉らざらんが口をしき也。うへの御前などにて。やくとありまうてはめきこゆるにいかでか。たゞおほせかし。かたばらいたく心のおに出来ていひにくく侍なん物をといへは。わらひてなごさる人し。人よりほむるもあれは遠見んものちも遠慮あるまじき事。もよそめよりほかにほむるたらひおほかりとの給ふ。それがにくからずはこそあらめ。男も女も。けちかき人をかたひき思ふ人のいさゝかあしき事をいへは。はらだちなどするがわびしうおほゆるなりといへは。たのもしげなのことやとの給ふもさかし。

しきにまかり給ひて
行成中宮職にて清少をたらし給ひし

藏人所のうやがみ
藏人所にある紙屋紙也。行成今藏人頭なれば。此所の紙を清少への後朝の文に用われしにや。藏人所は校書殿にあり。拾芥云。恒州御物納藏人所云々。紙屋紙は。弄花抄云。紙屋の人初て紙をすき出せる也云々。北野のうやが川にてすきし紙云々。

まうさうくん
孟祥君が國谷關サへえし事。孟祥百人一首抄云。孟祥君といひし人。秦王にさられしが夜にまされてのがれし時。國谷の關の鳴り限は人を通さず。孟祥君が三千の客の中に鶴明きては鳥のまねをよくする物まねをしければ。關の鳥も鳴て夜深に關を明て通しけり云々。猶史記列傳十五ニ案

夜をこめて鳥の聲
後拾遺集ニ入。孟祥云。はるるさばたばが。この相坂の關はゆるさずとは違事なゆるさ下さ。惣の心は明。扱國谷の關と相坂をなすらかに一首にのみ出ける事上手のしわざ。又よに逢坂のよにといふ詞は助字。近道軒云。夜深きに鳥の鳥をたばかり給ふも。此逢坂は國谷のよににゆるさず。まうさうくん。彼行成の夜深く歸りて心淺きやうなるを。まきらはさんて。鳥のこゑに催れては侍ら下さの心をいへる。たばかれては侍ら下さの心をいへる。

頭辨のしきにまかり給ひて物がたりなどし給ふに。夜いとふけぬ。あす御ものいみなるにこもるべければ。うしに。なりなばあしかりなんとしてまあり給ひぬ。つとめて藏人所のうやがみひきかさねて。後のあしたはのこりおほかる心ちなんする。夜をこほして昔物語もきこえあかさ。んどせしき。どりのこゑにもよほされて。いとみしう。きよけにうらうへにことおほくかき給へるいとめでたし。御かへり。いと夜ふかく侍ける鳥のこゑは。まうさうくんのにやときこえられた。たちかへりまうさうくんのに。はどりば。かんとくくこんをひらきて。三千のかくわづかにされりといふは。あふさかのせきの事なりとあれば。夜をこめて鳥のそらねはかるとも世にあふさかのせきはゆるるべし。心かしてせせせもりの侍るめりときこゆ。たちかへり。

あふまかば人こえやすき事
 此返社の心は。清少の鳥の鳥には遠坂の關
 をゆるさじといへるをうけて。鳥のそられ
 なはるまでもなじ。只此關はあけてまつ
 ぞといふ事にやまなり。清少に調しりかざ
 られていひやらんつたなきに。まけていひ
 なしたる事也。すでに逢雨らふ中なれば。
 むづかしき。調さめめにさりあはぬ心なる
 べし。

のちくのは。まうさう君のには鳥はさの
 文也。遠坂は人こえやすき事のこさ
 殿上人みな見てしは
 清少のまうさうくんのにやさいひ。夜をこ
 めてさよみし文どもを感にたへすして人々
 に行成の見せ給ふ事
 まこにおぼしけりさ
 行成の我を眞實におぼすさは。此文を人々
 に見せ給ひしにて知たる事也。是我見ぐる
 しき手跡を人にみせられしを耻恨むる心を
 わざと哀をいふ事
 御文いみしくかくして
 我文を人に見せ給へるが。満足ならぬ事を
 いはんとてかへりて行成の文みぐるしけれ
 ば。人に見せぬ事。是もうちをいふ事也。
 前には下めの文は僧都にまわらせのちく
 のは后宮へ見せ申す上にかういへるに
 て。返をいふ事知るべし
 心さしのほごをくらふるに
 行成の人に見せ給ふも我をおぼす故也。我
 が人に見せぬも行成の御ためなれば。心さ
 しはひさつぞさ。是もたはふれ
 まるが文を云々
 「訂」原本に是より別段さしたるは非也。諸本

行成のうた
 あふまかば人こえやすき關なれば鳥もなかねどあけて
 まつとか
 とありし文どもを。はじめのは僧都のきみのぬかまをへ
 つきてとり給ひてき。のちくのは御まへにて。さてあふ
 さかのうたはよみへされて。返しめせず成にたる。いとわ
 ろしとわらはせ給ふ。さて其文は殿上人みな見てしはと
 のたまへは。まことねおほしけりとはこれにてこそしり
 ぬれ。めでたき事など人のいひつたへぬはかひなきわざ
 ぞかし。又見ぐるしければ。御文はいみしくかくして人に
 露みせ侍らぬ心さしのほごをくらふるに。ひとしうこそ
 ばといへは。かう物思ひしりていふこそ猶人々にははにす
 思へど。思ひくまなくあしうしたりなど例の女のやうに
 いはんとこそ思ひつるに。とていみしう笑給。こはなぞよ
 るこびをこそ聞えめなといふ。まるが文をかくし給ひけ
 る

皆上についたれば。今諸本に従ひつ
 いみしくうれしくなまめやの給ふ
 思ふ人にくはめられて嬉しく思ふらん
 眞實にの給ふ事也。是もつて清少の行成に
 いひし事は。皆うちをいひたる事也。して
 經房のいへる事の心也。まめやのいふに
 心を付へし
 かのほめ給ふなるに
 只ほめたまふが嬉しきに。又思ふ人々の中
 にてほめらるゝは二つ嬉しき事也。是も眞
 になれしきにはあらずたはふれ
 それはめづらしういまのこさのやうに
 是も經房清少の戯しき事也。事あたらしく
 嬉しき事二つと悦ぶ事不替していへる事也
 五月はかり
 「増」さつさよむべし。五月頃さいふ意
 おぼろしくしうきはや
 驚がるやうにきはなたて。きつさ人を
 お心
 おいこのきみにいせ
 おいはあいなさいふ調也。此君は竹の名也。
 晋の王子猷雪中に寄居して竹を植て聽
 臥して曰何可一日無此君二の古事にて
 云々
 いまやこれ殿上に行て
 殿上人達。此竹の君よまんとてきたりし

る又猶うれしき事也。いかに心うくつらからまし。今より
 も猶頼みきこえんななどの給ひて。後。つねふさの中將。頭
 辨はいみしうほめ給ふとはしりたりや。一日の文のついでに。ありし事なごかたり給ふ。思ふ人々のほめらるゝは
 いみしくうれしくなまめやの給ふ事也。是もつて清少の行成に
 うれしき事二つあり事也
 事もふたつにてこそ。かのほめ給なるに。又思ふ人の中に
 侍けるをなごいへは。それはめづらしう。いまの事のやう
 にもよろこび給ふかななどのたまへ
 五月はかりに。月もななくいとくらき夜女房やさふらひ給
 ふとこゑくしていへは。出て見よ。れいならずいふは誰
 ぞとおほせらるれば。いてこそはたそ。おぼろしくしうき
 はやかなるはといふに。物もいはをみすきもたけてそよ
 ろとさしいるはくれば竹のえだ成けり。おいこのきみに
 こそといひたるをきして。いまやこれ殿上にゆきてかた

雨などせし時。運昭「昔人は花の衣に成り
 之苦の秋よわきたにせよ」古今にあり。
 又榮花物語四「かくて月日も過もて行て。
 正暦三年に成ぬ。哀にはかなき世になん。
 二月には。故院の御果あるべきなれば。天
 下念きたり。御はてなごせさせ給つ。世の
 中のうすにびなごはて。花の秋に成ぬるも
 いさ物のほえあるまま云々
 みのむしのやうなるわらは。雨ふりて笠
 きたるまま。誰方よりもしらすま下
 きて。やうにせしこと。
 まなんはきかせ奉らす。かやうの使石と
 藤三位殿には申さすこと。物思なれば遊
 してこ
 くるみある。源氏にもたまの胡柿色の紙
 あり。表は香色に裏は白き紙と

これをたにかたみさ哥
 後拾遺の哥也。詞書この京紙と同心也。
 れをたにかたみさ。服衣を成せも。しほ
 の袖は。入雲御抄に四位の異名云々。取
 をたに故院の形見を思召すに。藤三位は
 わざ加降せしこと。藤三位四位より加降
 せしなる入し。山崎のさくやうに藤三位は
 仁和寺の僧正 榮花物語三云。仁和寺の僧
 正と云ふは。土御門の源氏のおさの
 御はちからに申はす。にわたのみの
 えける御子に申はす云々。寛朝僧正也。式部
 卿敦實親王の三男雅實公の御弟也
 藤大納言 四條院の別當と云ふ。いまた
 藤三位も勅へ侍らす

なる木のしろきにや
 藤三位のつたの女房の詞
 は。いづこよりぞけふあす御物いみなれば。御しとみもま
 むらぬぞとて。しもはたてたるしとみのかみよりとりい
 れて。ごなんどばせかかたてまつらす。物いみなれば見え
 ずとて。かみにういさしておきたるを。つとめて手あらひ
 て。其巻敷とこひてふしをかみてあけたれば。くるみい
 どいふまきしのであつてえたるを。あやしと見てあけて
 ゆけは。老はうしのいみしけなるが手にて
 藤三位の女房の詞
 藤三位の心
 しかの袖
 とかきたり。あつてしとみかたかりけるわさかな。たれがし
 たるにかあらん。仁和寺の僧正にやと思へど。よもかよる
 ことのためはじ。猶たれならん。藤大納言ぞかの院の別當
 よおはせしかは。其したまへる事なり。これをうへの御

それをふたつながら
 推架の袖のうたに藤大納言の返歌と二つを
 申して。藤三位室内する

藤三位の心
 此わたりに見えしにこそはいさよくにたれ
 其若法師の哥は。帝の御つたにあるうたに
 似たること。御園子のもなる御歌草を取
 いてさか給ふと
 これおはされ
 是いなる御事ぞおほしめして御らんあれ
 こと。藤三位のしわざしちれゆきと

まへ宮などいとうせしめとせばやとおもふに。いと心
 もどなけれど。猶おそろしういひたる物いみせし果むと
 ねんじくらしして。まだつとめて藤大納言の御もとに此御
 返しをきてとしおかせたれば。すなはち又返事しておか
 せ給へりけり。それをふたつながらとりていそぎまあり
 て。かよる事なん侍しとうへもおはします御まへにてか
 たり申給ふを。宮はいとつれなく御らんじて。藤大納言の
 手のごまははあらで。法師にこそあめれどのたまはすれ
 ば。ごまははたれがしわざにか。すきんしきかんだちめ
 僧がうなどは誰かはある。それにやかれにやなどおほめ
 きゆかしがり給ふに。うへ。此わたりに見えしにこそはい
 とよくにたれとうちほへませ給ひて。今ひとすぢ御
 づしのもとなりけるまどり出させ給へれば。いであな心
 う。これおほされよ。あなかしらいたや。いかでまへ侍ら

おにわらは、みのむしのやうなるを有し
首尾之。鬼窟丸まで古ありしと
小兵衛 后宮の女房前にありし人

ひきゆるがし奉りて
后宮を藤三位の、さきまむらさちらるゝま
と。帝を、さき中さんには傳りければと

いさほ、りのにあいぎやうつ
御乳母なれば、これらもの、さきまむらさちらるゝま
受敬あると

だいはん所にも 禁中の盤盤所は女房の侍
ひと。彼刀自がわらはを尋ね出むため
文ざりいれし人に
かの使のわらは、是をきて其文うけざりし
藤三位の女房に見すればと

つれづれなるもの
「原註に。しつにさびしきことあるは。
いさほ、異と。つれづれは俗にキイタラと
いふと」
ところざりたる物いみ
ふくくつ、しむ時家をざり外にて物忌する

んど。たゞせめにせめ申てうらみきこえてわらひ給ふに。
やうくおほせられ出て。御つかひにいきたりけるおに
わらは、たいはん所のどじとらふもの、ともなりけるを。
こひやうゑがかならひ出したるにやありけんなどおほせ
らるれば。宮もわらはせ給ふを。ひきゆるがし奉りて。など
かくばからせおはします。猶うたがひもなく手をうち洗
ひて。伏しがみ侍し事よとわらひねたがりの給へるさまも。
いとほこりかにあいぎやうづきてをかし。さてうへのだ
いはん所にもわらひの、しりて。つはねにありて。此わら
はたづね出て文ざりいれし人に見すれば。それにこそ侍
めれといふ。たれが文を。たれかとらせしぞといへは。しれ
れ。どうちゑみて。ともかくもいははしりにけり。藤大
納言後に聞て笑ひ興じ給けり」
つれづれなるもの

六十六段

うまおりの双六
馬は賽の事。晋書袁彦道が傳に。投し馬結
叫さあり。是傳局にむかひての事。うま
おりの双六に思ふ目のありぬと
「原註。賽を馬ともいへば。うまともいへ
ま下きにはあらぬ。こゝをうま。馬も賽音にて
にめさあるや正しむべき。馬も賽音にて
馬も賽音にて。なまきしらなる人の書
ひがめたるにもあるべし

なまきのうちさるがひ
前にさるがふ事さあるにおな。投擲とて
狂言などいひたはる。一
物いみなれど。つしむ折なれど興ある人
なればいる。と

みそひめ 精精之或説云。非米非粥之儀也
と和名にあり。表にひめのりして張は。こは
くせんためなるにねれてはさり所なかるべ
し

あま火の火はし
門燎火筋也。あまき五音相通也。和名云
周禮云。表殿門燎俗云門火。
但此一句禁忌の事なれば時によりて職をつ
くま。と
「原註。相通も同じよれり。このあまひは
即燎火の意にて。表を送り出せしめにて
たくなれば。あま火といふべし。願氏家
訓。表出之日門前燎火云

ところざりたる物いみ。うまおりのぬすらる。ちもくはつ
かさえぬ人のいへ。雨うちふりたるはましてつれづれな
り」
つれづれなるもの
物がたり。と。すらる。三四はかりなるちこの物をか
ういふ。又いとちひさまちこのものがたりしたるが。あみ
などしたる。くだ物。まことのうちさるがひ物よくいふが
きたるは物いみなれどいれつかし」
とりどころなきもの
かたちにくけに心あしき人。みそひめのぬれたる。これい
みしうわるき事いひたると。よろづの人にくむなる事と
て。しまとむむへきにもあらず。又あまの火はしといふ
事をどてか。世になき事ならねは皆人しりたらん。けにか
まらぬ事なれど、
まらぬ人の見るべき事にはあらねど。此どうしを見るべ

六十七段

あま火の火はし
門燎火筋也。あまき五音相通也。和名云
周禮云。表殿門燎俗云門火。
但此一句禁忌の事なれば時によりて職をつ
くま。と
「原註。相通も同じよれり。このあまひは
即燎火の意にて。表を送り出せしめにて
たくなれば。あま火といふべし。願氏家
訓。表出之日門前燎火云

なきて 句なきるへし。禁忌の事ながらい
あやしき事なにもくき事なも あやしき事
は。衣箱精之。にくき事は。あまびは人の
いみにくむ事なればと

りん下のまつり 江次第六云。石清水臨時
祭三月申日有。午時用。午。賀茂臨時
祭十一月下酉日なほ次第第委。園は盤園抄
にあり

おまへはかりの事 臨時の祭に御前の座ま
いふ事あり。庭座ともいふにや。外になき
事なれば御前はかりの事といふなるべし。
江次第六云。御前座。御東をばりて
主上出御ありて。侍下に替御あり。藏人頭
召の由を告て。公病以下壁下の座に着く。
又藏人頭御せを承て使舞人以下を召て。一
献二献過て大臣座に着く。さて三献過て
垣下の公卿座あり。衝重をすまて陪從
音楽をなして。吾曲の聲を發す。四献五献過て舞人陪從重を給ふ。さて掃頭の花を給ひて。使は左のつたにのさし。舞人は右の方にのさす。と

「指」はかりは。ほごの歌。つれの詞にもいさ多し
しがくもいさなかし。試樂りん下のまつりの音楽を先こゝるむる心。石清水の臨時祭の試樂は。祭の前二兩日に行。賀茂同。之。盤園抄にあり。園もあり。御殿の孫座に侍子たて。出御ありて。四位藏人。舞人をめせば。舞人竹蓋のしにて竹の枝を折。さして。仁壽殿の廊の下より御前につらなり。陪從近衛の召人。求子うたひの琴笛ひちりきのをあはせ。舞人舞終りて大比禮かへしうたひてまがり出る由。公事根源にあり。猶
次第は江次第二委
かよりづかまのたいみごも 百寮訓要云。掃部寮は御東の事を奉行する所。但是むむる風情の物を沙汰する所云々。職原抄にも掌。鋪設
事三々

つひは北おもてにし 賀茂の臨時祭の使の座は北面。南祭の時又南面なるよし盤園抄にあり。此草紙のまは南祭のよしなれば不番。よ
りて是らはひが事にもやあらんといへるにや。大やうに替たるなるべし

ついかされとも 石清水の臨時祭の御前の
座に内藏察衛軍をすうる事江次第六に見

い。所の衆は舞人陪從などの瓶子を執るつ
いがされをすうる事おぼつかなし。但石清
水還立御前儀に突重を雑色以下扱。之とあ
り。此時所の衆もすまわたすべし。こゝは
此儀式にいへるにや
やくひ。口訣あり
「指」和名抄鮫貝類云。錦貝
辨色立成云。錦貝。夜久の所貝。
今按。本文未詳。但俗説四海有夜久島
彼島所出也

濱按。田各本和名今按以下作所謂爲蓋之紅
螺之也とあるにて。このやくひ貝にて
作れる蓋なることしるし。されば女ぞ出て
さりけること蓋をさると

「訂」演文云下にうち。ぼしては。酒をこぼま
し。春曆抄其誤なり
納殿。也足軒御既云何にてもをさめむる
一所

かしこく。はやみちやくひをいれおく
所にしてさいはんさて。をさめむるのこゝ
なるべし
いんもりづかまの
御前の儀果て舞あるべきさまと。江次第六
に掃部撤座主殿持除とある是と
承香殿のまへのほごに

承香殿は。和名に仁壽殿の北にあり云々。
拾芥大内裏の園に。清涼殿の丑方にあたる
殿。樂人舞人此殿のまへより吳竹蓋をへ
て清涼殿の前へ出る様。江次第六臨時祭
舞時云。主上出御有て玉柄着坐して殿上人
壁下の座に着。さて使舞人など。陪從音
樂をなす。藏人所の雑色二人御琴を昇て吳

き物と思はざりしかは。あやしき事をも。いんき事をも。只
思はん事の限りをかゝんとて有し也
なほ世にめでたき物

りんじのまつりのおまへはかりの事は何ごとにかあらん。
しがくもいとをか。春は空のけしきのごかいてうら
くとあるに。清涼殿の御まへの庭に。かよりづかまのた
なみどもをしまして。つかひは北おもてに。まひ人は御前の
かたに。これらはひか事にもあらん

試樂
石清水臨時祭
掃部
主上の御前
試樂
石清水臨時祭
掃部
主上の御前

増訂枕草子春曆抄卷の七

し。いじうも其日は御前に出いるぞかし。くぎやう殿上
人は。かばるく蓋とりて。はてにはやくがひといふ物。を
のこなごのせんたにうたてあるを。御前に女ぞ出てとり
ける。思ひかけず人やあらんともしらぬ。ひたき屋より
さし出て。おほくどらんとさわく物は中くうちこほし
てあつかふ程に。かろらかにふととり出ぬるものには。お
くれて。かしてきをさめどのに火焼屋をしてとりいる
こそをかしかれ。かんもりづかまのものともたみどる
やおそきと。どのもりづかまの官人ども。手ごとはは
どりすなごならず承香殿のまへのほどに。笛をふきたて
ひやうしうちてあそぶを。とく出こなんとまつに。うごは
まうたひて竹のませのもどにあゆみ出てみことうちたる
ほどなど。いかにせんごおほゆるや。一の舞のいとうる
はしく袖をあはせてふたりはしり出て西にむかひて立ぬ。

陪從地下の樂人
のうたひもの
江次第に漸進出至吳竹蓋下とあり
藏人所雑色二人御琴とあり
そいろに面白さまと

火燒屋又炬舎同河海にあり
有度前綴河舞

一舞二人先進云々

八十九

竹の舞のものに至る。主上兩人頭をめぐして
一の舞を仰せ定らる。舞人すゝみて駿河舞
なまふ。先一の舞二人進出てまへり。其後
次々の舞あり。舞人上より退て竹藪の東に
至る。次に右の舞ひて進みて求子をまへり。
舞をばりて舞人下より退く。大比禮をな
でし後。使舞人退出して。承香殿の馬遷を
經て。建春門にいたり。それより賀茂にま
うづ。狼姿
わやもなき

【訂】演云。注非之。こは歌詞之
こま山

【訂】演云。万歳本云こま山は備馬場の瓜作
かきあり
うさばまうたひ

賀茂の臨時の祭の哥ニ定家卿「ふる袖はみ
だらし河に影見えて空にぞすめるうさばま
のこま

ぬきたれつるさま
江次第曰。租右。只租冠袖許。不租半臂
下重

かへりだちの御かくち
むかしは南祭に還立なくて。賀茂斗に有し
由雲岡抄にあり。公事根源云賀茂の臨時の
祭。先兼日に試樂調樂などいふ事あり。當
日の儀式御禮座座など石清水に同。社頭の
儀果て使舞人踊まわりて。還立の儀あり。
孫座に御障子なつ。御引直衣に御草鞋を
めす。額間より出御あり。陪座のまほりの庭

大舞

つぎや出るに。あしふみをひやうしにあはせては。陪従の中
之江次第にあり
びのをつくろひ。かうふりきぬのくびなごつくるひて。あ
のあやのなき。求子のたぐひなるべし
やもなき。こま山なごうたひてまひたちたるは。すべてい
みじくめでたし。おほひれなどまふは。日ひとひ見るとも
あくまじきま。はてぬることそいと口をしけれど。またある
べしと思ふはたのもしき。みことかきかへして。此たひ
やがて。竹のうしろからまひ出て。ぬぎたれつるさままごも
のなまめかしきは。いみしくこそあれ。かひねりの下がさ
ねまごみだれあひてこなたかなたにわたりなごしたる。
いで更にいへはよのつね也。此たひは又もあるまじけれ
はにや。いみしくこそはてなん事は口をしけれ。上達部な
ごもつぎきて出給ひぬれば。いとさうとくしう口をしき
に。賀茂のりんごのまつりは。かへりだちの御かからなご
にこそまごさめらる。庭火のけふりのほそこのほりた

大比禮也江次第六返哥大比禮返也云々
大ひれの後使舞人退出云々
御舞昇返之是より以下は退出のさまなるべし
右租云々
孫座下御障子のさま云々

あり。かぐらの笛のおもしろうわななき。ほそく吹すまし
たるに。哥の聲もいとあはれにいみしくおもしろく。さむ
くさえ氷て。うちたるまぬもいとつめたう。扇もたる手の
ひゆるもおほえず
才男云々
さえのまのこごもめしてとびきたるも。人長の心よけさ
などこそいみしけれ。里なるとききはたわたるを見るに
あかねは。御やしるまで行て見る折もあり。おほきなる木
のもとに車たてたれば。松のけふりたなびきて。火のかけ
にはんびのま。きぬのつやもひるよりはこよなくまさり
て見ゆる。はしの板をふみならしつゝ。こゑあはせてまふ
ほごもいとをかしきに。水のながるゝおど。ふえのこゑな
ごのあひたるは。まこと神もうれしとおほしめすらん
かし
舞人に出るをよるこびしにや
少將といひける人の。としごにまひ人にてめでたきも

南北二行に座を敷て。使ひ舞人つく。うし
ろに木末の神樂の所作人。陪従。近衛の召
人つく。出御ありて公卿召あれば。舞子長
階に候す。階の下に頭以下若て。使以下を
召。勅並ありて。神樂あり。庭火よりはじめ
て。朝倉其駒までうたふ。庭火にももる番
あるべければ。人長作法あり。みかぐらは
ていろくあり云々
さえのまのこ

雲岡抄御神樂奏。歌ニ神時人長立舞。
次勅並。次人長進召才男。公事根源にも
らみはて。又すゝみて才の男めす云々
人長の。舞人陪従などの長之。次第云舞人
陪従皆起座。三人長仰。皆次第に看座云々
たわたるを見るにあれば
里人は御前の儀などは見れば。使舞人など
の大路をわたるを見て。猶あつて賀茂まで
行て見る云々
御やしるまで行て

江次第十。賀茂臨時祭社頭儀奏。使舞人など
着座して垣下殿上人相分れて勅並あり。使
ひ宣命をよみ。御馬を引次にあづまあそび
あり。次に舞。次に馬を馳す儀奏

【増】拾遺に。神樂。藤原忠房
「あつらしきけふの春日のやをさめを神も
れしと忍ばさらめや」せよあり

上の御やしるの一の橋のもとに
少將の執心をよめてこゝに有しき。是橋
本の社の事によ。賀茂の橋本のやしるは藤
原買方はいはひし由。つれく草に見ゆ此
事にや藤原可尋之

やはたのりんごの

殺取紙云。八幡臨時祭は。先朱雀院御時被
始行一也。伴母は買之奉り。其母二松も生
又も苦むす石清水行末遠くつ。へまつらん
下略

るくをえてうしあより
内蔵つ。ささ藤の唐櫃を小坂敷に。かきもてき
て。蔵人頭以下。使舞人などにくばりあた
ふる事江次第六に委
其たびかへりてまひしは
南祭にむかしは並立なかりしを。近代せこ
なはる。より江次第などに待るは。此時よ
りの事によ

のに思ひしみけるに。なくなりて。上の御やしるの一の橋
のもとにあなるさままけは。ゆしう。せちに物おもひいれ
じとおもへど。なほこのめをたき事をこそ更にかおもひ
すつまじけれ

やはたのりんごのまつりの名残こそいとつれなれ。

なごてかへりて又まふわさをせりけん。さらばをかし

からまじ。ろくをえて。うしろよりまかづること口をしけ

れ。なごらふま。うへの御まへにきこしめて。あすかへり

たらんめしてまはせんなどおほせらる。まことによ

ふらふらん。さらばいかれめでたからんなど申す。うれし

がりて宮の御まへにも。猶それまはせさせ給へどあつま

りて申まごひしかは。其たびかへりてまひしは。うれしか

りし物かな。ししもやあらざらんとうちたゆみつるに。ま

ひ人まへにめすききつけたる心ち。物にあたるはかり

故このなごちはしままで世の中にこそ出来
中関白道隆公薨し給ひて。御堂殿關白し給
ひしに。道長公道隆公と兄弟の御中より
さるにそへて。伊周公も下心いぢみみかち
ありしに。伊周公其時の太上天皇花山院を
由なき恨にて射率らんし給ひしつみ。又
藤中ならでせこなはせ給はぬ大元師法を伊
周公年比おこない給へるつみ。又其比の女
院東三條院をのり給へり云つみなど
て長徳二年四月太宰権帥に左遷し給へり。
御弟の隆家卿も花山院をわ給はんとせしつ
みありて。出陣へ配流せり。后宮定子は
此御恨にて御しおるして籠りおはす由。
榮花物語三四の巻大鏡にも見ゆ
何ともなくうたて 其比清少を妬む者有て
御堂殿がたへ清少の心ざしありと隠したる
ゆゑ久しく后宮へ出任せざりしに
黄栌葉のからきぬ 桃華葉に七月より九
月に至る云々
紫苑 河津云々もて藤芳うちもたぎ世云々
萩 おもてすはうらあなをしと桃華葉に
あり

さわらぬいと物くるはしく。しもにある人々まごひのほ
るまごこそ。人のすさ。殿上人などの見るらんもしらず。
もさかしらにうちかづきてのほるをわらふもことわり也
故このなごちはしままで。世の中のこと出き物さわがし
く成て。宮又うちにもいらせ給はず。小一條といふ所にお
はしますに。何ともなくうたてありしかは。久しう里に
たり。御まへわたりおほつかなさなぞ。猶えかくてはあ
るまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。けふは宮に
まありたれば。いみしく物こそあはれなりつれ。女はうの
さうぞく。もからきぬなどのさりにあひ。たゆまざるかし
うてもさふらふ哉。みすのそはのあきたるより見れつ
れば。八九人はかりめて。黄くちはのからきぬ。うすいろ
のも。しきん萩なごをかしうるなむたる哉。御まへの草の
うご高きさかどかればしひりて侍る。ばらはせてこそ

つたりきりせせりなめり
 いかなる事にては清少は侍ふべき物と后宮
 の照召しを清少へ傳へよとのやうに人々
 左中將にいひしこと
 るだいのまへの 是は禁中などの事を取ま
 せ給ふまにや。藤原は仁壽殿の邊に江
 次第六に見ゆ。但小二條にもるだいは作ら
 れしにや
 ぼたん 牡丹。花の比ならぬ枝葉も
 唐めきしとにや。唐朝に盛にもてあそびし
 亦白氏文皇。愛蓮歌などに見えたればや
 めきをかしといふにや
 げにいかならんと思ひ
 彼左中將の后宮の御心むけの事をうたられ
 したうけて。げに后宮の御氣色はいかなら
 んと心もさなく御多なき事なれしと清少の
 心
 左大殿 寛長公。長徳二年。月廿日。傳左大
 臣。公卿補任にあり

とひひつれば。露おかせて御らんせんとしてことごとくはらひて。
 宰相の君のこゑにいらへつる也。をかしくもおほえつ
 る哉。清少の事をの給ふこと 御里居いと心うし。かゝる所にすまひせよとせ給はん
 ほとば。いみじき事ありとも必^{女房達のいひしこと}とふらふべき物におほし
 めされたるかひもなくなど。あまたいひつる。かたりきか
 せ奉れどなめりかし。まゐりて見給ふ。あはれけなる所の
 さまかな。ろたいのまへにうゑられたりけるほうたんの
 からめきをかしき事などの給ふ。清少の詞 いと人のにくしと思ひ
 たりしかば。又にくし侍しかばといらへきことゆ。左中將の詞 おいらか
 おきなしやかなる詞さ
 にもとてわらひ給ふ。けにいかならんと思ひまゐらす
 御けしきにはあらや。さふらふ人たちの。左大殿のかたの
 人しるすぢにてありなごころめきことしつとひてものなど
 いふに。しもよりまゐるを見てはいひやみはなちたてた
 るさまに見ならはずにくければ。まゐれなどあるたびの

なまめ 長女。下つがへのなんはり
 おまへより 后宮の御きたり。左京のま
 みをとり次にて。此文を給へりなまめ
 したる
 こゝにてさへ 后宮は職人のまへをおぼし
 て清少への御文を忍ばせ給へるに。長女清
 少のつたにても忍ぶこと
 山吹の花びら 山吹は口なし色なればいは
 で思ふさいふ心なるべし
 いはでおもふに 「心には下ゆく水のわきか
 へりいはで思ふさいふにまされる」前にお
 ほせ事もなくて日ごろになればさある首尾
 なり
 まづしるさま
 「指」古今雜下よみ人しらす
 「世の中のうきもつらきもつげなくにまづし
 るものは涙なりけり」
 たれもあやしき御ながひ 清少の久しき風
 居を人々あやしむること

仰せをも過して。けに久しうなりけるを宮のへんには
 たゞあなたにたにたにしてそらごとなど出くべし。れい
 ならずおほせ事などもなくて日ごろになれば。こゝろは
 そくてうちながむるほどに。をさめ文をもてきたり。おま
 へより左京のきみしてしのびて給はせたりとるといひて。
 こゝにてさへひきしのおもあまなり也。清少の心 后宮の直に清少への
 御せらるるおまへ
 にてあらぬなめりとむねつふれてあげたれば。かみには
 ものもかゝせ給はず。山吹の花びらを只一つ包ませ給へ
 り。それはいはでおもふぞとかゝせ給へるを見るもいみ
 じう。日ころのたえま。思ひなげかれつる心も慰みてうれ
 しきに。まづしるさまをささめもうちまもりて。御前には
 いか物のをりことにおほし出聞えさせ給ふなる物をと
 て。たれもあやしき御ながるとのみこと侍めれ。なごかま
 めらせたまはぬなどいひて。こゝなる所にあからさまに

おなふる事さいひな
同下古哥の中に此哥は
えたる事なり
世俗に心やすき事を
おなふ

はたかくれ
のめる
「増」遊山賦に。半面あり

小町家集。しきけな
さやはたかくれけん
又源氏もの語松風の巻に
「凡物にうくれたる
はおな

此をりはまといひつ
いりておしふな
此折ふしにはりな
見つけではしはし
是清少の久しくま
は。かくいふに
れば清少を見つ
むま下と。是も御

清少のうわくしけ
詞
此をりはまといひつ
いりておしふな
此折ふしにはりな
見つけではしはし
是清少の久しくま
は。かくいふに
れば清少を見つ
むま下と。是も御

申かりてまゐらんと
まゐらせんとするに。
いとあやし。おな
る。こゝもどに
なごいふを聞て。ち
く水のとこそ申せ
ん。これにをしへ
すこしほごへてま
しうて。御木下
ごわらばせ給ひて。
べかりけりとなん
せしけれなど。か
わらばにせしへ
わらばせ給ひて。
あまよりあまづ
る事。あまよりあ
まづる事。あまよ
りあまづる事。あ
まよりあまづる事

なぞくあはせしける
殿を左方方わかれて
る事。なぞの哥合
ぐひなり

ひさうにたかし
非常に。さうに
つねならすな
むつければ
みなた人
あはするに

左右の方々の人々
なぞくを合せ
あはするに

ありぬべしなど仰
せしける所に。か
くしかりけるが。
なごたのむるに。
たむるに。其詞を
物し給へ。と申
おしはかる。日
うにをかしき事
なたのまれそな
ら其日になりて。
なごよき人々お
いみじうようい
ひ出んと思えな
く打まもりて。な

梅などのなりたるなりも
此桃の枝をばひあへるこまく梅のなりし時
もするごと

さみにもいれれば
相手の簪を照かれさいひて。手に入てもみ
なごして。傾ても筒にいれざるよ
さつみしうのふよも
さつうに我のさいを照られを照するも
よき目うたん物をさ

ないがしろなるけしき
しどけなきまこ。空蟬帯にふたあひの
うちきだつ物ない。しろにきなしてきま

ひ。とりわが。おれにおほくをさつごさかしかれ。く

ろきばかまきたるをのこはしりきてこふに。まてなごら
の今まはしてさいふのののちにはなごす
へは。木のもどによりてひきゆるがすに。あやぶがりて。
こるのやうにかいつきてさるもさかし。梅などのなりた

る折もさやうにぞ有かし」
是亦別段

きよけなるをのこのすろくき日ひとひうちて。猶あか
ぬにや。みじかきとうだいに火をあかくかへけて。かたき
果サイ和名

のさいきこひせめて。とみにもいれぬは。ごうをほんのう
へにたてよまつ。かりきぬのくびのかほにかへれば。かた
果をいれを待

手しておしられて。いとこはからぬえほうしきふりやり
て。さばらみしうのろふとも。うちばづしてんやと心もと
古くてなよりなる

なげにうちまもりたるこそほこりかに見ゆれ」
ほこりはしき

碁をやんごとなき人のうつとて。ひもうちとま。ないがし
石をたはちより置
ろなるけしきにひろひおくに。おどりたる人のあずまひ
位ひくき人。こまなき人の相手

もかしてまりたるけしきに。ごはんよりはすこしとほく
ておよびつ。袖のしたいまかた手にて引やりつ。うち
たるもさかし」
直衣の入紐

おそろしきもの
つるはみのかさ。やけたる所。みづぶき。ひし。かみおほか
るをのこのかしらあらひてはすほど。くりのうが」

かばらけ。あたらしきかなまり。たへみねとすとも。水を物
にいらすきかけ。あたらしきほそひつ」
きたなげなる物

ぬずみのすみか。つとめて手おそくあらふ人。しろきつ
はな。すしはなしありくちご。あふららるしもの。すまめ
の。あつちほをひひしんゆあみぬ。きぬのな入たるはら
つれも。きたなげなる中に。ぬりらるのきぬこそきた

けなりとのきぬ

六十九段

つるはみのかさ
根和名傑賢也云々。めんぐりの笠のたぐひ
なるべし
みづぶき 和名宗賢也。俗ニ鬼頭ト云。
其實似馬頭故以名之
くりのうが
【増】和名抄に 栗刺クリノイサ

七十段

かなまり 金梳和名前註
【増】竹取物語に「しろかねのかなまりをもて
水なくみありく」などあり。水なきを入る
一器
水を物にいら。透影 すきとほる物にいら
ほそひつ 孟津抄ニ綿をかけてむしりなど
するもの。細流ニわりなげなどのたぐひ
つま
すしはな
【増】和名抄に。菰須々波奈とあり
れりいみのきり
緑色の絹になたるはな
【増】弘云。白の細絹のふるびてなたる。露
けなりとのきぬ

七十一段

なげなれ

七十二段

まきぶのぞうのしやく
式部丞府。百寮訓要云。地下の六位可然の任に三々。式部丞と民部丞は二名の丞にて。必時を給ふ由職原抄に見ゆ。式部丞必叙時すといへど。猶地下にて昇殿もひなれば殿きにて

【町】此の五も十方殿抄にはなし

むしろばりの車のおそひ
進をおほひたる車なるべし。四宮記云天祿四年十一月八日女御懐子於三東河有除服一其儀御三様御毛車其上張三懸懸三懸色簾井下懸袂等三御被之後取三張懸一懸三懸簾等一即以

【町】万歳抄并ニ活本にはおそひをすそひに作

けびわしのはかま 是は檢非違使の下の替の長的事にや。其故は環翠軒云。吾嘗長とて別當の召具する物みな赤き袴衣に白き袴袴を着る。白杖を持て雜人等追拂之云々。此出立をいやしげなること

【町】おほむるのこころ。此所には無じかひ

くらへ馬見る
【町】活本に見るの二字なし

【町】おほむるのこころ。此所には無じかひ

いやしげなる物

まきぶのぞうのしやく。黒きかみのすぢぶとまき。ぬのひや
て給なき物
うぶのあたらしき。ふりくろみたるはさるいふかひなき
物にて。中へ何とも見えず。あたらししくしたてて。櫻の花
おほくさかせて。こふんすさなどいろとりたるるかきた
る。やり戸づし。何もあるなかものはいやしきなり。むしろば
りの車のおそひ。けびるしのはかま。いよすのすぢぶとまき。
人の子にほうし子のふどりたる。まことこのいづもむしろ
のたのみ

【町】此の五も十方殿抄にはなし

【町】万歳抄并ニ活本にはおそひをすそひに作

【町】おほむるのこころ。此所には無じかひ

【町】おほむるのこころ。此所には無じかひ

【町】おほむるのこころ。此所には無じかひ

【町】おほむるのこころ。此所には無じかひ

【町】おほむるのこころ。此所には無じかひ

七十三段

まりのつばは佛舍利を玉盤に入たるが見ゆ
るまいへる。今もおほくしするこ
なでしこのはな

人へする物 人へさへき世俗にいふ詞
増云。人へさのみにては聞えがたし
人へさありしその字落たるなるべし。
上文をへたる舎人わらは云々。又万十三
丁イ藤比座與伊加流我等此米登とあり

あやにくだちて 文無也。あながちめきた
る心なり。せそさちふ事な。しひてする
ひきはられ 引張れ也。イひきいられば引
とりいる心
親の來たる所えて
其子を愛する父のきたるには、りたるま
ま

其子の引さる。父の正なしなごはり
いひて其物をとりもくま
われえはしたなくもいはで
親もさまでしらぬな。他人は指つよくもし
からて遺具をこなはれて見ゆるこ

のもどにつれだちありく見るもうつくし。かりのこと。そり
のつば。なでしこのはな

人へするもの

ことなる事なき人の子のかましくまならはされたる。
はぶき。はづかしき人に物いはんとするにもまづさき
たつ。あなたとなたにすむ人の子ごもの四つ五つなるは
あやにくだちて。物など取ちらしてそこなふき。つねはひ
きはられなごせいせられて。心のまへにゆえあらぬが。親
の來たる所えて。ゆかしかりける物を。あれ見せよやは
など引ゆるがすに。おとなく物いふとて。ふとめま
れねは。手づから引さがしいで、見るこそいとにくけれ。
それきまをなとばかりうちひて。とりかんとて。なせ
そそこなふなごばかりあみてらふおやめにくし。われえ
はしたなくもいはでみるこそこころもとさけれ

あなふち 背みだちたる湖なるべし

増云。水深き湖のこと。万十ノ十八丁
「虎にのりふるやなをこえて青湖にみつちり
こんつるきたち」あり
不詳也。世のささこな
に出る雲

和名抄に。鰯。和名。加敷女似鰯色黄云々
ぬにしし。未勘。但土佐日記に鰯屋のつま
の鰯鰯とあり。鰯鰯は貝也。和名ニ鰯其
鰯似。鰯而大者也云々。是に。には助字な
るべし。

ひらひら雨 陸奥國抄云。俄にふる雨の聲
もりあり入して袖をさく雨
いさすたま 河津。鶴島遊仙。弄花
生靈也。又た。靈也
いりすみ 煎炭。こもり煎炭し炭に。鳥
にいりすみせすこと

いしきもの 覆盆子。まにまに文字は、いしき
つゆくさ 鴨頭草を言
水ふき 黄葉。つかり。本草云。黄葉。黄葉
三月生。葉貼。水大手。新葉。而背背。葉葉
背有。刺下界
もんやうはいせ

文章博士。史書詩文な。む人も。合鏡解
云。文章博士。五位下。弘仁二年定之云々。位ひき。官なればつく云々
皇后宮權大夫 職原抄云。藤原納言藤原及三位以上。中宮大夫は皇后の御内を管領すること。權大夫は大夫の。にあられば文字に見

名おそろしき物

あさふち。谷のほら。はたいた。くろがね。つちくれ。いかづ
ちは名のみならずいみしうおそろし。はやち。ふとらうらも。
はこほし。おほかみ。うしはさめ。らう。らうのささ。るにす
し。それも名のみならず見るもおそろし。なはむしろ。が
うたう又よろづにおそろし。ひちかき雨。くちなはいちで。
いさすだま。おにどころ。おにわらび。うはら。からたち。い
りずみ。はうたん。うしおに

いしきもの

いちで。露草。水ふき。くろも。もんじやうはかせ。皇后宮の
權大夫。やまも。いたどりはましてとらのつるどかきた
るとか。つるなくともありぬへきかほつとせ

るはごはなき歟
さりのつえき 扇杖和名抄に伊太止里云々。其聖のまじらにて成の名あるよし本立疏にあり
むつかしげなる 又物うき心もあり
ぬひもの 縞の絹のうら也。和名云藤助
切詩云。縞以五色縞一刺五物形状也
はきめ 狐腋裘。縞裘のたぐひ也。縞の裏
付物は縞の縫目見えてもさくしきにや

むつかしげなる物

ぬひものうら。ぬこのみよのうら。鼠のいまだけもかひぬきすのうちよりあまたまらばし出たる。うらまたつかぬかはぎぬのぬひめ。ことにきよけならぬ所のくらき。ことなる事なき人のちひこも子ごもなどあまたもちてあつかひたる。いとふかふしも心さしなき女の心ちあしうして久しくなやみたるも。男の心の中にはむつかしげなるべし

えせものゝ所うるをりの事

正月のおほね。行幸の折のひめまうちごき。六月十二月のつごりのよきりの藏人。季の御讀經の威儀師あかけごきて僧の文ごもよみあけたるいとらうくし。御ごきやう佛名などの御ごうぞくの所のしう

えせ物の所うる折
幣はあなづらはしき物の。折にふれては時
にあふ事
正月のおほね 盤固など用る大根也。花
ひ云。盤固は元三にはひをたむる也。
盤はよひひもむ。高土杯六本に折敷を
する一の盤に餅大根柄をもる下界
行幸の折のひめまうち君
東壁子也。公事根源にひめまうち君ハナリ。
正月の女叙位に叙爵する故姫太夫といふに
や。公事根源云。あつまわらはといふは。

内侍司の被官にて行幸の時ひめ松とてなかしき馬に乗て供奉するこれが事也。これはみつ子を用らるにや。三子は天子の守りになる由。由緒も侍る故とて。年ごに中文を出して必五位の位を給ふ也。是は昔より同じ名乗を相傳して。紀朝臣季明と名のる云々

よりの藏人 節折の命婦と云云。六月十二月晦日の夜。節折の命婦。竹を持てまわりて主上の御長より始めて。所々の寸法を取果て。宮主にきりあてがはせて御被をつむる也。あらたへにこたへて二度あり。二度果て藤を給ふ。節折をよきりといふ。竹にて御たけの寸法をきりて其ほどに切あてがへば也。公事根源にあり。延喜式藏人式云。十二月晦日諸司供奉荒世和世御裝束一同六月云々。又云孫府南北兩方立御屏風。其北御屏風前鋪三小庭。為節折藏人座。江次第にあり。雲圖抄に圓あり。幣はひき女官の此時座をひまへな所をうる也。季の御讀經の威儀師 季の御ごきやうごは。二月と八月に百敷にて大般若經を四ヶ日講せらる事也。江次第首書云。季御讀經春秋二季節首僧於南殿二體大般若經。其内定御前僧廿口於御殿讀三仁王經。下界。威儀師は此みまきやうに彼清涼殿にて仁王經をよむ。ころの御前の僧を引て入る奉行の僧也。江次第五季御讀經の所に。威儀師引御前僧入。自明神仙師等門云々。四宮記云。南座東端威儀師候前屏風雲々。雲圖抄に此圖ありあつげさきて 官職便覽云。延喜十三年九月三日延慶寺供奉記云。奉行僧二人威儀師從儀師始賜二赤袈裟云々。雲圖抄に此圖あり僧の文ごもよみあけたる 僧の名ごも書し例文なるべし。江次第五季御讀經事云。例文置上卿前二入三年々僧名名僧帳諸寺解文外任非死去勘文符與福寺延慶寺等聖職者注文。近例去年僧名上押し紙符行今年可謂定之僧名御ごきやう佛名などの御ごうぞくの所の衆 季の御讀經などに行幸の藏人。清涼殿をかざり。辨南殿をかざる事あり。佛名にもかざる也。裝束といふ也。藏人所の衆此時所をうるにや。雲圖抄の裏書云。季御讀經事初日行幸藏人裝束仕御讀經裝束二辨奉仕南殿裝束云々。すなはち圖あり江次第十一云。御佛名當日の裝束等如式下界。延喜式圖符察云。御佛名裝束御持佛一箱時給案一脚。供奉花香。金網花盤二口。火爐一口下略。此外三千佛の像二鋪十六佛名經一部などあり

かすがまつりのとねりごも。大饗のところのあゆみ。正月

のくすりと。うづるのほうし。五せちの心見のみふしあけ。節會御はいせんのおねめ。大饗の日の史生。七月のすまひ。雨ふる日のいちめ笠。わたりするをりのかんどり

かすがまつり 年中行事都合注云。すまひの祭は二月上の申の口也。まづ未の日勅使たつ。近衛の中將少將これをつむ。清和天皇貞觀元年十一月九日に始まれり云々。此勅使の近衛の舎人ごも。けふ所をうるにや。近衛の隨身置長府生等。このみのされりといふ也。又春日まつりに馬寮の使御馬をひきて社をめぐり。長者殿の神馬。此次にひきめぐる事江次第五にあり。又春日まつりの使途中次第に。七條大宮にて。除目をおひ。右左大臣各一人。以三龍官二任之左右大辨各一人。以番長二任之頭中將一人。以三府生二任之云々。これらのされりなごころをうるさいふなるべし

大饗のころのあゆみ 二宮大饗大臣大饗等也。あゆみとは或説云大臣などの御殿實に學生ごも列参して。嘉辰令月歎無極といふ詩を朗誦して腰指の絹を給ふ事云々。公事根源云。二宮とは春宮中宮を申之。玉輝以下木宮に参して拜禮の事あり。次に玄輝門の東西の廊にして饗につく。先中宮の饗につく。次に春宮の饗につく。三獻の儀有云々。猶江次第委。大臣大饗は前に委駐。あゆみとは歩の字也。江次第に勸學院歩といふ事もあり。常にはいさなる事なき學生などの此折に所をうるを云にや

七度まで一日に七度まうつると。初荷へは七度参る事信心にや。拾遺集に「瀧の水へりてすまはいなり山七日のほりしよるしとちもはん」さよあり

よき人の御前に
是より彼手よくく人のうちやましき事をいなり

鳥のあなごのやうに
手の一向あしきを云ふ源氏柏木巻に。あやしき鳥の跡のやうにてき。河津三。若狭二鳥跡作三文字史記

つらんとまで涙おちてやすむに。三十わまりばかりなる女衣をつはなる心之前に睡よき人にはあちりたまふのつはさうぞくなどにはあらで。たゞ引はこえたるが。まろは七度まうでま待るぞ。三度はまうでぬ。四度はことにもあらず。ひつじには下向しぬと。道にあひたる人入時の事にうちいひてくだりゆきこそ。只なる所にてはめもとまるまじき事我ありきりる時はればこの。かれが身にたゞ今ならはやとおほえしか。男も女も法師もよき子もちたる人いみしう浦山し。かみながくうるはしう。さがりはなごめでたき人。やんごとなき人の人にかしづかれ給ふもいとうらやまし。手よとかき哥よくよみて。物の折にもまづとり出らるゝ人。よき人の御前に女房いとあまたさふらふに。心にき所へつかはすべきおほせがきなごを。誰も鳥の跡などのやうにはなごかはあらん。これと下をに手よき人あるをわざとめして。御硯おろしてかへせさせ給うらやまし。こやうの事は所

なにはわたりの遠からぬ
手跡の未熟なるを云也。世俗に机はなれせぬといふたぐひ也。古今集序になにはつこのはな手習ふ人のほしめにもしけるとあるに付て。若狭巻に。また難波津をたにはりくしうつけ侍らさめればといへるたぐひなる入し

あつまりてたはり
彼手跡よき人になれたみうらやむまご。人々あつまりてたはき事なを説てしらすめること

三まいたう
河津三。三味は梵語也此ニ三味正受又名正定云々。法華三昧。念佛三味などして他事なく其草のみうけおこなふないふ也。其堂を三味堂といふ也

早く見まほしくきまほしき心
まきぞめむらぐりもの。巻染村遺話物。くりり物は源氏朝屋巻に。くりりぞめさへ入る物なるべし。今くりりといふ物のたぐひ也
ちもくのまだつとめて。難召除日の翌日早天ないふ也
必しる人のなるべき。知人の必受領すべき年は何の國守とて聞たきと

のおとをなごに成ぬれば。まことになにはわたりのとはからぬも事にしたがひてかくを。これはさばあらで。上達部手跡未熟なるにのもど。又はじめてまららんなど申さする人のむすめなどには。心こまに上よりはじめてつくろはせ給へるま。あつまりてたはふれにねたがりいふめり。琴ふえ習ふに。ここそはまたしきほごはかれがやうにいっしかとおほゆめれ。うち東宮の御めのこと。うへの女房の御かたぐゆるされたる。三まいだうたてよひあかつきにいのられたる人。すろろくうつにかたき相手のさののよく出るのよいきとたる。まことに世を思ひ捨たるひしり

とくゆかしきもの
まきぞめ。むらで。くりり物など染たる。人の子うみたる。男をんなとくきかまほし。よき人はさらなり。えせ物ゆす分際のことのまはだにきかまほし。ちもくのまだつとめて。必しる人

「増」弘云。心にたしなき處にて谷にイナサ
ホなごいふ意
さみの物ぬひに
頼の字に。近き時わざにもるべき物難は
居りつゝ、
物見の所に入居るこ

事なりけり。イさて入
祭などのわたる時節に成たるこ。源氏葵巻
に物も見て歸らんさし給へ。事なりぬと
いへば云々おな心
白きしも。登壇の白杖を持て來るこ。管
は犯人をうつ杖なり
「増」源接。たゞけいこのしもまにはあらで祭
はてたるあさより使の難なまへ引ゆく罪人
をひき來れるけいこのしもま。祭のけい
こにはあらす。さればやりよするといひた
るも罪人をいふなるべし
しられすおもふ人あるに
我ある事をかくさんとおもふ人の來たる
時。我は隠れ居て前なる人に我こにあら
ぬ由を教へていはせたるこ。イニ我はかく
れおてしられすと思ふ人のきたるに。前な
る人に。物いはせてきゝわたるこ。あり

のなるべき折もきかまほし。おもふ人のおこせたる文」
こころもとなき物

人のもとにとみのものぬひにやりて待ほど。物見に急ぎ
出て。今やくとくるしう居りつゝ。あなたをまもらへ
たる心ち。子うむべき人の。ほど過るまをさるけしきのな
き。遠き所より思ふ人の文をえて。かたくふんじたるそく
ひなどはなちあくる心もとなし。もの見に急ぎ出て。事な
りにけり。白きしもとなき見付たるに。ちかくやりよする
ほど。わびしうありてもいぬべき心ちこそすれ。しられじ
と思ふ人のあるに。まへなる人に教て物いはせたる。いつ
しかどまもち出たるちこの。いかもかなどのほどになり
たる。行末いと心もとなし。とみの物ぬふに。くらき折。は
りに糸つくる。されどわれはさる物にて。ありぬべき所を
とらへて。人につけさするに。それもいそげはにやあらん

ありぬべき所をさらへて
我は糸付べき針をさらへて人にやさひて
つけさす
それいそげにや
やさはれし人も氣をせくゆゑにやあらん頼
てにもえつけぬ
只今おこせんとて
其のりし車を追付返さんてのりて出しこ
おほいきけるを
彼車の歸るを待程に他の車の大路をゆくこ

取さしよせたるに
「訂」原本たてるがとあり。今イ木によりて改
めつ
さみにいりすみかこす
照原也。急に炭をおこすに。おこりおぬる
程の久しく心もとなき
「訂」此所の心もとなしな。原本にはひきしと
せりよてはいま。調度はわやうなれば。
今イ木の文に従ひて改めつ
けさう人などばさし
懸想人への返折は。原を物もはせて通く
すべければ。さうさうさうさう。又自然
急ぐべき折もあり

とみにもえさしいれぬを。いで只をすげそとらへて。さす
がになどてかばと思ひがほにえさらぬは。にくさへそ
ひぬ。何事にもあれ。いそぎて物へゆくをり。まづわがさ
るべき所へゆくとして。只今おこせんとて出ぬる車まつは
どこそ心もとなけれ。おほぢいさけるを。さなりけるこよ
ろこびたれば。外さまにぬるいと口をしまして物見に
いでんとてあるに。事はなりぬらんなどいふをきくこそ侘
しけれ。子うみける人のこと久しき。物見にや又御
寺まうやなどにもろともにあるべき人をのせにいきたる
を。車さしよせたるに。とみにものらでまたするもいと
心もとなくうちすてしものぬべき心ちする。とみはいつ
ずみおこすいと心もとなし。人の哥の返しとくすまをき。
えよみえぬほどいと心もとなし。けさう人などはこしも
いそぐまじけれ。かのづから又さるべき折もあり。又ま

さきのみこそは

口さきのみこそ規模ならめと思ひて急ぎ
み出ればひの事も出来ること

まつはぐらめ 松葉黒待幽黒。兩院
「此の兩院」の註釋當なり。季禮云。

まつの二字行。上の行の明るまつのまつ
誤てこゝには入れるなるべし。さて幽黒の
ひるなまつほどをいへる。

演接。是亦よくあたらす。今原に上文
の云つてけたる例を考れば。まつはまたを
查ひがめたる。又の意にてよくきこゆ

故殿の御ふくの比
中朝白殿長徳元年四月十日。服忌令云。

父母服一年。暇五十日云々。
六月廿日の御はらへ

定子の故に出給ふべきこと。故は關職など
にもあるべきこと年中行事註有

官のつぎのあいたる
太政官廳のあきし所へ渡御しあいたる所
とは朝所にや

時つぎのあいたる 兼中の瀧廻博士の事。可
察訓要云。瀧廻博士は瀧をめぐりて。晝夜
の時を何ふ。瀧水のうつるを守りて。時
を正しくする職也。職員令云。瀧廻博士二
人。掌守辰丁何瀧廻之節。守辰丁廿
人。掌何瀧廻之節。以時時。鐘鼓

たのむにのほり

新古今「高き屋」のほりて見れば。獨立民の
ままに高き屋にほりて。仁徳天皇御世
東野州注云。たのむ屋は樓閣などの事

くらまぎれにそ

あつぎに高き樓閣へ上らざりし人々。くら
まぎれに若き女房にまほりてあそびあり
く

右近陣

月華門をいへり。拾芥に委
上達部のつき給ひし
公卿の着座し給ふ所にも女房のほりて
のぼるなるべし

上官

政官也。太政官の官人辨少納言外郎
などないふこ
うちをなし

「町」

原本ふしたるもさあり。今イ本によりて
改めつ
ふるき所なればむつてさいふ物
こゝも法華經譬喩品の長者の大宅久しく
ふりて。蜈蚣袖縫守宮百足などの踏踏虫交
横蹴走せしさまなちもひてけるにや

坂田秋草子著晴抄巻の八

百十七

して女も男もたゞにいひかはすほどは。さきのみこそは
と思ふほどに。あいななくひが事も出くるぞかし。又こゝち
あしく物おそろしきほど。夜の明るまつこそいみしう心
もとなけれ。まつはぐらめのひるほども心もとなく

故殿の御ふくのころ。六月廿日の御はらへといふ事に出
の給ふべきこと。前二註

させ給ふべきを。しきの御さうしは方あしとて。官のつか
このあいたる所いたるにわたらせ給へり。其夜はさばかりあり

くわりなきやみにて。何事もせはうかはらふまにてさま
こと也。れいのやうに格子かうしなどもなく口めらりてみす
はかりをぞかけたる。中くめぐらしうをかし。女房庭に

ありなごしてあそぶせんさいにはくわんさうといふ草を。
ませゆひていとおほくうゑたりける。花きはやかにかさ
なりて咲たる。うへくしき所のせんさいにはよし。時づ

かさなどはたゝかたばらにて。かねの音もれいには似ず
守辰丁の時鐘

まてゆるをゆかしかりて。わかき人々二十餘人はかり。そ
なたに。ゆきてはしりより。たかきやにのほりたるを。こ

れより見あられは。うすに薄びのもからきぬ。おなじ色のひ
とへがさぬ。紅の袴くわどもきてのほり立たるは。いと天人

なごこそえいふまじけれ。そらよりおりたるにやとぞ
見ゆる。おなじわかさなれど。おしあけられたる人はえま
じらで。うらやましけに見あけたるもをかし。日暮てくら

まぎれにぞ。過したる人々みなたちまじりて。右近のちん
へ物見に出きてたばふれさわきわらふもあめりしを。か
うはせぬ事也。上達部のつき給ひしなど。女房どもの

ほり上官などのるる障子しやうしを皆うちををしをこなひたりな
どくるしがるものもあれど。まゝもいれず。屋のいとふる

くてかはらふきなればにやあらん。あつこの世にしらね
は。みすの外とに外よるもふしたるに。ふるき所なれば。むか

百十七

太政官の地のいまやうらの

やうは八脚にや。これ古き序文などの句

なるべし。道而可考

〔可〕漢接。やうは野干の音便カ。弘接るに。

傍註及び萬歳抄に。やうのにはい。野郊

場とあるぞよろしきやうと。こはかの古

今集に「ささはあれて人はふりにし宿なれ

や庭もまがきも秋の野らなる」と。通略がよ

みたる歌などの心にや。因云。八脚をや

うさいふこを見あたらす。源氏などにもあ

れど昔はかうさけり

かたへす。しからぬ風の

六月より初秋までこゝに后宮のおはせしに

や。古今二夏と秋を行ふ空の道路はかた

へ涼しきかせやふくらん。此うたをうけて

殘巻を云ふ

七夕まつりなど

八日に御前の夜七夕と。を巧真の事江

次第にあり

宰相中将齊宿

長徳二年四月廿四日參議恒徳公の三男

のふかたの中將 宣方六條左大臣重信公息

人間の四月をこゝ

白氏文集十六云。大林寺桃花

人間四月芳菲盡山寺桃花始盛開長恨春歸

無聲處不知轉入此中來云々。此時こそ

はこゝめこと。三月卅日にあすはいかなる

詩をいへばなるべし

でといふ物日ひと日おちかより。はちのすのおほきにて

つぎあつまりたるなど。いとおそろしき。殿上人日ごと

まゐり。夜もるあかし。物いふをまきゝて。秋はかりにや。太

政官の地のいまやかうのにはとならん事をとすじ出たり

し人こそをかしかりしか。秋になりたれど。かたへすし

からぬかせの。所からなめり。さすがに虫の聲などはきこ

えたり。八日ぞかへらせ給へば。七夕まつりなどにて。れ

いよりちかう見ゆるは。ほどのせはければなめり

是より別段三月卅日の事云々

宰相中将たのふ。のふかたの中將とまゐり給へるに。人

々出て物などいふに。ついでもなくあすはいかなる詩を

かといふに。いふかおもひめららんとこほりもなく

人間の四月をこそはといらへ給へる。いみしうをかしく

こそ。過たる事なれど心えていふはをかしく中にも。女は

うなどこそとやうの物わすればせぬ。男はともあらず。よ

露にのみし 露信の古詩を宛て答給ふを感

する詞云

ほそぎの、一の口

弘敷殿の邸の第一にあたりたる戸口なるべ

し。源氏花宴に。三の口あきたりとあるた

々ひ歎。弄花抄云。弘敷殿の東にわたり庭

あり。それを細殿といふ。ほそぎのへ出る所

に戸三有。南の第三にあたるくるました

る戸也云々

頭中將源中將 前にいへる露信と宣方と

露は別のなみだ

菅家文章五云。七月七日代二牛女情懐

露照前涙一珠空落雲足殘粧態未成此句題

詠にもあり

かづらきの神今ぞ

拾遺「岩橋のよるの契も結ぬべしあくる露

しき葛城の神」役行者。金峯山とくづらき山

の間に岩橋をかけさせしに。かづらきの神

かたち見にくき故晝夜を語たる事あるをよ

める所也。此双紙の心も明はなれてかたち

のぼしたなくあらはなる事を能ていへるな

るべし

わけておはしし 前に露は別のと吟下給

ひし其露を分て露信のかへり給ふ

みたるうたをだになまおほえなるを。誠にをかし。内なる

人も外なる人も。心えずとおもひたるぞことわりなるや

此三月三十日はそと一の口に。殿上人あまたたてり

しを。やうくすべりうせなどしてたゞ頭中將源中將六

位ひとりのこりて。よろづの事いひ。經よみ哥うたひなど

するに。明はてぬ也。歸りなんとて。露は別のなみだなるべ

しといふ事を。頭中將うち出し給へれば。源中將もろとも

にいとをかしようずんじたるに。いそぎたる七夕かなとい

ふを。いみしうねたがりて。曉のわかれのすぢのふとおほ

えつるまゝいひて。わびしうもあるわざかなと。すべて

此わたりにては。かゝる事思まはさずいふは口をしきぞ

かしなどいひて。あまりあかくなりにかは。かづらきの

神今ぞすぢなきとて。わけておはししを。七夕のをり。

此事をいひいやはやと思ひしかど。宰相になり給ひにし

露は別の吟の事云

露信長徳二年四月廿四日參議

宰相になり給ひにし

いづつかは其ほどに見付
上達部に齊信の成給へば。殿上人のやうに
中宮の御つたへもおはせむをいづつ其七
の比にも見付て此事をいはんと

月ごらいつしお思ひ侍したに
月ごら此事をいづる齊信に申出んと思ひ
おまへしたに
我心なりすきくし
齊信の覺給はの事なごいひ出んも。我心な
ら物すまなるわざを思案せしに
もるまにれたがり
宣方の事。齊信則と共清少にさめら
れたがりし事
げにさしつなご
げにさしつなご
をさしつなご
ひ詞なれば知がたし。但漢の張翥河漢を
尋て婦女を見し事あり。けふ七日なれば其
よせある事なご
よき中なればきくせてけり
齊信宣方申ければ其子細を齊信のまかせ
給ひし事

こぼん侍や 恭盤之。清少にいひよらんた
めにいづるよと詞
手はゆるし給はんや
清少。宣方に心さけ給はんやと。源氏竹
川巻に「哀さて手をゆるせししきしに
君に任る我身ならは」是も恭に寄し
さのみあらば 女のさやうに人になびは
不定の物にならんご
悦び給ひし
【訂】こぼん侍とあるへき階格しは其の誤
にや
猶過たる事忘れぬは
齊信の露は別の涙といひし事を覺給ひしを
感する
詩なごいさなごし
齊信の明跡よくし給ひしに。上達部に成て
昔のやうにもまわり給はでせしは
くちみしからんご
せうくわいけいのこびや
明跡云。藤合積之過古朝記神皇代之文
是朝綱朝の交友の序の文。合積の太守藤
氏興の季禮が賢をたひて其朝に行あそび
し事

かは。必しもいかでかは其ほどに見付なごもせん。文かき
てどのもづかごしてやらむなご思ひしほどに。七日にせよる
の御方へ
り給へりしかは。うれしくて。其夜の事なご云出は心もご
せんご
え給ふ。すぐろにふごいひたらはあやしなごやうちかた
んご
ふき給はん。ごらはそれには有し事いはんとてあるに。露
のよく覺え給ひし
おほめかでいらへ給へりしかは。まこといらみしうをか
しかりき。月ごらいつしかとおもひ侍したに。わが心なが
らすきくしとおほえしに。いかでさはた思ひまうけた
えてきたへ給ひけん
るやうにの給ひけん。もろともねれたがりいひし中將は。
思ひもよらでめたるに。有し曉の詞いましめらるは。し
らぬかごの給ふにぞ。けにこしつなごらひ。まごこはてうけ
んなどいふ事を。人にはしらせず。此君と心えていふを。何
事ぞくと源中將はそひつきてごへごいはねは。かの君
になほ是の給へごうらふられて。よき中なればきかせて

けり。いとあなごいふ事はいひきかせられごも又ほごなく餘のちひ詞をいふご
おし小路のほどごなごらふに。我もしりにけるごらつし
かしられんとて。わざごよび出で。こぼん侍やまらもうた
んご思ふはいか。手はゆるし給はんや。頭中將とひとし
ご也。なごほしわざごといふに。ごのみあらは。さだめなく
やごいらへしき。かの君にかり聞えければ。うれしくい
ひたると悦び給ひし。猶過たる事忘れぬ人はいとをかし。
宰相になり給ひしを。うへのおまへにて。詩をいとをか
うずんご侍しものき。せうくわいけいのこびやうをも過に
しなごも誰かいひ侍らんとする。しはしならでもごふら
へかし。口をしきになご申しかは。いみしうわらはせ給ひ
て。ごなんらふごてなごごかしなごおほせられしもをか
し。ごれごなり給ひにしかは。誠にさうごしかりしに。源
中將おとらずと思ひて。ゆゑだちありくに。宰相中將の御

未だ三十の詞
未だ三十期古詩の詞なるべし。未だ勅
文
「指」本朝文粹の二に。源光朝の。顔回周賢者未
至三十期云々といふ事なきにや
さらにもあらざる
わろくもあらざる。よくもあらざる。よくも
わるくもあらざる。其故に情しの事やそのよき
なること

宣方の書信のちうえいに似せて

かうなんいふ 清少のくごさくといはば其
期詠を我になしへ給へん

宣方の書信のちうえいに似せて

たちたるなり

局にたすみうたひしきの心
たれぞさにくちらぬけしきにてさひ給へば
彼たそさつる清少のけしきのいほしく
て。此誓ひて詠下たる事をあざれてつたる
ぞん

うへをいひ出て。いまだ三十の詞におよばずといふ詩を。
書信のよき詠下給ひしこと
こと人にはにずをかしようずし給ふなどいへば。なごかそ
れにおとらん。まよりてこそせめてよむに。さうらにわろ
くもあらずといへば。わびしの事や。いかであれがやう
にずんせをなごの給ふ。三十の詞といふ所なん。すべてい
みしうあいなぎやうづむたりしなごらへば。ねたがりて。わ
らひありくに。ざんにつき給へりける折に。わきてよび出
て。かうなんいふ。猶そこをしへ給へといひければ。わら
ひてをしへけるもしらぬに。つはねのもとれて。いみしく
宣方の詞
よくにせてよむに。あやしめてこはたそとへば。あみこ
ゑにありて。いみしき事きこえん。かうくさのふぢんに
つきたりしに。とひきてたちれたるなめり。誰ぞとにくか
らぬけしきにて思ひ給へればとらふも。わざとこならひ
給けんをかしかければ。これだにきけば出て物なごらふぞ。

宰相のさく見る事

清少の出で物いふも。書信のちうえいをな
しへし功徳を見ること
まもにありながらうへになご
常は清少の局に有ても后宮の御前になご留
守つひて宜方にあはねん
右近のさうくわんみつ何
右近衛將光とまでは覺て其名を忘れしま
ま。諸官のみみすけせうさくわんさてあ
り。近衛つひは大將をのみみして。中少
將をすけし。將監をせう。將監をさくわん
とす。さうくわんはさくわんをせむ

其は過ぬらん茶買臣がゆを 是宜方の年
齡なたはふれていふ詞。三十歳は過て四
十餘五十歳にもあらん心の心。前漢の茶
買臣が。買臣が食きを疎みて去ん事を求
しに。買臣笑曰。我年五十餘。買臣今已四
十餘矣。女若日久。待我買臣。報三女功。と
教へいさめし事。前漢書六十四に。茶買
臣が傳あり。其事を云

宰相の中將の徳見る事。そなたにむかひてをかむべしな
ごいふ。志もにありながら。上になどいはするに。これを
うちいづれば。誠はありなどいふ。おまへにかくをぞ申せ
は。わらはせ給ふ。内の御物いみなる日。右近のさうくわ
んみつなにとかやいふものして。たうがみにかきてお
こせたるを見れば。ごんせんとするを。けふは御物いみに
てなん三十の詞におよばずはいかごといひたれば。かへ
りごに。其は過ぬらんしゆはい臣がめををしへけん
年にはしもと書てやりたりしを。又ねたがりて。うへの御
前にもそうしければ。宮の御かたにわたらせたまひて。い
かでかふる事はまりしぞ。四十九に成ける年こそさはい
ましめければとて。のぶかたはわびしういはれにたりとい
ふめるはとわらはせ給ひしころ。ものぶるはしかりける
君かなど覺しか

こきでんには
弘徽殿女御様子の事。閑院太政大臣公季
公の御むすめ。一條院の女御。

おはしまし
「増」直接。おはしましは。おはしましに
之。一は音便之。まじりてをまいてさいふに
おなす。初巻願などまいてさあるなご思ふ
へし
御とのむなご。容直之。御番仕る事之。中
宮へ御見まひの事をうくいへる
さるべきさまに女房など。清少などのあへ
しらひ給はれば。物うくて疎遠になりたる
こと

うちふしすむ所の
彼うちふしがむすめ左京の事を秀句にい
る
すべて物きこえずかつた人さたのみ
清少は口まがならず我方人さたのみしに
こと
人のいひふるしたるさまにさりなし給ふ
世の人も此事いひふるすに。それとおなす
さまに清少の取なしひひなること

さるべき事もなき
清少の詞には更に聞さむる事もなきにうら
み給ふは。様子こそあるらめこと。恨み腹
立なほさほり云云
「増」演按。ほさほりは。今俗にアツクナルと
いふに同く。腹たぢいするなひふならん
是もかのいせ給ふ
清少のなしていはするさ。のぶつたのう
ちみ給ふ

殿上人のわらふこと
殿上人も此事によりて笑ふ故又清少に此う
ちみないひ出しこと
さてはひさりな恨み
殿上人も笑ふさならは清少一人此うちみを
ふべきにもあらぬな。あやしうかこち給ふ
こと

むかしおほえてふよう成
昔の御は有ながら不用に成くだりし心
うけんべりのたいみ
細細様
ちずりの物。白き絹に花田色のこもんなご
すりたる
ふ下の目くらま
「増」下は。禁庭にありて守衛する士
衛士給御清濁二儀なるべし
あびそめのはひかり
蒲団染薄紫。紫は桂の灰をす物なれば
其色のさめたる灰かへるさいふ

八十四段

是より別段
こきでんとは閑院の太政大臣の女御とぞきこゆる。其御
かたに。うちふしといふものゝむすめ。左京といひてさふ
らひけるを。源中將かたらひて。おもふなど人々わらふこ
ろ。宮のまきにおはしましにまありて。時々御との
なごつかふまつるべけれど。さるべきさまに女房なども
てなし給はねは。いと宮づかへおろかにさぶらふ。どの
所をだに給はりたらんは。いみしうまめにさぶらひなん
なごいひる給ひつれば。人々けになごいふほどに。まこと
に人ばうちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたり
にはしけくまありたまふなる物をとこしいらへたりとて。
すべて物きこえず。かた人となのみきこゆれば。人のいひ
ふるしたるさまに取なし給ふなど。いみしうまめたちて
うらみ給ふ。あなあやし。いかなる事をかきこえつる。更
に聞とゞめ給ふ事なしなどいふ。かたばらなる人をひき

ゆるがせは。さるべきことおもなきをほとほり出給。さまこ
そあらめとて花やかたにわらふに。是もかのいばせ給ふな
らんとていと物しとおもへり。更にさやうの事をなんい
ひ侍らぬ。人のいふだにけく物をとひて。ひきいらに
しかは。後にも猶人にはちがましき事云つけたるとうら
みて。殿上人のわらふとていひ出たるなりとの給へは。さ
てはひとりさうらみ給ふべくもあらざる。あやしなど
いへば。そのうちばたえてやみ給ひにけり
むかしおほえてふようなる物
うけんべりのたゝみのふりてふし出きたる。からゑの屏
風のおもてそこをばれたる。藤のかよりたる松の木かれ
たる。ちずりの物花かへりたる。あしのめくらま。きちや
うのかたびらのふりぬる。もかうのなくなりぬる。七尺の
かづらのあかくなりたる。あびそめのおり物のはひかへ

浮草水草蒔りて
難取つゝるふ物もなき心をふくめたり

八十五段

夜明けがち 夜明け
六位のかしらしるき
若きは末の昇進の類もあれど。若たるはた
のもしげなき人
人の事なしがほに
人の事を暗取て。其事を成就せんとするま
まに
経は不断經
たゆむたゆむま下りのたのみぞたを心なる
へし

りたる。色このみの老くづせられたる。面白き家の木だち
やけたる。池などはさながらあれど。うき草みくさしけり
て

たのもしげなきもの

心みじかくて人忘れがちなるむこのよかれがちなる。六
位のかしらしるき。空ことする人のさすがに人の事なし
がほに大事うけたる。一番にかつす六。六七八十なる人
のこゝちあしうして日ごろになりぬる。風吹にはあけた
るふね。経はふだんきやう

ちかくてとほき物

宮のほとりのまつり。おもはぬばらから兄弟まんどくの中。く
らまのつららざりくらふみち。まはすの晦日。む月一日の
ほき

とほくてちかき物

八十六段

宮のほとりのまつり
たまは春日八幡など遊き所も。其儀武は
宮中にてあれば。近く遊きなるへし
くらまのつららざり
九折ツラナリ。今鞍馬に七曲といふ道也。
近き道なまがりのほは遊き也

八十七段

とくらく 阿彌陀佛に。四方通二十万佛佛
土に在り世界名曰極樂を説き。又阿彌陀佛
去し此不遠ともける心なるへし
舟のみち 三四十里の道も風よき時は一日一夜にもゆく心にて
男女の中 男は陽。女は陰。たぐひこなる物ながら。夫婦合縁の理遠くて近し

とくらく。舟の路。男女の中

井は

ほりかねのる。走井近江はしりるは。相坂なるがきかしき。山のる。
さしも淺きためしになりはじめけん。あすの井。みもひも
さむしとほめたるこそをかしけれ。玉の井。入雲に山城せうしやうの
井。櫻井。きさきまの井。千貫のる

八十八段

ほりかねの井 武國之
山の井さしも淺き
万葉「淡香山影さへ見ゆる山のの淺き心
は我ちもはなくに」大和物語には淺くは人
をおもふ物にはさ有。隨興之。猶あまたあ
り
あすの井もひも寒し
籠馬樂「飛鳥井に宿りはすべし陰もよしみ
もひも寒しみま草もよし」花鳥餘情云。あ
すの井のうたの陰もよしは水陰也。みもひもは寒水也。みま草は草也。一説飛鳥井は京にある清水也。二説万里小路に有云
「増」山城の國相樂郡にあり
せうしやうの井 少將井さき。鳥丸の東。大炊御門の南に拾芥にあり
「訂」原本せうしやうの井あり。今イ本によりてのものを補ひつ
櫻井 山城水無瀬の近邊也。待賢の小侍従の舊跡ある所也
きさきまの井 后町は。常樂殿にありと拾芥に見ゆ。井も有しにや
千貫の井 入雲に。ちねきののこあり

受領は

紀伊守。和泉

やどりのつかのむのむのかまは

受領は 國司の事
紀伊守 上國なれば。従五位下也。和泉は下
國にて従六位下也。官位令ニ有
やどりのつかのむのむのかまは
後醍醐。舟橋從三位の。藤原抄の私抄云。宮

下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

官とは官外記などの五位したるが。頼朝職に任下りたき。外國等にしばし任す。これは官を宿す也。藤原抄云。權守者近代多是通授也。環翠軒云。通授とはあるにさづかる也。國の守は四位五位の者先任下りて明任におもむくを。權守は。其國へはおもむす。これ通授の儀也。又曰權守は地下の五位六位これに任す。又春の除目の時。參議院客などの兼官になる事も有。それは別事也。下野。甲斐。越後。およそ諸國に大國上國中國下國とてあり。大國は上國には權守あり。中下國には權守なし。此草紙の五ヶ國は皆上國也。權守勿論有

九十一段

大夫 侍の叙爵せしむ大夫といふ也。環翠云。八省の丞左右衛門尉など五位に成たる時。中務大夫。式部大夫など云ふ。侍の面目也云々。式部丞は。相當六位なるを。五位に叙して叙爵したるを。式部大夫といふなり

大夫は 式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人おもひかくべき事にあらざり

左衛門大夫 左衛門大尉は六位也。叙爵して左衛門大夫といふ也。史大夫 左右大史は正六位上也。五位になりて史大夫といふべし。かうふりえて云々

かうふりえて何のたゆふ。權の守などいふ人の。板屋せはき家もたりて。またこひ垣などあたらしくし。車やどりにくるを引たて。前近く木おほくして。牛つながせて。草などかはすことそいとほくけれ。庭いとまよけにて。紫がはしていよすかけわたして。ぬのさうじはりて住居たる。よるは門つよくさせなど事おこなひたる。いみしうおひさかなき

おのの家しうとは更之 是より彼門つよくさせなどいひし事の心づきなきに付て。住べき家は假初にて少飛たるやうなるがよき事をいふまで。其のしななくさまく書ついたり

おのの家しうとは更之。いひ付る。男の家はいふも更之也。伯父之。兄之。紫がはしていよす 伊豫藤をむらさきの草にてかけたる也

おのづからむつましううち知たる受領 自然したしく知たる國守の家。又は其國守の住國へ行て留守に住人もなくいたづらにあるなど借て住もいからんとの心也 宮ばらなどの屋あまた 宮達ある所を宮ばらといふ也。伊勢物語にそこ成ける宮原にさあるにちなし。源氏に宮腹の中將とあるは別の事也 〔按〕こは殿原奴原などいふさきのほらと同意にてだちなどいふにおなづつを待出でのち 其家に住へき程の官に至り。身の感馳付て後にすむ。いよすけれと云 いとよもぎしけり 〔附〕原本に糸よもぎしけるは。糸を假字に用ひたるなれど。頼はしきやうなれば全取めつ 所々すなごの中より背き 明詠ニ庭増三氣色二晴砂縁。又新抄草只三分許なごもいへるさま也 きはくしき 急度する心也

になどのすまぬいへ。其さるべき人のなからんは。おのづからむつましううちしりたる受領。又國へ行ていたづらなる。さらずば女院宮ばらなどの屋あまたあるに。つかさどちち出て後。いつしかとよき所尋出て任たるこそよけれ 〔これより別段也 不全也〕 女のひとりすむ家などはたゞいたうあれて。ついでなどおもまたからず。池などのある所は。みくさる。庭などいとよもぎしけりなどこそせねども。所々すなごの中よりあさき草見えさびしけなるこそ哀なれ。物かしこけにたたらかにすりして。門いたうかため。きはくしきはいどうたてこそおほゆれ 宮づかへ人の里なども。親どもふたりあるはよし。人しけく出いり。おくのかたにあまたさまくこのおほくきこえ。馬のおどしてさわがしきまであれどかなし。されど忍びてもあらはれても。おのづから。出給ひけるをしらで

うたてまわがし
夜中までまわがしを家主がの心もまなく
ちもままた。是も親なき人の里守なれば。
家守などの心に任せてつとく守る。宿しき
事なつと

なまふせのしげに思ひて
防の字。彼さひ来てある人を防ぎいさほ
しげに門守のいふと

このかく今や出る
人出給ひなばさくをせといひつけられし門
守などの。客は出給へるやそのぞきつと
ふを。客の供人のわりひてまねなするこ
とにいらにでていはぬ。
色にでておもふしなむいはぬとてと

夜ふけぬみかあやふなる
用心もあやふきに。さく寝て門をせんと
てれたるもありと。いぬるもありは。
早く歸りて門をせんとていにしと。此本
可然にや

とも。又いつかまはり給ふなどもいひにさしのぞく。心が
けたる人ば。いかゞはと門あけなごするを。うたてまわが
しうあやふけに。夜なかまをなご思ひたるけしきいとに
くし。おほ御門はさしつやなごをばすれば。また人のおほ
すればなご。なまふせがしけに思ひていらふるに。人出給
ひなばとくさせ。此ごろはぬす人いとおほかりなごいひ
たる。いとむつかしう。うちきく人だにあり。此人のとも
なるものども。このかく今や出るとたえずさしのぞきと
けしき見る物どもを。わらふべかめり。まねうちするもま
よてはいかれいとまきびしういひとがめん。いと色に出
人の事な云
ていはぬも。おもふ心なき人は。必きなごやする。これと
すくよかなるかたは。夜ふけぬ。御門もあやふかなるとい
ひてぬるもあり。まこと心に心さしことなる人は。はやなご
あまたたびやらはるれど。猶居あかせは。たびくありと

門守の心
に。あけぬべきけしきをめづらかに思ひて。いみしき御門
まことよひららうとあけひろけてと聞えごちて。あぢき
なく曉にぞさすなる。いかににくき。おやそひぬるはなほ
こそあれ。ましてまことならぬは。いかに思ふらんとて入
自由なるまことふくめたり。句 凡人
つとましうて。せうとのらへなごも。けにきくにはごぞ
あらん。夜中あかつきともなく。門いと心がしこくもなく。
可畏と門をすなれとなくと

何の宮内わたりの殿はらなる人々の出あひなごして。か
うしなごもあけながら。冬の夜をるあかして。人のいでぬ
るのちも見いだしたることをかしけれ。有明なごはまし
ていとをかし。笛などふきて出ぬるを。我はいそぎてもね
られず。人のうへなごもいひ。哥などかたりきくまうに。ね
いりぬるこそをかしけれ

雪のいとたかくはあらで。うすらかにふりたるなごはい
とこそをかしけれ。又雪のいとたかく降つみたる夕ぐれ

あけぬべきけしきをめづらかに
歸らで夜あかさんするけしきを門守のめづ
らかなる人々なごもふと
こよひららうとあけひろけて
古語未勘

【訂】諸本此所に脱なし。然して漢臣も一言の
脱なきはいさいぶかし。弘接。こは折文な
るべし。考るにらいうは。古抄本にら
さぞに作る。然らばうはその誤なる事は知
られたり。然していははの筆誤にはあらざ
る。さてはこよひららさぞさむべし。
即ち今宵等は然やサニとていふ義。温に
て文意明瞭なるべし
おやそひぬるはなほこ
親の守る人は。門守のむつかしきより猶つ
ましくこそあれと
けにきくにはさぞあらん
兄なごの間に猶もふ人に違事のつとま
しからんと

何の宮うちわたりの
なんでふ其宮のたの殿原。禁中などの殿は
らの忍びて來達ふ心
人の出ぬるのちも
かの忍びてきし人の歸りたりしのちも
人のうへなごもいひ哥など
れいらねほごに。かたへの人に人の上を
かたり。哥物かたりなもして。人のいふを
もきくくれいりたると

雪のいとたかくはあらで。うすらかにふりたるなごはい
とこそをかしけれ。又雪のいとたかく降つみたる夕ぐれ

あはれなるもなほしきも
世の中の哀なる事面白き事なごをも

なんでも事にさばり
何さいふ事の故障にて。只今まかりしごい
ふこ

けふこい人な
拾遺集「山里は雪ふりつみて遊もなしけふ
こい人を哀さほみん」兼盛のうたこ

あけくれのほどに
味爽の文藻を夜明んとしてまばしくくくなるこ

より。はしちかうおなじ心なる人二三人はかり。火をけな
かにするて。物がたりなどするほどに。くらうなりぬれば。
こなたには火もともさぬに。大かた雪の光いとしろう見
えたるに。火はしまてはいなどかきすすびて。あはれなる
もあかしきもいひあはするこそをかしけれ。よひも過ぬ
らんとおもふほどに。くつのおとちかうきこゆれば。あや
しと見出したるに。時々かやうの折。おほえなく見ゆる人
なりけり。けふの雪をいかれと思ひきこえながら。なんぞ
ふことばさばり。其所にくらしつるよしなどいふ。けふこ
ん人をなごやうのすぢをさいふらんかし。ひるよりありつ
る事ごもさうちばじめて。よろづの事をいひわらひ。わら
うださし出たれど。かたつかたのあしは志もながらあるに。
かぬのおとのきこゆるまでになりぬれど。うちにもとに
も。いふ事ごもあかすぞおほゆる。あけくれのほどにか
女官たち
ふさなりく来りよふ人
何さなめ給ふらんおほひなごら
女の答へ
来たる男
女の男

雪河の山にみてる
喚入梁王之苑。雪河山。麒麟。自賦の詞
期詠にあり。梁孝王は漢文帝の御子。竹
苑をひらきて雪の朝は御生枝更などを名て
あそび給ひし事文選の註にあり

村上の御時 六十二代天曆のみごころ
雪月花の時

期詠。雪時酒伴皆抛我。雪月花時最憶君。
これ文集にては樂天の殷協律をおもひて
憶君さつくれりしに。今の兵衛藏人は
やうの折も我君を思ひ奉るごの心にてい
るなるべし

かうなりにあひたる事なん
袋双紙云。俊頼云折ふしにかなひたる哥を
詠するは歌にはまされる也。前齊宮歸京の
時。供奉の人舟中にいれずして有間に。那
公一聲鳴たり。万人新しき哥をよまばや
おもふ時分に。女房の聲して「泣のわたりの
また夜深きにこゆたり。人々感して泣
たかりける也

わたつみのおきに
沖を燈火にそへて。蛙の火にこがれたるな
いはんとしてよめるうた

へるごて。雪河の山にみてるとうちずんじたるはいとを
かしき物也。女のかぎりしてはさもえのあかごさらし
き。只なるよりはいとをかしうすきたるありとまなごを
いひ合せたる
女房はかりありてはの心
居明
かゝり通たる事の物語
伊いみじ
兵衛藏人
未尋
睡ぞや
かゝりたらしうた
女官たち
来たる男
女の男
村上の御時雪のいとなかう降たりけるを。やうきにもら
せ給ひて。梅の花をさして月いとあかきに。是に哥よめ。い
かゞいふべきと。兵衛の藏人にたびたりければ。雪月花の
ときとそうしたりけるこそ。いみしうめでさせ給ひけれ。
村上の御時
うたなどよまんなはよのつね也。かうをりにあひたる事
なんいひがたきとこそおほせられけれ。おなじ人を御供
にて殿上に人さふらはざりけるほど。たゞすませおほし
ますに。すびつのけふりのたちければ。かれは何のけふり
を見てことおほせられければ。見て歸りまゐりて
わたつみのおきにこがるゝ物見ればあまのつりしてか
見て来よと勸言
兵衛藏人
蛙を

みあれのせん下
 今昔物語云。御形の宣旨といふ人は。後に
 やさしくつちもめでたかりけり。皇太后
 宮の女房也。註御堂の中姫。三條院の御時
 皇后宮と申たるが女房云々。愚案。後拾遺
 集の作者大和宣旨と同人なるべし。作者部
 類云。中納言惟仲女。三條院皇后宮女房。
 大和守兼忠の妻之故號大和とあり
 増「万葉抄云。みあれのせん下」は。源氏権卷
 なる齋院宣旨の類なるべし。みあれは齋院
 のしるしめす事なれば。齋院の女官なかく
 いふならん

そへたり
 へるなりけり」

とそうしけるこそをかしけれ。かへるのとび入てこがる
 くなりけり」

みあれのせんじ五寸ばかりなる殿上人形上わらはのいとをかし
 けなるまづくりて。みづらゆひ朝世ひんづらゆふんとぞくなどうるはしく
 して。名かきてたてまつらせたりけるは。ともあきらのお
 ほきみとかきたりけるをこそいみしうせとせ給ひけれ」
皇后宮へなるべし
御懸愛なりしこと

中巻終

訂正 枕草子春曙抄下巻目録

卷九

弘云。卷九の初丁は。此の抄と万葉抄と大に
 異なり。万葉本には左の如くあり
 九十二段 上達部は云々
 九十三段 若達は云々
 九十四段 法師は云々
 九十五段 女は云々
 九十六段 宮仕所は云々
 此の五段は。諸本も此抄の如く下にあり。即
 ち卷十さかしきものさある次に出たり

- 九十二段 ○九十三段 ○九十四段 ○九十五段 ○九十六段
(以上五段は 卷十にあり)
- 九十七段 またりがほなるもの
- 九十九段 心にくき物
- 百一段 遊は
- 百三段 寺は
- 百五段 あそびは
- 百七段 ひきものは
- 百九段 笛は
- 百十一段 おほきにてもよき物は
- 百十三段 人の家につきくまき物は
- 百十四段 うまやの
- 百十六段 社
- 九十八段 風は
- 百一段 島は
- 百二段 油は
- 百四段 陀羅尼は
- 百六段 まびは
- 百八段 まらべは
- 百十段 みるものは
- 百十二段 短くてありけり物は
- 百十五段 雨の
- 百十七段 ふる物は

卷十

- 百十八段 日
- 百二十段 里
- 百廿二段 霧
- 百廿四段 ないがしるなるもの
- 百廿六段 さかしき物
- 君達ば (上の九十三) 段に入ル
- 女ば (上の九十五) 段に入ル
- 百廿七段 目を替たらん人杯はかくや有けんさ見ゆるもの
- 百廿八段 たいすきにすぐるもの
- 百三十段 いみしくきたなきもの
- 百卅二段 たのもしきもの
- 百卅四段 たふさき物
- 百卅六段 さしめきは
- 百卅八段 ひさへ
- 百四十段 またたきわ
- 百十九段 月
- 百廿一段 雲
- 百廿二段 さわびしきもの
- 百廿五段 こまばなめけなるもの
- 上達部ば (上の九十二) 段に入ル
- 法師ば (上の九十四) 段に入ル
- 宮仕所ば (上の九十六) 段に入ル
- 百廿九段 こまに人にえられぬもの
- 百卅一段 せめておそろしきもの
- 百卅二段 うれしきもの
- 百卅五段 歌
- 百卅七段 かりきわ
- 百卅九段 わろきもの
- 百四十一段 扇の骨

卷十一

弘云。此所の上達部以下宮仕所に至る五段は。万籙本には上にいへるが如く卷九に入りたり

卷十二

- 百四十二段 ひめふき
- 百四十四段 燈
- 百四十六段 ちちくしきもの
- 百四十七段 みならひする物
- 百四十九段 女のうはぎ
- 百五十一段 もは
- 百五十二段 おりのの
- 百五十五段 やまひは
- 百五十七段 みぐるしきもの
- 百四十二段 麻
- 百四十五段 扇
- 百四十八段 うちさくまきもの
- 百五十段 おろき
- 百五十二段 ろみ
- 百五十四段 鏡のもん
- 百五十六段 いひにくきもの
- 以上百五十七段

弘云百四十九段。女のうはぎは。此の段今本には皆なし。万籙抄にのみある。又云百五十四段鏡のもんはさあるは。諸本もんはさのみあり
又云百五十五段のやまひはの次に。並本皆心つきなきものといふ一段あり。然して万籙本には之を省き。此のこまは發しく其所にいふべし

下巻目録終

訂正 枕草子春曙抄下巻

宮にほじめて
これ清少の定子の御方へまわりし給ひの物
言ふ
ひるも侍らぬにはあるまじけれ。御前へ
は夜々まわりしなるべし。聴る故に
これはさかりければ、
給のいはれを定子の御せき、
たかつきにまわりたるおほこのあふり
高塚にともし灯之。よの宮の灯籠ならで
ひきいゆゑ、髪などもよく見ゆる心と

いみしう匂ひたる
寒氣に定子の御手のあひみて色のうつつくこ
き事をいふ
見しらぬさどびいぢ
内わたりを見習はぬ里心にはこと。清少の
身の事をいふ
かつらぎの神もしはし
清少をしばしめてささめさせ給ふ詞と。藤
城の神は形見ぐるしめて盛の役をせで。ま
るのみ橋をかけられし。前註。清少の

宮にほじめてまゐりたる比。物のほづかしき事かずし
ず。なみだもおちぬべければ。よるくまゐりて三尺の御
几帳のうしろにさふらふに。あなごとり出て見せさせ給
ふだに手もえさし出まじうわりなし。これはとありかれ
はかよりなどの給はするに。たかつきにまゐりたるおほ
どのあふらなれば。かみのすぢなども。中くひるよりは
けさうに見えてまはゆければねんとて見なごす。いとつめ
たきころなれば。さし出させ給へる御手のわづかに見ゆ
るが。いみしう匂ひたるうす紅梅なるは。かぎりなくめで
たしと。見しらぬさどび心ちには。いかゞはかゝる人こそ
世におはしませしけれとおどろかるゝまでぞまもりま
らす。曉にはとくなきといそがる。かつらぎの神もしは
しなごおほせらるゝま。いかですぢかひても御らんせん

物がたりにいみじ

伊周公のままをほめていふ。幾花物語五
云。御年は只今廿二三ばかりにて。御形の
さゝのほりふさり清けにて。色あひまこと
にめでたし。かの光る源氏もさくや有けん
と見奉る云々。是伊周公の事をいへるなり。
枕双紙より後の物語なれどもしばしば引用
たはさめりとおほゆ

此伊周の御さまの見事なるにて。昔物語に
色々人のうへをほめし事もたはさめりと思ふ
こと

うつらにはまた

現在にうつらの御ありさまはいまだかめめ
みせすさめりと思ふこと

めもあやに清ましき事

目録に。源氏物語巻に。めもあやに清まし
き事成てさめり。細流云々。さめり。さめり。
孟津抄云目も及ばぬなるの心云々。さめり
も口も及ばぬなるの心云々。さめり。さめり。

【町】弘接。あやにはあやにさかしく。あやに
たふさし。なごいふあやにさかしく。あやに
イヨニの義なり。あまはしは。源氏の義に
て俗ギョツトメルなどの義。さめり。さめり。
は。いよ。清歌するまづ。さめり。さめり。
原註はいさ。さめり。

さめり。さめり。さめり。

是は元朝のむすめ清少納言新後の由を申
なるべし

まことにはさめりしなど
眞實に清少を思ひてありしとの給ひたはむ
れ給ふなるべし。前に女房にそらごさなど
の給ひつたるさ有し首尾

行幸など見るに
年來行幸など見し折に。伊周公供等にて清
少の物見る車を見おこせ給ひし。願ふく
しなごせしとの心

おほけなくいで立出に

うくはつさしき所へおほけなくも。宮仕へ
に出にしよと恥かしき思ふこと

【指】おほけなくは。大膽の意。また身分不
相應などの義。かの千載集巻面の「おほ
けなくうき世の民におほけなく我たつ袖に
すみ染の袖」さあるを思ふべし

おしこきかけさき

我影つくす。たすけなき陰を頼たる扇をも
伊周公の取給ふ

ふりかくへきさみの

扇はさるる。はめて面かくしに盤をふり
かけんも見るし。らんをももふこと

あふぎな手まさぐりに

清少の扇を伊周の手まさぐり給ふ

しろいものうつりて

清少の汗に白粉なされて。さきむらうつる
こと

なしと思ひけるに。いかでかぞ御いらへあなる。うちわ
らひ給ひて。あはれどもや御らんずるとてなどの給ふ御
ありさまは。これよりは何事かまごらん。物がたりにいみ
しう口にまかせていひたる事どもたがはさめりとおほゆ。
宮はしろき御ぞどもに。紅のからあや二つ白きからあや
と奉りたる。御らしのかうらせ給へるなど。あにかきたる
をこそかゝる事は見るに。現にはまだしらぬを。夢の心ち
ぞする。女房と物いひたはふれなごし給ふを。いらへら
中。かばづかしとも思ひたらず。聞え返し。そらごさなどの
給ひかくるをあらがひ論じなごさこゆるは。めもあやに
淺ましき事であいななくおもてぞあかむや。御くた物まる
りなごして。御まへにもまららせ給ふ。御几帳のうしろな
るは誰ぞと問給ふなるべし。さぞと申にこそあらめ。たち
のつたへおほす。外へにやあらんと思ふに。いとちかうる給

何さしておほせしぞと

伊周公にまさる人あらうと

昔の物語に

伊周公にまさる人あらうと

物のたりにいみ

しう口にまかせていひたる事どもたがはさめりとおほゆ。

宮はしろき御ぞどもに。紅のからあや二つ白きからあや

と奉りたる。御らしのかうらせ給へるなど。あにかきたる

をこそかゝる事は見るに。現にはまだしらぬを。夢の心ち

ぞする。女房と物いひたはふれなごし給ふを。いらへら

中。かばづかしとも思ひたらず。聞え返し。そらごさなどの

給ひかくるをあらがひ論じなごさこゆるは。めもあやに

淺ましき事であいななくおもてぞあかむや。御くた物まる

りなごして。御まへにもまららせ給ふ。御几帳のうしろな

るは誰ぞと問給ふなるべし。さぞと申にこそあらめ。たち

のつたへおほす。外へにやあらんと思ふに。いとちかうる給

ひて。物などの給ふ。またまららざりし時間おき給ひける

事などの給ふ。まことにはさ有しなどの給ふに。御几帳へた

て。よそに見やり奉るだにはづかしかりつるを。いと淺

ましうさしむかひきこえたる心ち。現どもおほえず。行幸

など見るに。車のかたにいさ。かみおこせ給ふは。下すた

れひきつろひ。すきかけもやとあふぎささしかくす。猶

いと我心ながらもおほけなく。いかを立出にしぞとあせ

あへていみじき。何事かまごらん。かしこきかけと

さけたる扇をさへとり給へるに。ふりかくべきかみのあ

やしてさへ思ふに。すべてまことにはさ有しきやうりて

こそ見ゆらめ。よく立給へなごもへ。あふぎを手まご

ふりにして。あはたがかきたるをなどの給ひて。とみにも

たち給はねは。袖をおしあて。うつらするなるも。から

まぬらしうものうつりてまだらにならんかし。久しう

これ見給へ。これはたが書たる。清少のため
に伊周をたいて給はん。さて此給を見給へ。と
后宮の給ふ云々

「増」弘法。伊周公の顔の給ふ。人は公
の自身をさして云々。意は清少がわれをさ
らへて立たせ侍らむ。こは公が立ても
し。后宮のたへ行かば。そのひまに清少は
すべり出て逃去りもやする。氣つひて。
わざと坐を立ち給はぬま。ま。

清少いませ。藤原のりには有けん。やうの
いまめかしきたはふれば。年齢にも身のほ
ごにも相應せず。人
のさうのなきたる。
草履名。の。后宮の見せ給へる給草紙の
事。

おなごなほしの人
山井大納言。申納言陸家願なるべし
われも何がしがさある事
此同上に連綴せず。若落字などあるにや。但
まひて願をとり侍らば。われも何がしがさ
ある事。は。彼同じ直衣の人。人の上のさ
ありの。りを申さる。殿上人の上をも
さりませ。申さる。なまきは。清少のうひ
くしき心には變化の物天人などやうに死
えしと云々

る給ひたりつるを。ろんなうくるしとおもふらんと心得
させ給へるにや。これ見給へ。是はたがきたるぞときこ
えさせ給ふを。うれしと思ふに。給ひて見侍らんと申給へ
は。猶こへとのたまはすれば。人をとらへてたて侍らぬ
なりとの給ふ。いといまめかしう身のほど年にはあはず
かたばらいたし。人のさうがなにかきたる草紙とり出て御
らんず。誰がにかあらん。かれに見せさせ給へ。それぞ世に
ある人の手は見しりて侍らんと。あやしき事どもを。只い
らへさせんと給ふ。二ところだにあらぬ。又さきさうちあ
はせておなじなほしの人まらせ給ひて。これはいます
こし花やぎ。さるがふ事なごうちし。ほめわらひ興じ。わ
れも何がしがとある事かよる事など。殿上人のうへなど
申すをきけば。猶いとへんけの物天人などのかりきたる
にやと覺えてしき。さふらひなれ。日比すふればいとこし

ひうひしと云々
おなごなほしにこそ有けれ。かく見る人々も。家の内出そめ
けんほどば。こころは覺えけめど。かくしめてゆくに。お
のづから。おもなれぬべし。物なご仰られて。我をほおも
ふやととばせ給ふ。御いらへにいかにかはとけいするに
あはせて。たいはん所のかたにはなを高くひたれば。あな
心うそらごとするなりけり。よしとていらせ給ひぬ。
いかにかそらごごにはあらん。よろしうだにおもひきこ
えさせ給ふ事かは。はなこそはそらごごしけれとおほゆ。
さてもたれかかくにくきわさしつらんと。大かた心づき
なしとおほゆれば。わがさる折も。おしひしきかへしてあ
るを。ましてにくしとおもへど。またうひくしければと
もかくも。けいしなほさで。明ぬればありたるすなはち。
あさみどりなるうすやうに。えんなる文をもてきたり。み
れば

かく見る人々も
后宮の御つたに侍る女房達をさして云々

たいはん所のかたに
后宮の御つたの齋齋所女房の侍ひなり

そらごとするなりけり
清少思ふは偽なりん。脚にはなひつれば
この御たはむれ。清輔奥義抄云。人の事
を思ひくはたつる。はなひつればならす
と云々。さやうの心にて后宮もかくの給へ
るにや。毛時攝風館御覽。註今俗人
云。入道。我。此古之遺語也云々

「増」おほゆ。イ本にはおほえてあり。お
ほえては思はれて

わがさる折もおしひしきかへしてあるを
尋常にも人の疑つれば。其はなひ返してあ
る物をさ。人のほなひたる時又はなひ返
されば。わるき事有と世俗にいひならはす
事のゆゑなり

いかにしていかん 清少の思ふといふを

神なりけりせば 右筆の思ふといふを

となん 御けしきはとあるに めでたくも口をししくも思ひ

みだるゝに なほよべの人ぞたづねきかまほしき

うすきこそそれにもよらね花故にうき身のほどをさしる

ぞ佗しき

猶こればかりはけいしなほとせ給へ しまの神もおのづ

からいとかしこしてとてまるらせてのちも うたて折しも

なごてとばたありけん いとをかし

九十二段上達部 九十三段君途は 九十四段法師は九十五段女は 九十六段宮仕所は

次に九十七段したりがほなる物 さいあり 此の抄には上達部 君途は 法師は 女は 宮仕所は の五段杖次の第十の巻のさいあり 次に見

九十七段

したりがほなる物 一本此奥の上達部は

「増」したりがほは 爲す有り顔といふこと

正月一日のつとめて 世俗に 元日臨ん 長命の相といへば

したりがほなるもの

正月一日のつとめてさいそにはなひたる人 ますしろふた

ひの藏人になしうする子なしたる人のけしき 除目に

その年の一の國えたる人のよろこびなどいひていとかし

こうなり給へりなど人のいふいらへに 何かいこととや

うにほろびて侍なればなどいふもしたりかほ也 又人お

ほくいどみたる中にえられてむこにどられたるも我はど

思ひぬべし ことばき物のけてうじたるけんじや ありたき

の明とうしたる 小弓いるにかたつかたの人しはふきさ

しまぎらはしてさわらに ねんじて音たかういてあてた

ることしたりがほなるけしきなれ こそうつに さはかり

としかるふくつけきは 又こと所にかゝりありくに こと

どかたよりめもなくして おほくひろひとりたるもうれ

しからじや ほとりかたにうちわらひ たゞのかちよりはは

こりかななり ありくしてずりやうに成たる人のけしきこ

そうれしけなれ わづかあるはずんぞのなめけにあなづ

るもねたしと思ひ聞えながら いかんせんとてねんじ過

神中抄云 四分律云 時世尊臨諸比丘 咒願言 長壽今案 今俗正月元日 若早且臨 即稱曰 千秋萬歳 念如律令 是縁也 何日在 元日 哉 尋律云 何のいふにほなるか

受領は 朝廷奉公の志ある人は本意とせず 然共所務總分に付て寫むと されど何の賢

からん 異様に亡びて外國に洗滌する物な

なご口にはいへば 實は満足の心あるさまと

あふたきの明とすしたる 掩約 孟律抄云 古某の時の韵字をふたぎ

て何の字を推して勝負をする 其何の字

と推あてたるを明と云 せんすて音たかう

まさらはされすくくへたもちたるゆと

ふくつげきは 細流云 食る 恐栗欲がましき心と 遊

仙烟養生フクシキト云あり 〔原〕原本には ぶくつげきは さいあり今 本及

び万歳抄によりて改つ かいぐりあり

わづかにあるすんぞ 従者也 日比頼なかりし程は 無禮しあな

つりし従者のれたかりしもせんかたなくて 通しつるに 受領に成て後は 従者も隨も 逐従する心と

見えざりして、
なかりし道具衣裳なども俄に出来るをわき
出るさいふ。調度はついで道具も
もさきんだちのなりあがりたるより
元來の公達。公達さば。攝家大臣の息な
らでも。近衛の少將中將を経て。納言以上
にのぼる人々をいふ也。清華。英雄も申
之。さやうの人々より受領の中將になりし
はしたりがほなるこ
中納言大納言大臣。公卿。大臣を公さ
ひ納言は卿
すりやうもさこそは
受領も大上國の守になりしはこなしの
心
あまた國にゆきて
一任四ヶ年の國守を経てあまた他國に行て
合格の人をいふ
大貳。太宰府のおほい介也。相當四位也。
太宰のつかひは帥也。帥は大かた親王の任官
にて。筑紫に下り給はす府務をおこなはざ
れば。大貳。帥にかりて筑紫に下りて大
宰府の務をおこなふ故に。規模とする官
四位。受領は大かた五位なれば也。
何がし供奉など
内供奉にて。安撫内供奉。寛算内供奉のた
ぐひ也。官職便覽云寶龜三年三月始置内供
奉十禮師云々。續日本紀にあり。又延喜式
に毎年正月に大極殿にて最勝王經講説の
時内供奉十禮師を講師とする事あり。十禮
師は十八の事也

しつるに我にもまざる物どものかしてまり。只仰せうけ
給はらんとつるせうするさまはありし人とやは見え
る。今までなかりし女房も有女房うちつかひ。見えざりしてうごさうぞくのわき
づる。受領すりやうしたる人の中將になりたるこそ。もどき
だちのなりあがりたるよりも。けたかうしたりがほにい
みしう思ひためれ。是より位のめつたき事を次手にいふくらゐこそ猶めでたき物にはあれ。同
し人ながら大夫のきみや侍従のきみなどきこゆる折は
いとあなづりやすき物を。中納言大納言大臣などにな
りぬるは。むゆにせんかたなくやんごどなくおほえ給ふ
事のことよなごよ。各別ほごくにつけては。すりやうもごこ
はあめれ。あまた國に行て大貳や四位などになりて上達
宰相になる宰相以上を上達部と云部になりぬればおもおもしろ。されどごりごりしてはごすき。大貳四位などになりて公卿になるはまれなりな
にはかりの事はある。又おほくやはある。すりやうの北
のかたにてくだることをよろしき人のさいはひには思ひ

僧都僧正に
僧も位高くなればしたりがほなるもの心

夏まほしたるわたさめ
一夏過したる結精
いつのまにかう成ぬらん
八九月の風の冷やになりしなごどく心

てあめれ只人の上達部のむすめにてきごきになり給ふ
こそめでたけれ。されど猶男は我身のなり出ることそめで
たくうちあふきたるけしきよ。法師の何がし供奉などい
ひてありくなごは何とかは見ゆる。經たふごくよみ。見め
きよけなるにつけても。女にあなづられて。なりかよりこ
そすれ。何のさひなし僧都僧正に成ぬれば。佛のあらはれ給へるにこそ
とおほしきごひてかしてまざるさまは何にかは似たる
風は
あらし。とがらし。三月はかりの夕暮にゆるく吹たる花か
ぜいとあはれ。八九月はかりに。雨にまじりてふきたる
風いとあはれ也。雨のあしよごさまにさわがしう吹たる
に。夏まほしたるわたさめ。あせの香などかわせ。す
しのひとへにひきかかえてきたるををか。此すした
たいとあつかはしうすてまほしかりしかは。いつのまに

ほほにしみたる。顔に寒き心也。文選宋玉
風賦云。其風中人狀直慄慄淋淋

むくの葉 植一名即棟和名幸久
野分の又の日 八月の比ふく暴風也。其明
る日の景氣を背也。源氏のわきの巻も是な
かけり
たてしごみすいはい
立御透垣
ふしなみたるに
野分に吹たふされて伏双びたる也
【増】万歳抄にもふしなみかみだれに作れり。
いづれにても大急はかな
せんさいも心くるしげ也
【訂】万歳抄には。心くるしげなるを。とあり
【増】せんさいは前載のもとにて庭前の草木の
植込みをいふ也
おほきなる木も
文選風賦云。殿石伐木梢殺林莽
かうしのつばなごに
格子のひき開くを坪さいふにや。こま
んく吹入と次の詞にあり。此段の風の形
容は莊子が天籟を論下たる詞になさくお
こるま下くや
いとこきぬのうはぐもり
いとこきぬのうはぐもり

かう成ぬらんと思ふもをかし。あかつきかうしつま戸な
どおしあけたるに。嵐のさと吹わたりに。かほにしみたる
こそいみしうをかしけれ。九月つごもり。十月一日の程の
空うちくもりたるに。風のいたう吹に黄なる木の葉ども
のほろく〜とこほれおつるいとあはれ也。さくらのほむ
くの葉などこそおつれ。十月はかりに木立おほかる所の
庭はいとめでたし」
野分の又の日こそいみしう哀におほゆれ。たてしごみす
いがいなごのふしなみたるに。せんさいも心くるしげ
也。おほきなる木どもたふれ。枝など吹さられたるだにを
しきに。萩女郎花などのうへによろほびはひふせるいと
おもはず也。かうしのつばなごに。とこきぬのうはぐもり
しらたんやうにこま〜と吹入たるこそ。あらかりつる
風のしわざともおほえぬ。いとこきぬのうはぐもりた

いとこきぬのうはぐもり
いとこきぬのうはぐもり

れざりつれば イ木れられざりつれば云々

うちふくだみたる
髪のをけたる也。源氏におほき詞
【増】ふくだみは。笑聲抄に髪解のまをけ
り

物あはれなるけしきみる
其女房の野分の朝の草花のをれふして哀な
るを見ゆるほごに
花もかへりぬれなごしたる
かの生絹の單の花田に在るが色さめて。
野分のしおきにぬれたるさまなり

たけばかりはきぬの
髪長くて居長ほごきぬのすそにあまりしこ
そばより見ゆる
彼物哀なるけしき見る女房の傍より此十七
八の女房の見ゆるよ

うちやましげに
かの童のわがき人と諸共にせまほしげなる
こ
うしろもかし
童のうしろも。彼わがき女房のうしろも
めていへり

るに、くちばのおり物。うす物などのこうちきよして。まよこ
どしくきよけなる人の。夜るは風のさわぎに寐覺つれば。
久しうねおきたるま〜に。鏡うち見て。もやよりすこしる
さり出たる。髪は風に吹まよはされてすこしうちふくだ
みたるが。かたにかよりたるほど。まよこにめでたし。物あ
はれなるけしき見るほどに。十七八はかりにやあらん。ち
ひさくはあらねどわざととおとな〜とば見えぬが。すゞし
のひとへのいみしうはこころびたる。花もかへりぬれなご
したる。うすいろのどのる物さきてかみはきはなのやう
なるそぎすも。たけばかりはきぬのすそにはづれて。は
かまのみあさやかたて。そばより見ゆる。わらはべのわか
き人のねごめに吹をられたるせんさいなどさとりあつ
めおこしたてなどするを。うちやましげに。おしはかりて。
つきそひたるうしろもをかし」

心にくき物
【増】こは心に悪む意にはあらず。心にくき物
いふ一の詞にて。心ゆかしく思ふ意。俗
に心に染む意もあり

物まわる
【訂】活木を物まわるとあり
はし 駒。管筒。一名、扶提和名にあり
ひび 飯匙。其名伊勢物語和名云。既云云。
ひびけの夫 提提和名

心にくき物

物へだてしきくに。女房とはおほえぬ聲の忍びやかにき
こえたるに。是女房なるべしこたへ若やかにしうちそよめきてまゐる
けはひ。物まゐる程にや。はしひななどのとりまぜてなり
たる。ひさげのえのたふれふすもみこそとゞまれ。うち
の打たる。女房のき
たるきぬのあさやかなるに。さうがしうはあらで髪女房のきのふ
りやられたる。いみしうしまつらひたる所の。おほとなぶ
らはまるらで。長すびつにいとおほくおこしたる火のひか
り。御几帳のひものいとつややかに見え。みすの朝顔もかう
のあけたる。このきはやかなるもけさやかに見ゆ。よくて
うじたる火をけのはいきよげにおこしたる火に。よくか
きたる絵の見えたるをか。はしのいときはやかにすぢ
かひたるもをか。夜いたう更て人のみなねぬるのちに。
どのかたにて殿上人など物いふに。おくに基石ごいし。けいに基箭

うきしま 奥州しほがまの邊に。新古今に
「しほがまの前にはうきしまのうきしまのうきまて
思ひのある世なりけり」
やそしま 八雲云。清輔云。出羽にあり云々。
普通には只八十島云。愚案。兼平の小町が
國體を見しは出羽の八十島云。小野篁の八
十島かけてとよみ給へるは只そほくのしま
といふ義云
たはれしま 八雲云。肥後云。清輔抄ニハ
相模云々
みつしま 八雲云。前。万葉集三島と。東北の野坂の油に舟出して水島にゆかん波たつなゆめ
とよらの島 【増】六帖に愚案「よそにみしとよらのしまのふた心ありとしきはさちにしたのます」
たさしま 【訂】活木にはたさしまとあり。万葉には。たさしまの誤りか。然らば出雲云と有り

ふきあげのばま
【増】古今秋に菅原朝臣
「秋風のふきあげにたてる白菊は花のあらわ
か波のよするり」
ながはま 八雲伊勢云々
うちでの 打出瀆。八雲近江
千里の瀆 伊勢物語ニ紀の國の千里の瀆に
ありける云々チのばまといふ歟

おふのうら 生油云。八雲伊勢。古今大番
所の野いせむにあり
【訂】弘云。イ本になふの浦とあり。さては興

浦は

おふのうら。しほがまのうら。滋賀のうら。なたかの浦。こ
よせのばま。千里のばまこそひろうおもひやらるれ
そこのばま。ふきあげのばま。ながはま。うちでの瀆。もろ
奥州云
吹上 八雲伊勢
浦は
おふのうら。しほがまのうら。滋賀のうら。なたかの浦。こ
おふのうら。しほがまのうら。滋賀のうら。なたかの浦。こ

所にや
なだのうら 八雲江云々。万葉には。りずまのうら。わか組伊のうら
きの園のなだかのうらとよめり
こりすま 攝津之。八雲に云く須磨。こりすまの浦は同所之。但別なるやうにいふ人もあり云々

寺は

つほさか。かどぎ。ほうりん。高野はこうほう大師の御すみ
かなるがあはれなる也。石山。こかは。滋賀

つほさか 和泉の法華寺也。又は盤坂寺と
いへり。本尊は千手観音也。道基上人建立
と拾芥に有
つほさか 笠置寺大和にあり。本尊は彌勒解
脱上人の寺
ほうりん 嵯峨の法輪寺也。僧都道昌一
冥坐せらるゝに虚空蔵菩薩衣の袖の上に現し給へり。道昌すなはち袖をきりて圓して法輪寺に安置せらるゝと元亨釋書にあり。一説ニ小栗野
法華寺常曉律師の本元堂云々

高野は 金剛峯寺と號す。元亨釋書一曰。弘仁七年遷。紀州二相勝。上高野山。創三金剛峯寺云々
弘法大師 元亨釋書云。釋空海。世姓佐伯氏。諱州多度郡人。父田公。母阿刀氏。夢梵僧入。國而有身云々。賜唐骨龍寺。聖果。授灌頂。承和二
年三月廿一日入定。延喜廿一年十月。詔弘法大師

石山 聖武御宇。東大寺の佛にみかきわへき金を得んための新願に。願上人江州瀬多に遷して。如意輪を安置して後奥州より始て黄金を奉り
ければ。此寺をたて。丈六の觀音をささみて。はつめの像を中にこめ。又金剛藏王と執金剛神を左右に安置せり。猶元亨尺書に委
粉川 紀州那賀郡風市村粉河寺は。寶龜元年に建つ。願上人孔子古。此山に瑞光を見て。佛を安置せましくおもふに。ふしぎの童來て一七日のほ
ごに。金色の千手觀音をあらはせり。其後河内の澁河郡の佐大夫といふ者。一子の病を此觀音に祈て平癒せしむ。伊都郡澁田村の宮家のやも
め。此事なきいたふみて此寺をたつるよし元亨釋書に委

滋賀 崇福寺と號す。近江滋賀郡にあり。ながらの寺と此滋賀寺を誅するよし八雲御抄にあり。天智天皇の御時。此地に瑞光ありて。かたは
らに瀧有。ふしぎの優婆塞すみて。此地は古仙のくくれふす所の由。帝に申ければ。帝聞召て。無て敷地を得て寺かたてんの御心さしある故。此
寺を立給ふ事元亨尺書にあり。今は三井寺の末寺のよし拾芥にみゆ

經は

法華經はさくら也。千手經。ふけん十願。ずるゑ經。尊勝だら
に。あみだの大ず。せんすだらに

經は云々
[可]弘云。万葉抄に經は以下文は佛は物語は
野はの五段なし。寺はより直に陀羅尼はに
ついでり
法華經はさくら也
妙法蓮華經は。秦の羅汗三藏の翻釋。其弟子

佛經 雜受。今の世におこなるは是なり。諸經最第一とすれば更なりといふなるべし
千手經 千手千眼觀自在菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼經なるべし。世に千手陀羅尼經といふ是也。西天竺沙門伽梵達摩譯云々
ふけん十願 此花經の尊賢行願品といふなるべし。大方廣佛花嚴經入不思議解脱境界普賢行願品といへり。般若三藏釋云々。此品の中に普
賢十種の大行願をたて給ふ。一者禮敬諸佛。二者稱讚如來。三者瞻仰供養。四者懺悔業障。五者隨喜功德。六者請轉法輪。七者請佛住世。八者
隨地樂施。九者恒順眾生。十者普皆迴向。このゆゑに十大願經といふなるべし
すむく經 陀羅尼經一巻あり。不空三藏の翻釋也。滅盡諸苦。一切の衆生の苦を拔濟せん事を世尊に請て。世尊此だに心を授け給
へり。この眞言は三世の諸佛の胎數万劫をへて。毘盧遮那如來の自法界智の中にして。無始劫を盡して求め得給へり。此故に隨求即得眞言と名
付云々

尊勝だらに 佛頂尊勝陀羅尼經一巻。大唐國寶佛陀藏利華勅譯云々。佛在世に。善住太子。七日のうちに死て地獄におつへきしるしありしに。帝
釋あはれみて。佛に此よし申給へば。佛此だに心をささづけ給ひて。其難をまわられたり。其靈驗無量云々
あみだの大ず 阿彌陀の眞言也。眞言家には大咒とすみてよめり。阿彌陀根本陀羅尼といへり。無量壽軌に出云々。裏蓮録に別にのせて十廿
せんすだらに すなはち彼千手陀羅尼經の中にあり。其功德彼經に委

文集 白樂天が文集也。七十巻あり。白氏
長慶集は編やうはりて七十巻あり
文選 梁の昭明太子の周秦漢より。梁の世
までの文をあつめて卅巻あり。唐の李善の
註に五臣の註をくはへて六十巻とす

如意りは。人の心を
是此大士の相好を云々。觀自在如意輪菩薩
瑜伽法要曰。金剛智三藏。六臂身金色。住
說法相。右第一思惟。第二持寶珠。第三持
念珠。左第一按光明山。第二持蓮花。第三
持法輪云々。この右第一思惟の手は。懸念有
情故といへり。此がたを此の双紙には
かくいへるにや。如意輪觀音。或は二臂に
て。右は思惟左は蓮花を持あり。これも右
は同前。左持蓮花は能淨三障非法一故云々

千手 千手陀羅尼經曰。即發覺者我當來成阿能利三益安樂一切衆生。昔今我即時身生千手千眼。具足三昧。已應時身。上千手千眼。悉具足
云々

文集。文選。はかせの申文

佛は

如意りは。人の心を
おはする。世にしらすあはれははづかし。千手。すべて六觀
音。不動尊。藥師佛。しやか。みろく。普賢。地藏。文珠

すべて六観音 拾芥云。六観音配三六道。大悲観音。千手観音。地藏三昧。大悲観音。正観音。觀音三昧。師子無畏観音。馬頭觀音。三十三間堂。大光普照観音。十一面觀音。修羅道三昧。天人丈夫観音。准提觀音。三十三間堂。大梵深遠観音。如意輪觀音。三十三間堂。今案此言宗井法相宗除准提觀音。卷二。不空稱觀音。

不動尊 底哩三昧經上曰。不動者是菩提心。大寂定儀也。猶觀軌姿。大日經二曰。乃一切障。故住火上三昧。藥師佛。藥師琉璃光如來。要文我此名觀一經其耳染病悉除。心身安樂。これなり。猶本願功徳經に十二願を説給へり。文しげ、れは尋しや。釋迦牟尼。釋迦名觀集一曰。據釋云。此三能仁寂滅。寂滅故不住生死。能仁故不在涅槃。悲智兼運立此嘉稱。猶委まこに一代教主にてはすあり。

みるく 名義集云。彌勒。淨名疏云。此彌勒氏。過去為王名三輪聖流支。慧智國人。自爾至今常名三慧氏。姓阿逸多。此云三無能勝云々。みるくは。釋迦の付屬をうけて一生補處の菩薩とす。第一戒初のはじめに下生し給ふ。成佛して三會に説法すべき故に當來導師と申之。尺尊入滅よりみるくの出世までは五十七俱低六十百千歳をへたつといへり。彌勒下生經には將來久遠劫於此國界成佛云々。河海。

普賢 名義集云。即覺昇疏云。一約百四。體性周備曰普。隨緣成德曰賢。二約諸位。曲濟無遺曰普。離極亞聖曰賢。三約當位。德無不周曰普。調柔善順曰賢。云々。尺尊法華經を説はり給ひてのち。普賢はさち東方の寶藏佛國より佛前に來りて。説法して四法成就の法門を得て。未代惡世に法華經の行者を守護し惡魔夜叉等の難をまわかれしめ。未來は成佛せしめんとして二十句の陀羅尼をさけり。猶普賢菩薩勸發品に委。

地藏 大藏綱目指要錄三曰。地藏十輪經十卷。唐玄奘三藏譯。地則坐厚無運。藏則包含無礙。以三十佛輪轉二十惡業故之。六道の衆生濟度のはさし。

文殊 名義集云。文殊師利。此云三妙。大經云。了了見佛性。猶如三妙德等。淨名疏云。若見佛性即具三德。不縱不橫故名三妙德云々。西域記云。曼殊室利。唐言妙吉祥。

住吉物語 二卷あり。異本十卷あり。源氏物語に用られしは二卷の住吉物語たりと見ゆ。

うつつの類は 是より以下の物語今の世所見なし。入雲御抄學書の中にも住吉物語の類の外はしるさ給はず。其代にもすでに絶々なりしなるべし。

かじき也 是此物がたりにある事なるべし。

物がたりは

住吉。うつつの類は。殿うつり。月まつ女。かたの少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。むねれ木。道心すむる松が枝。こまの物語は。ふるきかはほりとし出てもいらしがをかじき也。

百四段

嵯峨野さら也 昔は秋萩の時なむ野遊し。撰虫など遊興の所なれば。更こさいへるなるべし。

こま野 山城の駒のわたりにや。猶可尋之飛火野 入雲大和春日野也。袖中抄云。國史云。和銅五年正月於高安峰。始置高見及大和國春日峰。以通平城一也云々。

しめぢ野 入雲云。しめぢ野。山城。是在清和初學抄云々。おなす所なるべし。

あへの野 攝州住吉と天王寺とのあへに安野あり是にや。あへの野 入雲云。近江。万葉あへの野と云々。曼珠後拾遺に長能。紫の野にまよひしは山城守宮とむらさき野。

陀羅尼 名義集云。秦育三能持集持法能持令三不敗不劣。又藤樹三能持一能持持不。失持不願不生。此双紙の心はだらにはあ。つきよみてし。前にいへるすむたたらに野勝たらに千手たらにの類にや。一切經藏効文の二箱に。陀羅尼集十二卷あり。啓の箱にも陀羅尼集經十卷あり。其外諸經のだらにあけていひかたし。

あそびは 音聲をもいひ又よるつのおそびわざなにいふべし。

丸打者也云々。曼珠後拾遺はよのつれの類に。打越は手まりの類之。又圓機活法に。擊越あり。杖にてうちて上下せしむるあそび云々。ゆみ。源氏若菜の上巻に月のうちに小弓もたせてまわり給へとあり。

百五段

陀羅尼は

あかつき ともぢやうは 夕なれ

あそびは

よる人のかは見えぬほど。あそびわざはさあしけれど。もまよりもをかし。こゆみ。あんふたぎ。こ。

百六段

するがまひ。もとめい。
東遊是之。花鳥餘情云。東遊謂云。先二
番。次駿河舞。次求子。次加太於呂之調子
高麗双調也

たいへいらく 順和名の道曲調の所に云。
太平樂出時曲調三之胡少子武呂樂二合歌臨太
平樂之急也云々

もろこしにリたきになくして

漢高祖楚項羽と鴻門の合に。酒宴の半に項
羽の臣。惡夫高祖をうたんとて項莊に劍を
ぬいてまはしめてひまらばと高祖をうら
やふに。項伯さいふ者高祖をいたはりて。
劍をぬいて共にまひて。高祖をへだておほ
ひて終にうたせざりし。この項莊が舞を太
平の曲をまひしと太平記にもしるせり。是
を敵にぐしてあそぶといふなるべし。史記
九十一禁噲が傳に委

鳥のまひ 河海云。鳥樂迦陵頻也一越調也云々。順和名に沙陀調の曲迦陵頻。妙音天淨南竺國に此舞を傳ふ。漢羅門僧正之を見て。受傳て唐に
傳ふ。ゆめす木朝に傳云々

ばさう 拾芥云。抜頭乞食調云々。但和名道調曲の中に云。抜頭抜音如く来云々

らくそん 落時。高麗一越調の樂也。納蘇利ともいへり。五月六日の競馬の日雅樂寮これを奏するよし花鳥餘情にあり

琵琶 和名云。撥琵琶撥名也。今案琵琶類
有二種一又琵琶類有二反首撥手承絃撥面
落帶滿月等之名云々。胡國にて馬上にて引
物也。又魏武帝造れり云々

まろのいん 和名云。琴形似て瑟而短有十三
絃云々。神農造又琴信所造琴聲也云々

「西」弘云。活本にはまろのいんの五字なし
ふかうでう。わうしきでう。

琵琶の風香調黃鐘歎。河海云凡琵琶は風香
調反風香調秘曲にあり。楊直操流泉曲也。

まひは

するがまひ。もとめこ。たらしらんはまあしけれどら
どをか。太刀などうたてくあれどいとおもしるし。もろ
こしにかたきねふしてあそびけんまどまぐに。鳥のまひ。
はどうはかしらのかみふりかけたるまみなどはおそろ
しけれど。おくもいとおもしるし。らくそんは二人してひ
きふみてまひたる。こまがた
一本拍子まの二越調云々

引ものは

琵琶。まろのこと
しんべは
ふかうでう。わうしきでう。そかうのまろ。うふひすのこ

百七段

百八段

へびのまろさしんべ。まろふれん

仍以三此兩調子爲先。琵琶の黃鐘調は。笛
の平調に合する也。掃部頭貞敏四調を定め
たり。風香調の。合二笛黃鐘調。反風香調
は。合二笛一越調雙調。黃鐘調は。合二笛平調。清調は。合二笛平調盤律調
そらうのうら。蘇香急。和名云。盤涉調蘇合香大曲。俗只云蘇香三云々。其樂の急譜別にあり。二反りの時口傳ありをぞ
うぐひすのまろつり。春鶯囀和名に一越調云々。源氏花宴に春の鶯のまろつるをまひて面白くあり。此樂の事なるべし
「折」堀川後百首に俊頼 「あな竹を腰の上人ふたてはるのうぐひすまろつりすなり」
さうふれん 想夫憐。和府遊。和名平調河海同。愚案太平廣記二百四十二櫻櫻部云。唐司空子順以樂曲有想夫憐之名。雖其不雅一時欲改之。客
有笑曰南朝和府曾有調。改之思爲和府遊。自是后人語及不改。國史補
「西」活本には。このまろふれんの下に「まろのいん」のまろふれんは「まろ」の十七字あり

笛は

よこあえらみしうさかし。とほうよりきこゆるが。やう
くちかうなりゆくもまかし。ちかよりつるがはるかに
なりてらとほのかにきこゆるもいとまかし。車にてもか
ちにても馬にても。すべてふところによしられてもた
目にたらし物なれば
も。何とも見えず。とばかりまかし物ばなし。ましてま
しりたるてうしなごいみしうめたし。思ひきたる男なごの
忘れたるこあかつきなど
に忘れて枕のもとにありたるを見つけたるもなほをか
し。人のもとよりとりにおこせたるをかしつゝみてやる

百九段

とほうよりきこゆるが。
人の笛ふきてありくなく時也。又人のふ
きある所を我とほりてきこまよこ。兩脱音
可用。文選長笛賦云。作近作遠とあるを
いげ有
「西」此段活本には。
「すへてふとこらにさしいられてもた何ぞ
も」とある二十字なし。あるをよこすとすへ

みつなのすけ 鳳皇の御綱を奉行する大倉
人助をいふにや。百寮訓要云。大倉人察宿
直の事を司る。今に見えたり。御會の階層
なめす事は大倉人の役也。行幸の時御綱な
ごを奉行す云々
雲林院ちそくかん
雲野の邊にや前駐

かたにせん
【訂】原本にせんあり。今活本并ニ万
抄にありては「一」つを補ひつ
なかしけれ
【訂】原本には「の」二字なし。さては上の
その結びの「の」はす。活本によりて改めつ

まつる事もおほえず。かうくしういづくしう。つねは何
ともなきつかさ。ひめまうちきみと入ぞやんことをなうめ
づらしうおほゆる。みつなのすけ。中少將などいときをかし
是亦一段之
まつりのかへさいみしうをかし。きのふはよろづの事う
行粧の奇麗なりし
るはしうて。一條のおほちのひろうきよらなるに。日のか
けもあつく車にさしりたるもまほゆければ。扇にてか
くし。あなほりなどして久しうまつるも見ふるしうあ
せなどあへしき。けふはいとくいて。雲林院ちそく
るんなどのもとにたてる車ども。葵かつらもちなへて
見ゆ。日は出たれど。空は猶うちくもりたるに。いかでき
かんと目さすましおきめてまたる。郭公の。あまたこへ
あるにやとせこゆるまをなきひしかせば。いみしうめで
たしとおもふほどに。鶯の老たる聲にて。かれに似せん
おほしくうちそへたるこそ。にくけれどまたをかじけれ。

ことなりぬや
事成時置れりやき聞
【訂】活本には「ことなりぬや」とあり。後に。源
氏実録にも「ことなりぬや」とあり。これは
本のまゝにて開ゆべし
またむ。無期。つづきもなしとの心也。
赤ききね着たる物ごのいたし
【訂】活本并に万歳抄にはまたむとあり。是
も本のまゝとるし
御。したし。江次第六。賀茂祭路頭次第
云。長官。御興賀丁前後廿人。興長左右
各五人。女嬪十人。執物十人。腰興上下異
これに奉りておはしますらん
齋院にのりておはしますらん。齋院道の
ほどは御車にて。御社近くては腰興にのる
一。江次第六。路頭次第云。賀王先詣下
社。賀王社頭小舎。腰興衣袋。腰興先詣下
社。腰興入。社頭三興長。行列在。式。未。判。判
社。十許。賀王下。腰興。歩行。以。三。兩。前。一。布。道
就。社。前。左。股。座。亦。出。社。外。二。駕。半。車。一。登。二
上。社。下。登
あふひよりは下めて背袴葉ごの
人々のかさせるあふひ草。背袴葉のきぬな
ご。桃華葉云。背袴葉。表背丹の黒み
あり背背云々。イ木造にいひつれ程もな
く歸らせ給ふに。御使ひのかざしの葵もす
こしなやか也。桂の葉もうちしほみて申
く。いさえんに見えたり。御車の過ぎせ給
ふ句ひより始め出し車ごの扇からきぬ。
背袴葉なるなどもなまめかしう見ゆる。種
色所の衆のあな色云々
亂れきて
【訂】古抄本にはひれきてに作れり。按に

まつりのつらさをまつり
いつしかとまつり。御社のかたよりあかき。ぬなごきたる
ものごもなごつれだちてくるを。いかにぞ。ことなりぬや
なごらへは。まだむごなごらへて。御こしたごしなごも
てかへる。これに奉りておはしますらんめめでなく。けち
かくいかでかごるけすなごのこふらふにかとおそろし。は
るかけにいふはごもなくかへらせ給ふ。あふひよりはじ
めて。青くちほごものいとをかしく見ゆるに。所の衆のあ
をいろしらがさねを。けしきはかり引かけたるは。卯花垣
卯花に似たる心
根ちかうおほえて。郭公も陰にかくれぬべうおほゆかし。
祭の日
きのふは車ひとつにあまたのりて二あるのなほし。ある
は狩衣など亂れきて。簾取おろし。物ぐるほしき迄見えし
君達の。齋院のえんがにて。ひのさうぞく麗くて。けふは一
人づゝをさくしく乗たるしりに殿上わらはのせたる
物見の人歸路をいそぐさま
もをかし。わたりはてぬるのちには。なごかたしもまごふ

飛の草のてど、草の草林よくにたれば、眠れるにやひれならんには、領市のとこ、郭公も陰にかくれ、
 「かく聲をえやは忍ばぬ郭公初卯の花の陰に、かくれて一人丸前註、
 醫院の夫人がにて、醫院の響の垣下にまわらるるなるべし。祭の日二賦の時、舞人に垣下の公卿勸益の事、江次第にあり。けふもさやうの儀式あるにや。弄花抄云。大變なごにも人数の外の人交りたるな。垣下の君、ささいふ世云々」

かつらなどのしほみ
 きふのおふひにそへし桂のしほみに。今さしたる卯花のあたりしきが見事なることほきは、ほはえもさほるまう見えたる行を、
 さきに車せきつてきて、遠く見れば、さほり、さたく見えし。近へゆきもてゆけば、さほり、さたく見えし。近へゆきもてゆけば、さほり、さたく見えし。

みれにわがる。「風ふけば峰に別る、白雲の絶つれなき君が心か」古今戀二

うへはつれなく草ぢひ
 うへは何ともなく水草生たる。後捕鯉五「蘆葉のうへはつれなきうらにこそ物あり、ひはつれなくいふなれ」此詞は、りりされり

ちのうらへたる香
 蓮の匂ひの間近くしたる心。前にも汗の「増」弘云。大段にも「其折の香の、りて、りへたるも」さあり
 「町」活本には香も下なくて「ちのうらへたる、もいさな、り」さあり

いふへきにもあらず
 ささおほするほどの人の車なれば。其優越はいふも更なりこの心

らん。我もくどあやぶくおそろしきまよふとまにたらん
 といそふき。かうなうそまそ。のどやかにやれど。扇をさし出てせいすれど。ましもいれねは。ありなきて。すこしひろき所にしひてど。りめさせてたちたるを。心もとなくにくしどぞ思ひたる。きはひかゝる車どもを見やりてあるこそをかしけれ。すこしよろしきは、ほほにやり過して。道の山里めきあはれなるに。うつ木垣ねといふ物のいとあらしくしう。おどろかしけにさし出たる枝どもなどおほかるに。花はまだよくもひらけはせず。うほみがちに見ゆるをささらせて。車のことなたかなたなど、にさしたるも。かつらなどのしほみたるが口をしきにをかしうおほゆ。とほきは、ほはえもさほるまう見ゆる行をさき。ちかうゆきもてゆけば、さほりもあらざりつることをかしけれ。さどこの車の誰ともしらぬがしりにひきつゝきてくるも。たゞ

なるよりばをかしと見るほどに。ひきわかるゝ所にてみぬにわかるゝといひたるもをかし」
 五月ばかり山里にありくいみしくをかし。澤水もけにたゞいどあそく見えわたるに。うへはつれなく草かひしけりたるを。ながくどたゞをまにゆけば。したばえならざりける水のふかうはあらねど。人のあゆむにゆけて。とほしりあけたるいとをかし。左右にある垣の枝などのかゝりて。車の屋かたにゐるも。いそぎてとらへてさらんと思ふに。ふとはづれて過ぬるもくちをし。よもぎの車におしひしがれたるがわのまひたちたるにちかうかゝへたる香もいとをかし」
 是亦一段之
 いみしうあつき比。夕涼みといふほどの。物のとまよなごおほめかしきに。男車のとまよおほはらふへき事にもあらず。たゞの人もしりのすだれあけて。ふたりもひとりものり

童女。はした物。イ本おほきやかなる童女。
よきはした物とあり

かき板

「訂」活本になし

「増」かき板とは。物を載せてかきして運ぶに
用る板也。前後二人して持つ板也

ひまげ

「訂」此三は。万歳抄。イ本。活本。に皆なし

中のぼん

「増」此云。懸盤とは異之。大盤に對して。小なるを中ぼん云云

ひぢかりたるらう

「増」此は折符なるべしとの説あれど。取らず

ちくわうあつきたる

「増」此の竹籠の説は甚非之。万歳云。ちくわうを或本に竹王冠とあり。作り給を有しをさきびめたるにぞとあり

眞云。万の脱よろし。是に従ふべし

物へいく道に

「増」こは別段之。是より以下次々も皆別段に

て例の軽すぎび

けいし

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

御厨子愚痴之

ろのかざりを風流にせしこ
くよくしたるゑぶくる。からかさ。かき板。たなづし。ひさ
け。てうし。中のぼん。わらうだ。ひぢかりたるらう。ちくわ
うあかきたる火をけ」

うあかきたる火をけ」

「訂」此三は。万歳抄。イ本。活本。に皆なし

中のぼん

「増」此云。懸盤とは異之。大盤に對して。小なるを中ぼん云云

ひぢかりたるらう

「増」此は折符なるべしとの説あれど。取らず

ちくわうあつきたる

「増」此の竹籠の説は甚非之。万歳云。ちくわうを或本に竹王冠とあり。作り給を有しをさきびめたるにぞとあり

眞云。万の脱よろし。是に従ふべし

物へいく道に

「増」こは別段之。是より以下次々も皆別段に

て例の軽すぎび

けいし

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

つゝみたる物

「訂」活本には。おほきにつゝみたる物とあり

つゝみたる物

世の足駄の類也

贈訂枕草子春曙抄卷の九

つかふらん人こそ
其従者のすげなきをつかふ主人もさぞなど
おらばるいさこ

上達部君たちなごの
行幸には公卿以下歩行にて供奉なればと

よろづの事よりも
是より行幸に上達部の車のなきがさうく
しきさいひしに付て。車の見ぐるしげなる
がわるき事ぞいなふこ

説經などはいさよし
既經隨問の車などは陣うしなふ後世のため
なれば。さまで風流に花籠ならでもよしと

見でありぬべし
て文字にこりてよむこの祭見る車見ぐるし
くは見すしてあれかしと

たゞ其日のれうにきて
祭見んためにとてと。是より祭の物見車
は花やかに有たき心ないふと

「訂」原本したつゝみあり。今活本古本により
て改めつ

何しになご
かく人におとるさまにては何
しに物見に出たるぞと覺るさこ

よき所にたてんさいそがせは
物見のたよりによき所を。人よりさきに
おもひて車ないそがせ催したる。心と

よびいるべし。あいきやうなくいらへもせやらくものは。
返事もせと

つかふらん人こそおしはからるれ」
童女

行幸はめでたき物。上達部君たち車などのなきぞすこし
返事もせと

さうなへし

よろづの事よりも。わびしけなる車にさうぞくわろくて
車の説東

物見る人いともどかし。説經などはいとよし。つみうしな
句

ふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにて見
わたりやつしたるはと

ふるしかるべきを。まして祭などは見でありぬべし。下す
見ぐるし

だれもなくてしろきひとへうちたれなどしてあめりか
さ車のさまと

し。たゞ其日のれうにとて車も下すたれもしたて。いと
その車のまのりしと

くちをしようはあらごと出たるだに。まごる車など見つけ
見ぐるし

ては。何しになご覺る物をましていかばかりなる心ちに
まやうに見苦してはみるぞと

てさて見るらんおりのほりありく君たちの車のおしわけ
他の車を

てちかうたつ時などこそ心をきめまはすれ。よき所にた
おしわけて清少の近所にたつと

よき車にのりたるゆゑと

わはり

「増」源接。わはびこりの意ならんが。居ながら車旗をはるさいふ事いかに

七つやう

「訂」万歳本。宿本。紫本。皆七へ八へあり

御前さにもすわはん

前座の人々に水飯さて湯づけなどやうの物なくはするこ

すだれもあるがきりきりおろし 齊院へおろしさまこ。イ本ながえごもこは。車の轆をおろし。牛をはなちたるさまこ。是も禮儀なるべし

人だまひひきつゝきて

副車。延喜式。和名云。漢書註云。副車ソクンイロトマイロ後乘也。河海云。人給。後國御記。棚籠有。此名三田車ニ云々。花鳥云。出車は公方より點せられて。其人に給ふゆみに人給と名付る也

てんと急せば。とく出てまつほどいと久しきに。るはりた車の座を居張之まつりをまつていこ

ちあがりなどあつくくるしく。まうちこうずるほどに。齋院因こくるしむこ

のえんがにまわりたる殿上人。所の衆辨少納言など七つや車

つ引つゞけて。るんのかたよりはしらせてくることごと齊院のかたより

なりけりごとおどろかれてうれしけれ。殿上人の物いひ

おこせ。所々の御前ども水飯にすはんくばすとて。さじまの

もとの馬ひきよするに。おほえある人の子どもなごば。さ

ふしきなどおりて馬のくちなごとしてをかし。さらぬもの

見もいれられぬなごいとほしけなる。御こしのわた

らせ給へは。すだれもある限とりおろし。過させ給ひぬる

にまごひあぐるもをかし。其まへにたてる車はいみしう

せいするに。なごてたつまじきごとしひてたつれば。いひ

わづらひてせうそこなごすることをかしけれ。所もなく

たちかさなりたるに。よき所の御車。人だまひひきつゝきて下人を制し兼て主人にこころ

たゞのけにのけさせて

源氏發卷の車あらそひの所にもさふくの人なき隙か思ひまだめてみなさしのけさするさいへるさまに似たり

人だまひひきつゝきて

「訂」万歳抄には。人給ひまでたてつゞきて」とあり。イ本には「人だまひひきつゝきて」せつる」とあり

うしかけて

いま、ではながえをおろして。しちにたていおきしなるべし

ほそごのに 清少の座の扇に忍びてさまりし人。雨ふる曉歸りし事を沙汰せしなるべし

地下などいひても

彼さまりし人の事ないふ也。地下まは昇殿せざる人ないふこ。地下の人ながらめやすき人と世にもゆるされしな。便なくさめま

トき人といふがあやしきこと

大がさのかたをかきて

彼御文のさまこ。給にかいせ給ふこ
「増」和名抄ニ。史記音義云。察。俗云大笠於保賀佐。笠有柄也

ておほくくるをいづくにたゝんと見るほどに。御前ども

只おりにかりて。たてる車どもをたゞのけにのけさせて。

人だまひひきつゝきてたてることそいとめでたけれ。おひのけ

られたるえせざるまごもうしかけて。所あるかたにゆる

がしめてゆくなごいと佐しけ也。きらきらしきなごをか

えさしもおしひしがずかし。いとまよげなれど。又ひなび

あやしく。けすもたえすよびよせ。ちご出しするなごする

もあるぞかし」

ほそごのにびんなき人なん。曉に笠さゝせて出けるとい

ひ出たるま。よくまげはわがうへなりけり。地下などいひ

てもめやすく人にゆるされぬばかりの人にもあらざる

を。あやしの事やと思ふほどに。うへより御文もてきて返

事只今とおほせられたり。何事にかと思ひて見れば。大が

さのかたをかきて。人はみえず。只手のかぎり笠をどらへ清少心

させて下に

后宮

みかさ山やまのはあけしあしたより。

どかへせ給へり。なほはかなき事にてめめでたくのみお

ほえさせ給ふに。はづかしく心づきなき事はいかで御ら

んせられじとおもふに。さるそらごとなどのお出くるこそ

くるしけれ。とをかしうて。こと紙に雨をいみしうふらせ

て。しもの

雨ならぬ名のふりにけるかな

さてやぬれぬに侍らんとけいしたれば。右近内侍を

どにかたらせ給ひて。わらはせたまひけり

三條の宮におはします比。五日のとうぶのこしなどもち

てまゐり。くす玉まゐらせなど。わかき人々みくしげどの

なごくす玉して。姫みやわか宮つけさせ奉り。いとをか

き薬玉はかよりもまゐらせたるに。あまごしといふもの

みかさ山 后宮の御連研なるべし。彼笠

いせて出たる朝より。さまく人のいふ事

あるを仰せらるゝなるべし

はづかしく心づきなき

万華めてたき后宮に心付なきふるまひは見

え申すそのみ遠慮しつるに。かゝるうは

さ出来て。しられまわらせし苦しきこと

雨ならぬ名の 清少の付句。心はかゝる

うき名の世にふりて。后宮にまでしられま

わらせしはづかしきよその心なるべし

右近内侍 前駐す

三條の宮に 勘物云。長保元年八月九日自

職御曹司二移御。生區三條宅

さうぶのこし

萬葉集。兼中へ奉るな。后宮へもまわらせし

なるべし。公事根源端午の所に云。六府あ

やめのこしを南殿の階の東西に立。又時の

花を折てへて同くおく。四日は朝餽の庭に

これを立云々。徳園抄に圖あり

みくしげどの

薬玉は糸所より奉れ。姫宮などには女中

何し手づからしてまわらせらるゝなるべし。

拾芥云。御藤御殿在。貞觀殿中。以上藤

女房御別當云々

まはらしに

「訂」原註には。まはらしといふに同下。まゐ

りこし物なればこ。さあるは非非云。

臥接に。万十二卷廿九丁に「ませこしにむ

きはむ駒ののちゆれど猶しこふらくしゆび

かれつも」さある意なるべし。万葉抄に。

ませこしとは。あなましは野庭なるものな

れば。たはませこしに御覽するまでにさ

げ奉るさ。今の世も貴人に物奉るは御目

にふるゝなごぞいへる

流接。ませこしにさふらへごきて。さあり

たし

皆人は花や みな人は薬玉として。花標と

色々細工を急ぐ端午の日も。清少は我心を

知て宵刺を過せて満足と御職也

十月十餘日

これより別段なるべし

くびよりかみをかこし

源氏浮舟巻ニかみわきよりかこしてさあ

り。也足軒御説ニ。髪を脇の下より手に取

たる林云々。是も首の程より前へ取たる

さまにや

あたらしきごきてよくもにたまひし説

「訂」原本。あたらしきごをばにいとよくもに

たりし説」さありて。註に不審他本をかこ

かふべし。さあり。今活本。古抄本。イ本

によりて改めつ。流接。ごきてさある本に

てよく。聞えたり。さてよくも似たりしは。

下のゆげひのすけといふへがされり。上文に

げなきものゆげひのすけのやうさあり

ゆげひのすけ 左右衛門佐也。赤衣をさる

物なれば中納言をたさへしにや

成信の中將 勘物云。源成信兵部卿致平親

王男。母左大臣雅信女。長徳四年左中將元

部大輔

「訂」此の一段活本にもなし。黒本云。成信正

おなじ所の人の聲などは。常にきかぬ人は更にえきよわ

ひし哉。ゆげひのすけとぞわかき人々はつけたりし。しり

にたちてわらふもしらずかし

成信の中將こそ人の聲はいみしうよう聞しり給ひしか。

おなじ所の人の聲などは。常にきかぬ人は更にえきよわ

ひし哉。ゆげひのすけとぞわかき人々はつけたりし。しり

にたちてわらふもしらずかし

紙のはしを引やりてかへせ給へるもいとめでたし

十月十餘日の月いとあかきに。ありきて物見んとて。女房

十五六人はかり皆こきよぬさうへにきて。引かくしつゝ

有し中に。中納言の君の紅の張たるをきて。くびより髪を

かいこし給へりしかは。あたらしきごきてよくもにたま

ひし哉。ゆげひのすけとぞわかき人々はつけたりし。しり

にたちてわらふもしらずかし

成信の中將こそ人の聲はいみしうよう聞しり給ひしか。

おなじ所の人の聲などは。常にきかぬ人は更にえきよわ

ひし哉。ゆげひのすけとぞわかき人々はつけたりし。しり

にたちてわらふもしらずかし

紙のはしを引やりてかへせ給へるもいとめでたし

十月十餘日の月いとあかきに。ありきて物見んとて。女房

十五六人はかり皆こきよぬさうへにきて。引かくしつゝ

有し中に。中納言の君の紅の張たるをきて。くびより髪を

かいこし給へりしかは。あたらしきごきてよくもにたま

ひし哉。ゆげひのすけとぞわかき人々はつけたりし。しり

にたちてわらふもしらずかし

成信の中將こそ人の聲はいみしうよう聞しり給ひしか。

おなじ所の人の聲などは。常にきかぬ人は更にえきよわ

ひし哉。ゆげひのすけとぞわかき人々はつけたりし。しり

にたちてわらふもしらずかし

光のこゝ。小世繼廿九段にも見たり
大藏卿。勅物云。正光。長保二年藏人頭左
中將。四年十月大藏卿。愚案案議正光。關
白兼通公六男。母左馬頭有年女
見わき聞分物な

蚊のまつげのまつるほど
「増」万葉抄云面を見わき聲を聞きわつたこと
あり

其のまつげのまつるほど
しるこに設師といふ物也耳。三門三林下
蟻動二門之半開と案求にあり。列子湯問
篇に。魚鱗といふ虫。群飛て。蟻於蚊睫
な。世にめよくみ。と人も。其聲形をえ見
聞つたを只黃帝と容成子と神を以見れば
山の阿のこさく。氣を以きけば雷の聲の
こさしき云々

彼そにえきついで
彼そにえきついで
塵ばみ。塵のたまれる也。源氏須磨卷にだ
いばんなごつたへはちりばみてあり
「さ」しなき云々

「正」原本を上に付て成たる也。さ「し」を
よみて。註に或説に鬚指といふ物云云
あるは非之

傍註。たる(句)さしなき云々。筆の
ささこあり
激接。さしは。今いふ儀法にはさみてつ
つふないふ
女はかみみ。心のはじ見ゆる。鏡は女
のかたち作る物也。是おるそかなるは不
なる心見え。よきは心にくるべし。鏡
は手く人よくたしなむべければ。おるそ
かなれば手なすかみ心見ゆべしと
おきく

かず。こゝに男は人のこゑをも手をも見わき聞分物な
成信はひそかにいふ事をもき。知給ひしと
いみしうみそかなるもかしこうき。わき給ひしこそ

大藏卿はかりみ。とき人なし。誠に蚊の睫のおつるほど
も聞付給ひつべくこそ有しか。職の御さうしの西おもて
に住し比。大殿の四位少將と物いふに。そほにある人。此少
將に扇のゑの事いへとさしめければ。今彼君たち給ひなん
此正光のみいさなきいふかりて
にをど。みそかにいひいる。其人だにえきついで
何どかくとみよをかたふくるに。手をうちて。にくし
の給はげふはたしじとの給ふこそ。いかに聞給ひつら
んとあさましかりしか

硯をたなけに塵はみ。墨のかたつかたにしどけなくすり
ひらめかし。ちうおはきに成たるかとしなきしたるこ
そ心もどなしと覺れ。萬のやうどはさる物にて。女は鏡硯
こそ心のはじ見ゆるなめれ。おきくちのはさめに塵るな
筆おく所のあはひないふ

ど打捨たる様こよなしかし。男はましてふづくさきよけ
におしのごひて。重ねならずはふたつかけての硯のいと
つきくしう。まきおのさまも態ならぬとさかしうて。墨
筆のさまもど人のめとむばかりしたてたるこそさかし
けれ。とあれどかくれどおなじ事とて。くるはこのふたも
かたしおちたる硯。わづかにすみのるたる。ちりの此世に
はばらひがたけなるに。水うちながして。あまじのかめの
口おちて。くびのかきりあなのほど見えて人わろきなど
も。つれなく人の前にさし出かし。人の硯を引よせて手習
ひをも文をもかくに。其筆なつかひ給ひそ。といはれたら
んこそいとわびしかるべけれ。うちおかんも人えろし。猶
つかふもあやにく也。さ覺る事もしりたれば。人のするも
いはで見えるに。手なごよくもあらぬ人の。さすがに物か
まほしうするが。いとよくつかひかたれたる筆を。あやし

「増」激接。おきくちは今いふ儀法にはさみてつ
硯のさまの上の方にはさまに塵のあるな
いふ
私云。原註に。筆をかく所のあはひないふ
と。さあるは非之。今削り去りつ
こよなし。無題に。ゆる事もなく龍相に接
塵たるまま
とあれどかくれ
よくもてなして。あしくても。物おけば
おな事とての心。是より物にまはは
硯のさまないふ
くるはこのふたもかたし
時給せぬ黒染の硯のさまのふたのた
かけたるなり
あな下のかめ。有磁也。焼物の水入の
の形なる也

「増」激接。おきくちは今いふ儀法にはさみてつ
硯のさまの上の方にはさまに塵のあるな
いふ
私云。原註に。筆をかく所のあはひないふ
と。さあるは非之。今削り去りつ
こよなし。無題に。ゆる事もなく龍相に接
塵たるまま
とあれどかくれ
よくもてなして。あしくても。物おけば
おな事とての心。是より物にまはは
硯のさまないふ
くるはこのふたもかたし
時給せぬ黒染の硯のさまのふたのた
かけたるなり
あな下のかめ。有磁也。焼物の水入の
の形なる也

百十四段

うまや 今の鳥つぎ宿々也。和名云野々
や。唐令云每三十四里一驛。若地勢險阻及
無二水時一驛置一驛之。延喜式凡諸國驛路
邊植二桑樹令二往來人得休息
と云月のうまや

【町】活本に。月のうまやとあり
なしはら 栗原。和名云近江栗本郡栗原
のぐちの 野口。和名云丹波船井郡。又周
防政到郡

【番】万歳抄云。河内之。信賢の取に「しらざりし野口のまきに宿りてみちのまきにいまだあまたし」
山のうまや 和名云。伊勢員辨郡野野二十。同云越後古志郡夜麻

ふなを。山城茶野邊郡所也。古江清淨の
地也。三代實錄云。世仲舒祭法。廣勝殿。書五
卷之時。於三雲食之州縣内。清淨。廣勝殿。之撰
之。故命三陰國寮。於山城北船岡。修此祭。監
神。清淨之。 和名山城乙訓郡廣勝。

【指】演按。万歳に「さ夜ふけてうたらひの岡の郭公ひざりねざめの床にきくかな」とあるは何に出たるに。おぼつかなし。もとは「うたらひは」
「こひの誰か。六帖を」みちのくにありといふなる。たこひのなを我身にそふるころかな」と見えたり
人見のな。 住吉物語に。嵯峨野ノ子日に出て「手もふれてけふはよそにて歸なん人見の岡の松のつらさよ」

ふるのやしる。 延喜式。大和國山邊郡石上
坐布留御魂神社。日本紀神代卷。そまのの
み。こさ八岐の大蛇をきり給へる。蛇の
龍正と名づく。是今石上にいます由見ゆ。
神皇正統記。神武天皇御布津といふ。蛇を字

百十六段

うまやは
なしはら。ひくれのうまや。もち月のうまや。のらちのう
まや。山のうまや。哀なる事を聞置たりしに。又哀なる事
の有しかば。猶とりあつめてあはれ也」

うまやは

なしはら。ひくれのうまや。もち月のうまや。のらちのう
まや。山のうまや。哀なる事を聞置たりしに。又哀なる事
の有しかば。猶とりあつめてあはれ也」

さかば
ふなをか。かたをか。ともをかばさしのおひたるがをかし
き也。かたらひのをか。人見のをか」

さかば

ふるのやしる。いくたの社。たつたのやしる。はなふちの

やしるは

ふるのやしる。いくたの社。たつたのやしる。はなふちの

麻志間見命に給へり。其紐を石上にあがむる由みゆ。袖中抄ニ昔女河邊にて布を洗ひしに。河上より御流きて。万の物を皆きり破りし。此布にまつはれさまりし。此社に祝故に。布留まはぬのにさゝまるはかけり云々。三代實録ニ清和天皇貞觀九年三月十日大和國石上神加正一位云々

〔註〕万歳抄に。ふるのやしるなし

〔註〕万歳抄に。津の國八郡郡延喜式にあり。日本紀ニ神功皇后の時天照大神のいもうと稚日女尊われ。活田長映の國に居んま教給ふにより。海上五十狹茅をもちて祭らしむ

〔註〕活本に。いくたの社なし

たつたの。延喜式ニ大和國平郡々立田坐天御柱國御柱二座云々。日本紀天武天皇四年四月。美濃國佐伯廣庭に風神を龍田の立野にまつらしむ

はなぶちの。陸奥宮城郡鼻節神社延喜式にあり。シニチと通ス

みくりの。美久理神社。越後沼垂郡。延喜式すきの

〔註〕三輪の社の事。古今集に「我鹿はみわの山もさひしくはさふらひきませたてたる門」

貫之集に。大神のまつりに詣て、「いにしへの事ならずして三むの山みゆるまるしは杉にそ有ける

〔註〕のま。文德實錄二日。嘉祥三年七月遊江國在事社授三從五位下

まのみき。けんさや。古今佛語拾遺「れき事なまのみきけん社こそ果は歌きの珠さなりなめ」

やしろ。みくりのやしる。すきの御社まゝしあらんとをか

〔註〕江佐野郡このまの神社。喜式云々いふ事のまにれひなふふきやうなれば頼し。このまのまの明神いとたのもし。このみきけんや

いはれ給はんとおもふぞいとをかしま。ありとほしの明神。貫之が馬のわづらひけるに。此明神のやませ給ふとて

哥よみて奉りけん。やめ給ひけんいとをかし。此ありとほしとつけたる心は。誠にやあらん。むかしおほしませしける帝の。口若き人をのみおほしめして。四十に成ぬるをばうしなばせ給ひければ。人の國のとほきにいきかくれな

どして。更に都のうちにはさる物なかりけるに。中將なりける人の。いみしき時の人にて。心なごも賢かりけるが。七そ

ちちかき親ふたりをもちりけるが。かう四十をだにせい

あるにましていとおそろしとおぢとわぶさ。いみしうけ

うある人にて。とほき所には更にうませじ。一日に一度見

ではえあるまじとて。みそかによるく家の内の土をは

宗祇云。れき事は神にいのる心ないふ。それを戀にきて。あだなる人のこなたかなたよりあはまほしき心ないふをさくにそへたり。あまり心よわきは後の歌きなる幾の事任といふ名に付て此詩を引ていへる哉と

ありとほしの

〔註〕活本。貫之が馬のわづらひけるに此明神の「といふ十六字なし

〔註〕活本。蟻通明神は式外の神。延喜式を引て和泉郡と註されしは例の無稽也。式に阿理莫神社と有は異之。蟻通は今現に日根郡にあり(弘云日根郡長瀬村北に有云)泉務志卷五云。按歌林其材神社者。載蟻通事者。本雖依枕草子。罔疑其詳也。如別蛇蟻。知本末。蟻通既所載撰實經也。(見法苑珠林六十三)唯蟻通曲。爲此神絕妙歎。羅山詩集云。元和辛酉夏十九日。自泉舉至信達。其道中有蟻通神廟焉。昔孔子以絲繫蟻貫九孔蟻事在祖廟事也。(神考考云)昔統宗覺聖人拘々而爲之哉。蓋好事者以小知託之聖賢。以夸於俗而已。然智計之關于世。亦必不爲不然矣。夫此神之著名也。亦以此。其後紀貫之之在泉務也。過此不下馬。馬忽不進。貫之詠和歌思不覺。爾來虛名蓋著云。一蟻九穴蟻貫絲。外國爾知我計奇。知亦多端何足怪。却思齊后破環時。四峰今在記云。蟻通也。蟻未詳時世及中將父子姓名。舊俗土記之傳。其來尙矣。或又曰。唐求灰蟻。此神蟻通而不散付之。其博識居多。獨以蟻通名其社者。蓋以其最在後。而禁非習在此也。(以上清水本にあり)

河社卷二云。雜寶藏經第一云。(始界)佛言。過去久遠有國名棄老。彼國土中有老人者皆遠驅棄。有一大臣。其父年老。依如國法。應在驅遣。大臣孝順。心所不忍。乃深掘地。作一密窟。匿父其中。時時奉養。爾時天神。捉持二蛇。著王殿上。而作是言。若別離離。汝國得安。若不別者。汝身及國。七日之後。悉當覆滅。王聞是言。心懷懊惱。即與群臣。參議此事。各自陳謝。稱不能別。即奉國界。誰能別者。厚加爵賞。大臣歸家。往問其父。父答子言。此事易別。以細而大物。停蛇著上。其蟻燒者。當知是雄。住不動者。當知是雌。即如王言。果別離離。(中略)天神又以一構檀木。方之正等。又復問言。何者是頭。若臣智力。無能答者。臣又問父。父答言。易知。故著水中。根者必沉。尾者必浮。即以其言。川答天神。(中略)天神歡喜大遠國王。珍奇財寶。而歸王言。汝今國土。我當擁護。令諸外敵。不能侵害。王聞是言。已極大踴悅。而問臣言。爲是自知。有人教汝。願汝大智。國土安。既得珍寶。又許擁護。是汝之力。臣答王言。非臣之智。願施無畏。乃敢矣陳。王言。設汝有万死之罪。猶尚不問。况小罪過。臣自王言。國有制命。不聽養老。臣有老父。不忍違棄。冒犯王法。藏著地中。臣來願答。盡是父智。非臣之力。唯願大王。一切國土。遠驅養老。王即歡美。心生喜悅。奉養臣父。母以爲師。濟我國家。一切人命。如此利益。非我所知。即便宣令。普告天下。不聽養老。仰令奉養。(終)

なごてか。家に入らたらんを

老人の出つかへんをこそきらひ給はめ。家内に居たらんはしらでもおほせよ。なごてか。さまで制し給ふらんさの心。おろなるおきてをあやしむ詞と

りて其うち屋をたてよ。それにこめすきて。いきつゝ見

る。おほやけにも人にも。うせかくれたるよじをしらせて

あり。なごてか。家に入らたらん人をはしらでもおほせか

し。うたてありける世にこそ。おやは上達部などにや有けん。中將など子にてもたりけんは。いと心かしく萬の事

しりたりければ。此中將わかけれど。さえありいたり賢く

時の人をおぼす成けり 帝の御心にも。此
中將を當時の賢真をおぼました。老父の後
見ありし故なるべし

いさほしくて 此國邊きに似て意味あり。
帝のおぼすにおぼして老人を捨給ふ故天
下の人うきまわらせて。此他國のうき
ふ難をもすくはんとおもふ人なけれど。中
將はさすおぼいさほしく思ひまわらすと

まきにして行かたにしろしなつて
老父のなしたる木をまきにしてな
るゝつたを宋とてしるしてなり

して。時の人におぼす成けり。もろこしの帝この國のみか
是も此帝おぼす
るに。老人を捨給ふ心ある故に他國よりうきふなるべし
い心見事なし
ごき。いかではかりて。此國うちとらんとして。常に心見あ
らがりひ事をしておくり給ひけるに。つやくとまろにう

つくしけにけづりたる木の二尺ばかりあるを。これがも
此國人いづれも若くて分別なかりし故と
と末いづかたぞとひ奉たるに。すべてしるべきやうな

ければ。帝おぼしめしわづらひたるに。中將の心いとほしくて。おや
のもとにゆきて。かうくの事なんあるといへば。口ばや
老父の詞

からん川にたちながらよこさまになげ入見んに。かへり
てながれむかたをするとまるとしてつかはせとをしふ。ま
中將を内して
ありて我しりがほにして。心見侍らんとて。人々らしてな

けいれたるに。まきにして行かたにまるとしをつけてつか
それ
はしたれば。まことにななりけり。又二尺ばかりなるうち

なばのおなじやうなるを。是はいづれか男女とて奉れり。
二正
又さらに人えしらず。れいの中將ゆきてとへば。二つをな

らべて尾のかたにはそきすばえをさしよせん。をばた
木のえた
らかさんさめとしれといひければ。やがてそれを内裏
女を知れ
のうちにてさしければ。まことにな一つはうごかさず。一つ
さうにする

はうごかしけるに。又まるとしつけてつかはしけり。程久し
雌雄をしるしたる
うて。七わたにわたかまよりたる玉の中とほりて。左右に口
穴のまがりさほりし

あきたるがちひよを奉りて。これにまとはしてたまは
種
らん。此國にみなし侍る事なりとて奉りたるに。いみしか
彼國俗此玉に精を貫く

らん物の上手ふようならん。そこらの上達部よりはじめ
そとに
て。ありとある人しらすといふに。又いきてかくなんとい
中將老父に問

へば。おほきなるありを二つとらへて。こまにはそき糸を
老父の詞
つけ。又それに今すこしふとまをつけて。あなたの口にみ
中將其由を帝へ申

つをぬりて見よといひければ。と申て。ありをいれたりけ
中將
るにみつのかをかききて。まことになとてうあなのあなた
のくちに出にけり。さて其糸のつらぬかれたるをつかは

又それに今すこしふとまをつけて 織の腰
にはほとまなつけて。又玉を貫くへま織に
今少ふとまなせんとて。申しつとまをいふ物
にせしと

みつをぬりて 蜜の香につきて織のよくゆくへまがためな
るべし。いみちとありおなやま。源氏鈴虫
にみちをくしほりけてとあり。是も織

七つたに 七曲と

日本 ひのこいふむべし。又日本紀をや
まきふみよめばやまもよむべきにや

只老たる父母の
是中將我父母の事なにいふにあらず。すべて
世人の父母をゆるされん事をいへるなるべ
し。其中に我父母の事はこもれば。目連尊
者我母の地獄にあるをすくはんとするに。
あまれく一切の衆生の盂蘭盆をおこなはし
めて。其母をもうかましめ給へりし。佛の
方便をおこなはるべし

ないわたに 七曲る 哥の心明之。後双紙
にも此哥通明神の御哥とまゝして。是昔
彼社の邊に旅客の宿れるに。夢に示し給ふ
哥云々。これも枕双紙に付ていへるにや

百十七段

したりける後になん。猶日本はかしこかりけりて。のち
くはさる事もせざりけり。此中將をいみしき人におほ
しめして。何事をし。いかなるくらゐをか給はるべきとお
ほせられければ。さらにつかさ位をも給はらじ。只老たる
父母のかくれうせて侍るをたづねて。都にすまする事を
ゆるさせ給へと申ければ。いみしうやすき事とてゆるさ
れにければ。よろづの人のおや是をきよてよろこぶ事い
みしかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなんあり
ける。さて其人の神になりたるにやあらん。此明神のもと
へまうでたりける人に。よるあらはれてのたまひける
なゝわたにまがれる玉のをぬきてありとほしともし
らずやあるらん
どの給ひけると人のかたりし
ふるものは

百十八段

雪 あられみぞれはにくけれど
「訂」活本には。雪にくけれどみぞれのふるに
あられ」とあり
又次なる雪はの二字。下の結尾にある雪の
一字も活本にはなし
雪はひはたふき
柏皮ぶきにふりたる。おもしろしこと。次
にあられば板屋といふも同ト

雪。あられ。みぞれはにくけれど。雪のましろにてまじり
たるをか。雪はひはたふきとめやなし。すこしきえが
たになりたるほど。又いとおほうはふらぬが。かはらのめ
ごとに入て。くろうましろに見えたるいとをか。しづれ。
あらはいたや。霜も板屋。庭

百十九段

入日
「訂」此の二字活にはなし
うすきはみ 薄黄之。烟河百首。口なしの色
にたなびく薄雲を雪けの空と雖。見ざらん

入日。いりはてぬる山ぎはに光りの猶とまりてあかう見ゆ
るに。うすきはみたる雲のたなびきたるいとあはれなり
月は

百二十段

すはる 昴星。和名六星の大神云々
みやうじやう 明星。和名に阿加保之とよ
めり。神樂哥言々利々に。あはほしやみや
うとや云々
夕つ 長庚。和名太白星の一名。暮に四
にあははる。星之
よはひほし 流星。和名天津星にしもか
る名なきつうかすはたとはむれし詞と

有明。東の山のはははそうて出る程哀也
星は
すはる。ひこほし。みやうじやう。夕つ。よはひほしをた
になからましかは。まして

百二十一段

明はなる云云
「訂」是より結尾のあはれ也に至る六十餘字皆
本になし

朝に去色 古詩の詞なるべし未考
「増」又選宋玉賦に朝爲行雲暮爲行雨なごの意
にや

霧は
「訂」此段原本にはなし。今万歳抄によりて翻
ひつ

はしり火 おく炭など飛火するをいふに
や。むればしり火など皆によりり
「増」古今集併讀歌に。小野小町
「八にあはんつきのみき夜は思ひおきてむれ
はしり火にこゝるやけなり」
さきのさばくふ 未勘。但齊の所載を屋根
にうちあけしをあらそひくふをいふにや
十八日清水に

世に十八日を觀音の日とする事。勝尾寺の
觀音を。妙觀といふ人寶龜十一年七月十八
日より。僧俗童など十八人して。千手の像
四天皇等卅日に刻み終りて。八月十八日に
妙觀うせたり。彼十八人も見えずなりし。
これより國俗十八日を觀音の日とする事。
元享尺書
ないがしろなる物
「訂」原註に。しどけなきものといふ儀也。源

さろき。むらさき。くろき雲哀也。風吹折のあま雲。明はな
る。ほとりのくろき雲のやうくしろうなりゆくもいとさ
かし。朝にさる色どかや。ふみにもつくりけり。月のいとあ
かき面に薄き雲いとあはれ也

霧は
川霧
さわがしき物
はしり火。板屋のうへにてからすのときのはくふ。十八
日清水に籠合たる。くらう成てまだ火もともさぬほどに。
ほかくより人のきあつまりたる。ましてとほき所人の
國などより家のぬしののほりたるいとさわがし。ちかき
ほどに火出來ぬといふ。されどもえはつかざりける。物見
はてし車のかへりさわらほど」
ないがしろなる物

女官ごものかみあけたるすがた。からるのかはの帯のう
しろ。ひじりのふるまび」
ことばなめけなる物
宮のめのさいもんよむ人。舟くら者ども。かんなりのちん
の舍人。すまひ」

百二十四段

兵衛輝卷にある詞とあるは非也。今削り
去りつ。万歳抄に無禮に侮むる心とある
もあたらす。ないがしろは無が代ト云フ儀
也。俗になき同様なごいふ意也
かみあけたる 髪を下すしてゆひたるさま
からるのかはのおび 唐給の革帯にや。凡革帯は徳名にて。其付たる金玉石角にて名をなす物也。或は白玉の帯。腰文帯。馬場帯。紐伊石帯。出
雲石帯。班甲帯。烏甲帯のたぐひ。順和名に委あり。桃花葉葉にもあり。唐給革帯可尋之
「増」万歳抄に云。からるなまき齒にしたるこ
ひじりのふるまひ 遺世の聖の進退は世にへつらふ心なき故にないがしろなるべし

ことばなめけ
なめけ無禮也

宮のめの 宮の部。巫祝の類也。巫祝は神
になれておのづから無禮の詞もまするに
や。又神にはこりてその祭文よむ詞。人に
無禮の事あるにや
かんなりのちん 公事根源云。雷鳴陣と云。

昔雷聲三度高く鳴侍れば。大將以下近衛の次將まで。弓箭を帯して御殿の孫座に候下て帝を守護し奉りし也。將監以下は皆笠笠をきて雨殿に侍
ふ。是を雷鳴陣と云。大内の慶芳舎をば雷鳴の盛さも中にや云々。猶四宮部に委し。舍人とは將監以下府生近衛等を云也。此時近衛の隨身威
勢によりて同無禮なる事あるにや
すまひ 七月相撲の節さて祭中にあり。其相撲人ごもを云也。昔勇力の者なれば。我方を頼て人を頼んと無禮なるにや

さかしき物
「増」賢の字なごの意にて。しんきものこと
いまやうのみとせし
むかしは三年に成て足たぬためしもある
に。今やうは賢なるべし
物のぐこひ出て
板のぐにすべし紙麻なごの類を請出るよ
おのが口をさへひきゆがめて きれぬ刀に
てりきみてたちさるさま也

百二十五段

「増」賢の字なごの意にて。しんきものこと
いまやうのみとせし
むかしは三年に成て足たぬためしもある
に。今やうは賢なるべし
物のぐこひ出て
板のぐにすべし紙麻なごの類を請出るよ
おのが口をさへひきゆがめて きれぬ刀に
てりきみてたちさるさま也

いもやうのみとせせ。ちこのりのりばらへなごする女ご
も。物のぐこひ出て。いのりの物ごもつくるに。紙あまた
かしかさねて。いとにふかたなしてさるさま。ひとへた
にたつべくも見えぬに。さる物のぐと成にければ。おのが

何の宮の其殿の
小野宮殿西宮殿などのたぐひにや
其人々めしたりけれど
其陰陽師其かんなきなまめしたれど
しれたるものそひし
愚痴なる男にそひわたる事
さかしき人を 賢き男をも押てさかしがる
さま。イ本をしへなどい賢き男をも後
見せんとの語

口をさへひきゆがめて。おしきりめおほかる物どもしで
かけ。竹うちきりなごしていとかうくしうしたてよう
ちふるひいのる事どもいとさかし。かつは何の宮の其殿
の若君いみしうおはせしき。かひのこひたるやうにやめ
奉りしかば。ろくおほく給はりし事。其人々めしたりけれ
ど。まゐるしもなかりければ。今に女をなんめす。御とくを
見る事などかたるもをかし。けすの家の女あるじ。しれた
るものそひしもをかし。まこといさかしき人ををしへな
どすべし

九十二段

上達部 公卿の事
「訂」万歳抄には。是より以下宮仕所はまての
五段は上にもいへるが如く上文九十七段し
たりがほなるもの前に入る
春宮大夫 百寮訓要云。可然公卿大納言以
上これになる。規模の官。名家の人など
はなるべからず。坊中の事は大夫執權
左右の大將 左近衛右近衛の大將。百寮訓要云。近衛府といふは。君を近くまもり奉る武勇の職也。又云。府ののみさ申は近衛の大將。執
柄三家の人々殊に執する職也。大臣などよりも大納言の兼官也。中納言の大將はまれなる事也。弓箭を帯する武官也。愚案大將相當の位從三位
權大納言 大納言をおほい物まうしのつかさどり。百寮訓要云。天子の喉舌の官也。下の申す事を上へ申。上の事を下へのぶる職也。環翠

上達部は
春宮大夫。左右の大將。權大納言。權中納言。宰相中將。三位
の中將。春宮權の大夫。侍從宰相

九十三段

軒云。近相といふは。丞相に亞で公事をかこなふ也。今には員四人。慶應二年大納言二人を省て中納言三人を置く。天長五年に正良二人の外に
中納言清原夏野を權大納言とす。寛平九年に又正良二人の外官家權に任ぜしめ給ふ。永觀元年始て四人權二人云々。近來は只權大納言權中納言
のまゝ
權中納言 中納言をなかの物申しのつかさどり。百寮訓要云。つかさどる所大納言に同。又任する人も大略同事也。環翠云。天平勝寶八年
藤永手を始て權中納言
宰相中將 參議中將也。兼官也。百寮訓要云。參議は陣の座にて物をよみ。右筆する器也。文才なくては任ぜざる也。參議には執柄も諸名家
の人々も任する也。中將は近衛のすけと申也。公達殿上人四位五位是に任ずる名家儲家などはならず。是も禁中警固の職也。弓箭兵杖を帶すべし
職原抄云。清華の人參議の時無之云々。環翠云。參議中將の始は清原夏野。文臣於津天長年中也。
三位中將 大臣子。若は孫にあらざれば不任之也。職原抄にあり。環翠云。三位中將の始は。藤時平。寛平二年十一月廿四日云々
春宮權の大夫 百寮訓要云。中納言以上の人これに任ず。大夫に同
侍從宰相 參議の侍從を兼たる也。環翠云。侍從は拾遺補問の官たるによりて。古くこれを執す。大中納言參議もこれを兼任す云々
君達は 執柄大臣などの息を申す。華族と
も清華といへり。近代は中院。閑院。花
山院を三家といふ。是清華也。三條西園寺。
徳大寺。これ閑院と云。其外菊亭。大炊
御門。久我。轉法輪等も清華也。但清少の
頃。いまだ三家などまだまらざりしこ
るなるべし
頭辨 藏人の頭にて。辨官を兼ねたるなり。百寮訓要云。藏人頭は殿上を管領す。惣して殿上の首首也。重代の人々君達と名家も殊に器量を辨
びて任ぜらる。之。辨は左右の大辨中辨小辨。權辨一人ありて七辨也。百寮訓要云。陣の右筆諸事奉行する器也。愚案辨官にて補するは清華也。
其器量にあらざれば。辨を去る。其故に頭辨を規模とす也
頭中將 藏人頭を兼ねたる中將也。職原抄に頭二人のうち羽林方に一人補之云々是也
權中將 別當也
四位少將 少將は相當正五位下なるに。四位に叙して其まゝあるを叙留といふ。叙留は是殊恩也。近代人こゝに叙留す。又四位の後任任又常事
也。職原にあり
藏人辨 此れ五位藏人にて。辨官を兼ねたる也。職原抄に。藏人に補して。辨官を兼ねる。これを至極の朝獎とすといへる也。獎は勳也
藏人少納言 五位藏人にて。少納言を兼ねたる也。少納言はすなわちのまうすつかさどり。環翠云。奏宣少事。故少納言といふ云々。百寮訓要。昭
勅宣下などの事をつかさどる。名家の人も儒者も難なる也。これ舊代の者任する也。故實なき人はならぬ事也。職原云。可然諸大夫花族又任之
春宮のすけ 百寮訓要云。春宮亮殿上の四位可然人任之。殊可辨器量之人
藏人の兵衛佐 五位藏人兵衛佐を兼ねし。兵衛は。百寮訓要云。これ禁中警固の官也。門外をかたむ。衛門府のいさし。又行幸行列の事をつかさ
どる。又宮中巡檢する官也

頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人の少納言。春
宮のすけ。藏人兵衛佐

君達は

法師は

弘安禮師二律師准五位。釋氏靈覽云。律師釋云。佛官晉解二字。一名律師。一字若律字也。寶鑑經云。具定十法名律師。下略。

法師は
律師。内供

女は

内侍のすけ。ないし

内侍のすけ。侍につける女官也。藤原道加云。典侍四人相當四位。掌同二侍。唯不得。奏請立傳。若無二侍。若得。奏請立傳。一侍。掌侍といふなり。藤原道加云。掌侍相當五位。掌同二典侍。唯不得。奏請立傳。云々。禁秘抄云。掌侍六人。正四人。權二人。權自上古有之。此内以二内侍。爲二宮。爲二禮。補日爲二二也。又曰。桓靈時。内侍二人直取之。只時典侍。傳之。授次。附二。連内侍。

みやづかへ所は

内。后宮。其御はらの姫宮。一品の宮。齋院はつみふかけれどをかし。ましてこの比はめでたし。春宮の御母女御

みやづかへ所は。女房のつづへまつるべき所也。禁中。一品の宮。親王は叙品のうち一品二品三品四品など申す。一位二位とは不申す。此は内親王の御事なるべし。齋院はつみふかけれ。經御をいひみて。中子染紙といへば。選子内親王賀茂の齋院におはせし時。思へどもいむまていはぬ事なれば。そなたにむきてねをのみぞなく。春宮の御母女御。或本に此次にくき物は。めものなまこ。そはあれなき事あり。然も前に出たれば。今此本にまかせて不川。[註]活本にも此の次にくきものありて。めもの男。そあれ云より。小一條院を。今内親といふ云々の一段あり。此抄には。この事上の二の巻に出たり。

身をかへたらん人などはかくやあらんとみゆるもの

買廿七段

御めのまに。一宮春宮などの御乳母なるべし。

后宮女御などの御前にて見にそひふしめる

さふしきの藏人に。藏人所の雑色也。必藏人になる物なり。禁秘抄云。雑色は本員八人。代々皆傳藏人云々。みこもたりし。賀茂臨時祭に。所の雑色。或所染など御事なかく事あり。江次第十云。於竹藪邊。二。番曲一所。雑色若衆身御事云々。外よりなりたるなどは。雑色ならで外の人の藏人に成たる也。

かはおび。平帯前時。かたつきたるまは。紋などなるべし。ひきは。こえて。[註]此調上の七巻八巻にもありて。七巻に委く。い。引きふくらしたるま。むらさきのしほも。うのまに。指貫は。今衣冠といふ。藤原なる。かこめ。くれなゐならずは。

しもおほえず

たゞの女房にてさふらふ人の。御めのとになりたる。からきぬもきず。もまだに用意なく。はくきぬにて御まへにそひふして。御帳のうちをる所にして女房どもをよびつかひ。つばねに物いひやり。文とりつがせなどしてあるさまよ。いひつくすべくだにあらす。さふしきの藏人に成たるめでたし。こぞの霜月のりんごの祭にみこともたりし人とも見え。君達につれてありくば。いづくなりし人ぞとこそおほゆれ。外よりなりたるなどは。おなじ事なれどさしもおほえず。雪たかう降て今も猶ふるに。五位も四位も。色うるはしう若やかなるが。うへの衣の色いとまよらにて。かはおびのかたつきたるま。どのあすがたにひきはこえて。むらさきのとしぬきも。雪にはえて。こもつりたるまをきて。あこめの紅ならずは。おどろくし。山をちぎ出して。からか

箱也。箱の下に着いた。紅の箱ならすは山吹色なまを出してん

ふさぐつ

増「製東抄云。史記之隠之政公卿川之。尋常其雨深澤時川之

めだつ。馬道也。縁つきの道也。桐壺の巻にえさちめだつたの戸なまし。ちとあり色々のきぬものこほれ出たるな

北のちん。拾芥云。朝平門北の陣さいふ殿殿陣云

すくまて

増「万歳抄。すぐればさありえいひきこして

后宮の御方の戸あきたれば見やるまどき用

意に冠の櫛を顔におほひて過る。ちもしろき禮儀なるべし

増「源按。此の脱い。此所はさしぬきなどのはころびしな女房達に見あなごられんがはつしきに。顔をおほふなるべし

たすぎ

増「直に過ぎゆくこと

くまにち。拾芥云。凶會日。正月庚寅。辛卯。甲寅。二月巳卯。乙卯。辛酉。下略。臨月ごに有凶會日は。曆に沙汰しあるすといへど。血忌日天火地火なごやうに世人として忌憚られ。ごに人にしられぬ物といふなるべし

五六月の夕かた云々

増「万歳抄云。こは芝くらへするごなるべし。成云さなへのさま秋

さぎさしたるに。風のいたく吹てよごさまに雪を吹かく

れば。すこしかたふきてあゆみくる。ふかづつ。はうくは。

なごのきはまを雪のいと白くかよりたるこそをかしけれ

ほそどのより戸いとどうおしあけたれば。御ゆどの

めだうよりかりてくる殿上人の。なへたるなほしとぬ

きのいたくはころびたれば。色々のきぬものこほれ出

たるをかしいれなどして。北のちんのがたぎまにあゆみ

行に。あきたるやり戸のまへをすらすとて。えいさひきこし

て。かほにふたぎてすぎぬるもをかし

たすぎにすぐる物

はあけたる舟。人のよはひ。春夏秋冬

こと人にしられぬもの

人のめおやのおひたる。くゑにち

五六月の夕かた。あさき草をほそいうるはしくきりて。あ

かぎぬきたると兒のちひさき笠をきて。左右にいとおほ

くもちて行こそ。すゞろにをかしけれ

賀茂へまうづる道に。女どものあたらしきをさしきつやう

なる物を笠にきて。いとおほくたてりて。哥をうたひ。おき

ふすやうに見えて。只何すともなくうしろさまに行は。い

かなるにかあらん。をかしと見るほどに。郭公をいとなめ

くうたふ聲ぞ心うき。ほとゝぎすよ。おれよ。かやつよ。おれ

なきてぞ。われは田にたつ」とうたふに。聞もはてず。いか

なりし人かいたくなきてぞといひけん。なかだかわらば

おひいかでおどす人と

驚に郭公はおとれるといふ人こそいとつらうにくけれ。

驚はよるなかねいとわろし。すべてよるなく物はめであ

し。ちごどもぞはめであからぬ

八月つごもりがたに。うづまさにまうづとて見れば。ほに

郭公をいとなめく
郭公といふ里語をなめけにうたふこと。なめくこと輕の字無禮などの心なり
ほとゝぎすよ。おれよ。かやつよ。おれなきぞ。我は田にたつ。是なめくきたふうたふ。おれよは日本紀に巳の字をおれよあり。かやつは。源氏玉葛に。すやつばらあり。宇治拾遺に。くやつさいへるにおなす。世俗にきやつさいふ詞云。おれなきぞ。は。已鳴て。哥の心は郭公と已通時不熱なきぞ。我らは田に立出て早苗さるごの心と。おれよかやつよは只おのれといふ事のさされ詞云

いかりし人かいたく
是も郭公の事にや。下旬は。中高菫生と。鼻すぢまほりてけ高く生付し童を。いかでかおどす人ぞと。人さきはかやうにうたひしと例のふくめ書きたる文跡なるべし

増「此脱いかあらんうけがたし。なかつたわらはおひいかでおどす人」と此詞誤字あるべし。いと解し難し

驚に郭公は云々

増「此云。此一段恐らくは錯簡ならん。既に上に見たり

弘義云。活本にも猶本文の如くあれど。こは誤て重複したるなるべし

うづまに。太泰云。拾芥云。廣隆寺。又

増「藤岡寺。藤川勝建立願師云々。猶の寺の縁起に委

なへさりし。いつのまに
「きのふこそ早苗さりし。いつのまにいなば
そよぎて秋風の吹」古今集

ほをうへにてなみなる
稻の穂を上にして持て田夫の曲居るこそ

百三十段

なめくぢ 袖懸。和名奈女久知
えせ板敷のはいき ましもなき板敷をはく
帯
殿上のまきし 合子にて引入合子なきまきし。
五器

た。物もなほえれば あまりおそろしきゆ
みなるべし。女の胸にておもしろきにや

百三十一段

出たる田に。人おほくてさわら。いねかるなりけり。さな
へどりしか。いつのまにとばまこと九七。けにさいつころ賀茂
まの新しい折敷のやうなる笠をきていへる所の事
にやうづとて見しが。哀にもなりにける哉。是は女もまじ
しゆま
らず。男のかた手にいとあかきいねのものとば青きをかり
もちて。かたなか何にかあらんもとをきるとまのやすけ
に。めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。いかでさすら
ん。はさうへにてなみさる。いとをかしう見ゆ。いはりのさ
まことなり
いみしくきたなき物
なめくぢ。えせ板敷の帯。殿上のがうし
せめておそろしき物
よるなる神。ちかきとなりぬす人の入たる。我すむ所に
入たるはたゞ物もおほえねは何ともしらす
たのもしきもの

百三十二段

すほうしたる 作法。隠察など修するこ
思ふ人の心ちあしき比
我夫なほ煩ひて便なき比。其友などの頼
しきか。たのもしくいひ慰る
物おそろし折の
なまなき子も。女なごの心をいふなるべ
し

いとほしきや思ふらん
何ともおほはさるやらんさふくめし願
ある人のいみしう時に
是より前の詞をうけて世にありし事の物
たりをいへるにや

かいるなむらひにいひてはなせ
うらめしき中には。いひて解のため思ふ事
もあれがしなほに思へなご。うののろひ
しめさなごのれたがりていふこ
れうのうへのはま
稷の装袴
すはうがされ 夏の下腹を藤芳の下がされ
ま名付。すはうにて黒むはし。れを染む。
禁色を隠たる人等若し之を桃華葉にあり
くるはんび 黒牛背。桃華葉。夏は生の殿文
三班たすきにて染む。藤装袴はうす物。
た。みて世にま

こちあしき比。僧あまたしてすほうしたる。思ふ人の心
ちあしき比。まことになのもしき人のいひならさめたの
めたる。物おそろしき親ごものかたばら
いみしうまなてふむことりたるに。いと程なくすまぬむ
この。さるべき所なごにてまうとにあひたる。いとほしと
や思ふらん。ある人のいみしう時にあひたる人のむこに
なりて。一月もはかどくまうもこでやみれしかば。すべて
いみしういひさわぎ。めのとなどやうのものは。まがく
しき事どもいふもあるに。其かへる年の正月に藏人になり
ぬ。あましうかよるなからひにいかでとこそ人は思ひた
めれ。などいひあつかふは聞らんかし。六月に人の入講志
玉ひし所に。人々あつまりてまくに。この藏人になれるむ
この。れうのうへの袴すばうがさね。くろはんひなどいみ
しうあさやかにて。わすれにし人の車の。とみのをに。は

世の中に拙い云々

【寛】弘云。是より以下次の段うれしき物とある前までの數十行は活本になし。然して活本には左の敬句あり

「人のむすめにいふべきにもあらず。みやつかへなすとも。年わらう世の中いたうくつるぎなれざらんはなを」

人ににくまれん事こそ心うき物にてあるべけれとの心云々 然共自然には傍輩にも親類にもよく思はるゝさ。よくも思はれずにくまるゝ物も有さ云々

んびのをひきかけつばかりにてるたりしき。いかに見るていふ此むこのちかいるを女の何と見るぞと云々
らんと車の人々も。まりたるかぎりはいとほしがりしき。
こと人どもも。つれなくるたりし物哉など後にもいひき。
猶男は物のいとほしき人の思はん事はまらぬをめぐり。「世の中は猶いと心うき物は。人ににくまれん事こそあるべけれ。たれてふ物ぐるひか。あれ人にさ思はれんとは思はん。されどしせん。宮づかへ所にも。親はらからの中にても。思はるゝおもはれぬがあるぞいと佗しきや。よき人弟に思はるゝがよき事なむ云々
の御事は更也。けすなどのほども。親などのかなしうする子は。めだち見たてられて。いたはしうこそおほゆれ。見るかひあるは。こととり。いかし思はざらんとおほゆ。ことなる事なきは。又これをかなしと思ふらんば。親なればぞかしと哀也。おやにも君にも。すべてうちかたらふ人にも。人に思はれんばかりめでたき事はあらじ。男こそ猶いと有

いときよげなる人を 美人を見捨て悪女をもつ男もあるがやよし
及ぶま下らんきはをだに 身に相懸てぬよき人をも美人と思はんをばしひても思ひかけよと云々
人のむすめまだみぬ人 長恨歌云。楊家有女初长成。養在深閨二人未識
かつ女のめにもわるしと 彼美人を捨て悪女をもつ男のあやしき事をたちかへりいふ也。決前生後の嗣なるべし返事はさしちに 男の返事は賢けにする物からと云々

おほやけはらだらて 外の見さく人までも腹立心云。帯木巻にもしはあやなきおほやけはらたいたしくとあり
【寛】弘云。紫日部。するに心やましくおほやけはらさかよからぬ人のいふやうににくこそ思ひたまへられしか。また榮花見はてぬ夢。けにやおほやけはらたいたれけるなとあり
本居翁云。おのれあつからぬ人のうへのこさを。かたはらより見きて。はらたいたしう思ふと云。俗にいふ法界りんきの法界此の大やけにあたり
露心くるしきを思ひ 心ぐるしく哀なる事を露も思ひしらぬと云

あやしき事あるまいふ云々 ものにあらせよ
がたくあやしき心ちしたる物はあれ。いとときよげなる人をすてゝ。にくけなる人をもたれるもあやしかし。おほやけ所にいりたちするをどこ家の子などは。あるが中によからんをこそばえりて思ひ給はめ。及ぶまじからんきはをだに。めでたしと思はんを。死ぬばかりもおもひかくれかし。人のむすめ。まだ見ぬ人などを。よしとときよげをこそはいかでともおもふなれ。かつ女のめにもあるしと思ふを思ふは。いかなる事にかあらん。かたちいとよく心もをしき人の。手もようかき歌をもあはれによみておこせなごするを。返事はさかしらにうちする物からよりつかず。見捨られし美人のさま云々
らうたけに打なきてるたるを見捨ていきなどするは。あさましうおほやけはらだちてけんぞくの心ちも心うく見ゆべけれど。身のうへにては露心くるしきを思ひしらぬよ。萬の事よりも情ある事は。男はさら也。女もこそめて

なげの詞なれどせちに心にふかくいらねど
 さして思ひいたる事ならねども。情しき
 詞を除くにもいふべき事さの心之
 いかで此人に思ひしりけりとも。彼陰こそ
 になさけしくいひたる嬉しさを思ひ知たり
 さいふほごの心さしたる見せたると思ふこそ
 必思ふべき人さふべき人は
 前段はいとほしきも哀共さしていふべき人
 ならぬが情しく陰にていひたる也。こゝは
 必思ふべき故も有さふべき故もある人
 の事之
 さりわかれしもせず
 もさより思ふべき人さふべき故もある人な
 れば。たさ思ひ訪へることも取分て嬉し
 さま思はれずと
 人のうへいふをばらだつひさこそ。此段は
 坐興には人の噂いふ事もあるな。人の上い
 ふは一向によからぬ事と聞取立人はわりな
 く由なき事なれふと
 いかでかはあらん。我身を置て人の上をい
 ひたき物はいかでかはあらん。次の詞を
 いはんとて先いふことばと
 我身をさしおきて
 我身にも悪き事ある物を。それをさしおき
 てさやうに人の上をもさしおきいひたき物
 はあらん。畢竟坐興にていふ物を。一
 向にさし腹立はわりなきこといふこと
 されどけしからぬやうにも
 然ども人の噂をいふはけしからぬやうにも
 有さ。此段は坐興ながら人の噂はよる
 しからぬの事をたぢかへりいふと

たくおほゆれ。なげの詞なれど。せちに心
 にふかくいらねど。いとはしき事をいとはし
 とも。あはれなるをほけい
 かに思ふらんなどいひけるを。つたへて聞
 たるは。さしむ
 かひていふよりうれし。いかで此人に思ひ
 しりけりとも。必思ふべき人と
 も見えにしがな。つねにこそおほゆれ。必
 思ふべき人さ。さるべき事なれば。とりわ
 かれしもせず。さ
 もあるまじき人のさしいらへをも。心やす
 くしたるはう
 れしきわざ也。いとやすき事なれば。更
 にえあらぬ事ぞか
 し。大かた心よき人のまことにかどなから
 ぬは男も女も
 ありがたき事なめり。又さる人もおほか
 るべし。人のうへ
 いふを腹だつ人こそいとわりなけれ。い
 かでかはあらん。我身をさしおきて。さ
 はかりもどかしくいはまほしき物
 やはある。これどけしからぬやうにもあ
 り。又おのづから
 聞つけてうらみもぞする。あひなし。又
 思ひはなつまじき

一三三

又おのづから 又彼噂はれし人の自然は
 聞付候る事もあるべければ。坐興にも人の
 噂は無愛事と
 又思ひはなつまじきあたり
 又たさ思ふべきまひ有ても。え思ひ捨見
 はなつまじき人の事は。いさほしや。人さ
 してはさやうの事もなごかならん。なご
 了解し思ひさければ。噂にそしりたき事も
 念ふらへていはぬ物をさ也。やは助字と
 此段は思ふ人の事は陰うはさにもいはず。
 只なる人のうへを噂にはいふ事なれいへ
 きたになくば。さやうにだになくば。思
 ひはなつまじき故だになき人の上ならば。
 坐興にはいひ出て笑ひもせん物をさ。是
 は亦人のうへいふをばらだつ人のわりなき
 事を立かへりいひたる詞と。こゝもさの詞
 よく心なごめて見るべし

あたりは。いとはしきなど思ひとけはねん
 じていはぬをや。あたりに
 さだになくはうちいでわらひもしつべし。
 人のかほほど
 りわきてよしと見ゆる所は。たびことに見
 れどもあなを
 かしめづらしとこそ覺ゆれ。系などあまた
 たび見ればめ
 したる事
 もたしづかし。ちかうたてる屏風の系な
 どは。いとめでた
 近くてたぐくみる故と
 けれども見もやられず。人のかたちはさ
 かしうこそあれ。
 人のかたのたさへ
 にくげなるでうどの中にも。一つよき
 所のまもらるよ。
 形の悪き人も又一所は人のこのむ所の
 あらんとみづから思ふ心
 見にくきもさこそはあらめと思ふこそ
 わびしけれ。一本には
 見にくき物にも一所はよき所ある心と

うれしき物

又ひさつを見て
 一の巻を見て。日本紙に一巻をひさつ
 きにあたるまきとむむ
 二見つけたる。ふたつ見つけたるまきとむむ
 第二の巻の事。こゝにて句なきるべし
 「二」の詞「ゆかしうおほゆるもの」がた
 りの二見つけたるまきを。万載抄には「ゆ
 かし」のみ思ふがのこり見いでたるまきと
 わり。

まだ見ぬ物がたりのおほかる。又一つを
 見ていみしうゆ
 かしうおほゆるものがたりの。二見つけた
 る。心おどりす
 るやうもありかし。人のやりすてたる
 文を見るに。おなじ
 つゞきあまた見つけたる。いかならんと
 夢を見て。おそろ
 しとむねつふるに。ことにもあらずあは
 せなごしたる

我に御ちんとあはせて
人々あまたの中に。我に貴人の御目を見合
せておたりきかせ給ふ

うちきいなきに 四書の手よし徹書記の
既にあり
みづのうへには 清少の身には歌ほめ
られし事はなけれど。解しおらんさしは
おらんこと

このいひたりし人をかしき
此書を見てこそいはれけめ思ふにゆにて
おもしろきこと

いとうれし。よき人の御前に人々あまたさふらふ折に。昔
ありける事にもあれ。今きこしめし。世にいひけることに
もあれ。かたらせ給ふを。我に御覽じあはせてのたまはせ。
いひきかせ給へるいとうれし。とほき所はさう也。おなじ
都のうちながら。身にやんごどなく思ふ人のなやむをき
いて。いかにくとおほつかなく歎くに。おこたりたるせ
うそこえたるもうれし。思ふ人の人にもほめられ。やんご
どなき人などの口をしからぬ物におほしの給ふ物のを
り。もしは人といひかはしたる哥の聞えてはあられ。うち
きくなどははめらる。みづからのうへにはあだしらぬ
事なれど。なほおもひやらる。いたううちとけたらぬ
人のいひたる古き事のしらぬを。聞出たるもうれし。後に
書物の中より其古事を見付たる
物のなかなどにて見つけたるはをかしう。たう是にこそ
ありけれ。とかのいひたりし人をかしき。みちの國がみ。

哥の上句下句。源氏早敷巻に。はかなき
ことおもも末をとりていひおはしきあり
さみに物もさむる見出
いひひ出たる。急に物を尋るに其有所を
知たる人のいひきかせし

哥合せ何れと
あらしふ心
【訂】此所の詞「物あはせ何れとせむ事」
かちたるいひでうれしからざらん」とあ
るを。異本には「物のなりに衣うたはせて
いかならんと思ふにきよらにてえたる」と
あり

いみしう我はと思ひて
我は人にたばかりれと賢がほなる人をた
ばかり得たるがうれしき也。たはふれの
たばかり事
【訂】こも。又いみしうより。男はまさりて
うれしとあるまでの数十字を異本には左の
如くあり
「又もおほかる物のけつ。日比月比しるきこ
とありてなやみわたるが。おこたりぬるもう
れし」
女ごちより。女同志の中にて其友の女を
たばかりしよりは。男もたばかりしはうれ
しきこと

是のたうは必せんすらん
其たばかり折に。かたばかりの人々のたばかり
らる。人のうごころごせんと思ひしに。かた
うごせざりし心なるべし。たうは紙の字也。
字紙云。藤原也親也又相助藤原非為藤云々

白きまきし。たうのも。しろうきよきはえたるもうれし。
はづかしき人の哥のもとすとひたるに。ふとおほえた
る。われながらうれし。つねにはおほゆる事も。又人のと
ふにはきよく忘れてやみぬる折ぞおほかる。とみにもの
もとむるに見出たる。只今見るべき文などをとめうし
なひて。萬の物をかへすく見たるに。さがし出たるいと
うれし。物あはせ。何くれといどむ事にかちたる。いかで
かうれしからざらん。又いみしう我はと思ひてしたりが
ほなる人はかりえたる。女ごちよりも男はまさりてうれ
し。是がたうは必せんすらんとつねに心つかひせらる。
もをかしきに。いとうれなく何とも思ひたらぬやうにて
たゆめ過すもをかし。にくきもの、あしきめ見るも。つみ
を脱ふは思へんと思ひながら。おこたりたるせ
はうらんと思ひながらうれし。さしうしむすはせてをか
しけなるも又うれし。思ふ人は我身よりもまさりてうれ

「増」或云。たうはたふにて答なるべし。註は
 甘心せず
 流接。燕の字。たうのつなにてよし。落
 くほにもあり
 御前に人々所もなく 皇后定子の御まへに
 近あけてちかくめし入
 なみわし人々の中をあけて清少をさほして
 めしよせし
 御まへに入々あまた
 是より定子の御まへに侍し時の事を查し
 さる。証すまひ

命さへをしくなん
 前にかた時あるべき心ちもせでさへなるに
 對して。猶いつまでも世にならへたき
 こと
 おぼすて山の月は
 清少の心は紙盛にこそ慰むに。何人かおほ
 捨の月になぐさむむぞの御説育。わが心
 なくさめかれつさらしなやをばすて山にて
 る月をみて

いけてもまばしあり
 紙を大切に思ふがらに遺世の心もやむこと

し。御前に人々所もなくあるに。今のほりたれば。すこ
 しとほき柱のもとなどなるを御らんじつけて。こち
 こと仰られたれば。道あけて近くめし入たるこそうれし
 けれ。御前に人々あまた物仰らるゝついでなどにも。世の
 中のばらだゝしうむつかしうかた時あるべき心ちもせで。
 いづちもくゝしうせなはやと思ふに。たゞの紙のいと
 しろうきよらなる。よき筆。白きまきし。みちのくに紙。など
 えつれば。かくてもまはしありぬべかりけりとなんおほ
 え侍る。又かうらいべりのたゞみのむしろあきうこまか
 けて見れば。何か猶さららに此世はえ思ひはなつまじと。命
 さへをしくなんなると申せば。いみしくはかなき事も慰
 むなるかな。おぼすて山の月はいかなる人のみるにかと
 わらばせ給ふ。さぶらふ人もいみしくやすきぞくさりの

すゆるなる事を思ひて
 前にも清少の里居せし事あり。其比にや
 二十つ一みに
 「訂」流接。二十は二帖をいながらにせるより
 の誤りか。
 弘云。或は二重に包むことにて。即におち
 ぎ假名にのきしを誤りたるにもやあらん
 きこしめしおきたる事ありしは
 清少の紙に命のぶると聞召おかれてまわち
 ならるゝこと
 わるめれば壽命短もえかくなまげにこそ
 前に清少は白く清なる紙に慰む事をいひ
 し故。此紙さはあられば命のぶるなぐさめ
 にもなるま下さこの心。壽命短は。延命
 の祈禱の經なれば
 かけまくもつこし
 細流云。かけて申さん恐あれどもこの心
 之。掛長カケマカシキ命の詞云
 々。哥の心は紙を神にそへて此のみのしる
 しに千年も生んさや。主君の給へる紙なれ
 ばかけまくもかたづけなしとはいふこと

あまりにや
 あまりに其加せそらしき體に

いのりかなとらふ。さてのちにはとへて。すゞろなる事を
 思ひて里にある比。めでたき紙を二十つ一みにつゝみて
 給はせたり。仰事にはとくまるれなどのたまはせて。是は
 きこしめしおきたる事ありしかばなん。わるかめれば。壽
 命短もえかくなまじけりこそと仰られたる。いとをかし。む
 中せし事は忘たるにこそ
 けに思ひ忘たりつる事を。おほしおかせ給へりけるは。な
 はたゞ人にてだれをか。ましておろかならぬ事にぞあ
 るや。心もみだれてけいすべきかたもなければ。たゞ
 かけまくもかしてきかみのまるしにはつるのよはひに
 なりぬべきかな
 直には申さるなり
 あまりにやとけいせとせ給へてまらせつ。大はん所
 のさうしぞ御使には來たる。あきまひとへなごぞとらせ
 て。まこと此かみきつうしにりつりて。もてなふらに。
 使に候
 句 案の二つにの
 ちつかしき事もあはるゝ心さして。さかしよう心のうきも

たいみ
是も清少の意分に應じて后宮の賜へるなるべし

御座さいふたいみ
貴人のしがるい盛さいふ心と
心のうちにはさによあらん
后宮の賜へると清少の心には思ひしこと

又いひに來なん
これへまゐらするたいみにあらすさいひん
宮のほざりにあないし

后宮の御方なごに問うかひまほしけれ
ご。誰かやうのわまはせんたは后宮の御
しわざならんご

【訂】「宮のほざりにあないしにまゐら
せまほしけれ」とあるを。イ本。其處抄
には「まゐらばうたて有へし」と思へばご
あり
かゝる事なんある
清少より。盛して來りし事を后宮の御心さ
しつら問にやごごごばご
さる事やけし見給ひし
后宮の陛下されし御氣色は見給はずごご

のちにもご
後にも沙汰し給ふなごご

おしひししるくなごし
前に心のうちにはさによあらんと思へご
もあり。おほせ事なかりさいみしうなごし
なごいへる首尾なり
まごひしほごに 其使はまごひ隠れて歸り
しご

關白殿 后宮の御父。中關白近衛公也
法興院 二條の北極の東。兼家公の家也。
兼家公隠し給ひて後近衛公一に釋泉寺を
たて給へり
女院 四條院の後。一條院の御母。東三條
院也
二條の宮へいらせ給ふ
法興院すなはち東二條也。一に后宮の御
所なかりに作りしを二條の宮といふなるべし

おほゆ。二月はかり有て。あかぎぬきたる男の。たゝみき
もてきてこれといふ。清少のきこむるごあれは誰ぞあらはなりなど物はし
たなういへば。内衆などの御之使はいにしごごさしおきていぬ。いづこよりごごとはすれ
は。まかりにけりごごごりいれたれば。こと更に御座とい
ふたゝみのさまにて。かうらいなごいごごよら也。心のう
ちにはさによあらんごごもへご。猶おほつかなきに。人ご
も出しもごごめさすれごごせにけり。あやしがりわらへご
つかひのなければいふかひなし。所たがへなどならは。お
のづからも又いひに來なん。宮のほとりにあないしにま
ゐらせまほしけれど。猶たれすごるにさるわざはせん。仰
事なめりごいみしうをか。二日はかり音もせねば。うた
がひもなく。后宮の女房ご左京のきみのもご。かゝる事なんある。さ
る事やけしき見給ひし。忍びてありごごの給ひて。ごごると
見えずは。かく申たりごもなもらし給ひごごいひやりた

るに。左京ごごごいみしうかごごせ給ひし事也。見しらせしさいふなごごゆめくごごろがきご
えたるごごなく。のちにもごあれは。されはよご。おもひしも
しるくをかしくて。文かきで又みそかご御前のかうらん
に清少よりさなく后宮の御所にもたせやりしごおかせし物は。まごひしほごに。やがてかきごごとしてみ
はしのもごごにおちにけり」
關白殿二月十日のほどに。法興院の釋泉寺といふ御堂に
て。一切經くやうぜごせ給ふ。女院みやの御まへも。おは
しますべければ。二月朔日のほどに二條の宮へいらせ給
ふ。后宮の入御深たるご夜ふけてねふたくなりししかは。何事も見いれず。つご
めて日のうらゝかごごし出たるほどにおきたれば。いと
しろうあたらしうをかしけにづくりたるに。みすよりは
じめてきのふかけたるなめり。御しつらひ獅子ごご大な
ごいつのほどにや入るけんごごをかしき。櫻の一丈はか
りにていみしう咲たるやうにて。みはしごごにあれば。

【訂】「宮のほざりにあないしにまゐら
せまほしけれ」とあるを。イ本。其處抄
には「まゐらばうたて有へし」と思へばご
あり
かゝる事なんある
清少より。盛して來りし事を后宮の御心さ
しつら問にやごごごごばご
さる事やけしき見給ひし
后宮の陛下されし御氣色は見給はずごご

つくりたるなめり

新古今雜上。後冷泉院御時御前にて。新成
櫻花「いへる心をさるるを東野州既に作
花の事也云々」

花の匂ひなききたるに。おとらす
花のほのあけきを匂ひいふ。「朝日影句
へる山の櫻花」こよめるもおな下心之
こい、なごいふ物の

小察もなごぼらて。そこに二條の宮を假に
つくられたれば。さ
けちかくをかしげなる
かりの御所なれば。さのみけ高くはあられど
おもしろげなるさま也

只御なほしに。かされてぞ
直衣も直衣布袴とて。下駄を用らるる事あ
れど。是は只直衣斗なればなるべし

「町」原本には只なほしとありて御の字なし。
イ本の有に從へり
かたも入りうもん

堅紋立紋也。イ本かたも入りうもんなど其
折は此八丈さいふたけたすはここになかり
き。あるさきりきたれば云々
「町」弘云。活本にも此のイ本の如くあり

なへすきて 並居て

愚家々のむすめぞし

何もよき家の子とぞさる

よくかへりみて云々

無にいたはりつゝ。ひ給へるの心也。陶淵明
彭澤の令となりし時。其子に「力を送りて
いひつゝはす書に云。今道此方。助汝薪水
之勞。此亦人子也。可三替過之云々。この心
て。面白もの給へるにや

いかにいやくもものなしみせさせ給ふ宮とて
后宮をさしての給ふ。面白もの。たはふれ
也。前段に后宮より清少に紙たみみな給
へりし事を書て。ここに此御たはふれを
く事。心づかひ面白し。史記陳平が傳に。
其あによめ陳平をにくみて悪口して兄伯に
逐棄られし事を書て。後に陳平を慶する者。
高祖に其嫂を盗りさいひし。爲の罪せし
文法也

何かしりうごきには聞えん
かやうの流儀を何かは陰ごきにはいはん。

御前にてこそいはれさの戲也

式部のせう何かし

動物云。源則理(正暦)正月十三日式部。前
大納言重光卿四男。正暦四年歳八十九。六
年叙。中宮御給

いとどうききたるかな。梅こそたゞ今さかりなめれと見
ゆるは。つくりたるなめり。すべて花の匂ひなききたる
にかとらず。いかにうるさかりけん。雨ふらはまほみなん
かしと見るぞ口をしき。こいへなどいふ物のおほかりけ
る所を今つくりさせ給へれば。木だちなどの見所あるはい
まだなし。たゞ宮のさまぞけちかくをかしけなる。殿わた
らせ給へり。あをにびのかたもんの御さしぬき。櫻のなほ
しに。紅の御ぞみつばかり。只御なほしにかさねてぞ奉り
たる。御まへよりはじめて。紅梅のこきうすきありもの。
かたも入りうもんなどあるかぎりきたれば。たゞひかり
みちて。からぎぬはもえぎ。柳。紅梅などもあり。御前に
させ給ひて。物など聞えさせ給。御いらへのあらまほしさ
を。里人にわづかひのぞかせはやと見奉る。女房どもを御
覽じわびして。宮に何事をおほしめすらん。こゝらめでた

二月朔日なれば
うらはしき事
作花なれば
道隆公云
前二註
めさせたる云

あるさある人みな若したる云
后宮の御まへ
后宮の御前にて

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

女房に面白ものたはふれ給ふ
女房に面白ものたはふれ給ふ

あなたにまかりて行くの事物し侍らん
帝の御文を交君の前にて后宮開きかれ給へ
ば。使の跡事いひ付んさて殿下たち給ふ心
遣ひ面白し

御ぞのおなごいろ
后宮の紅梅のきぬさのみのいろと

猶かうしおしはかり

后宮の御ありままかく美富ならんとは。元
推並すま下ささ。前に里人にわづらひの
ぞのせげやさいふる首尾と

あつさみゆるさ給へ
後君御酒御免候へん

三の御まへはみくしげ殿

殿下の三女。后宮の御妹。御殿殿別當な
るべし。拾芥云。御殿殿在。三殿殿中。以
上。女房。御別當。三々

うへなごまへん心にて

三の君おほきに物くしければ。うへつ
つたなご申へさには似合しきと也
増うへは敬語。貴婦人を何々の上といふ
と源氏に葵上紫上などいふが如し

あらずもてなさせ給ふ。御よういなごぞありがたき。すみ
のまより女房しとねごし出で。三四人御几帳のもとに
たり。あなたにまかりて行くの事物し侍らんとてたうせ
給ひぬるのち御文御らんず。御返しはこうはいの紙にか
せ給ふが。御ぞのおなご色に匂ひたる。猶かうしもおし
はかりまあるらする人はなくやあらんとぞ口をしき。けふ
はこと更にとて。殿の御方よりるくは出させ給。女のさう
なれば紫のちきり。細長前註女の眼
ぞくに紅梅のほそながそへたり。さかなとあれば。あは
さまほしけれど。けふぞいみじき事の行幸に。あが君ゆる
させ給へと大納言どのにも申てたちぬ。君達などいみし
うけさうし給ひて。こうはいの御ぞもおとらじとさき給へ
るに。三の御まへはみくしげ殿也。中のひめさみよりのお
ほきに見え給ひて。うへなごまきこえんにぞよかめる。うへ
もわたらせ給へり。御几帳引よせて。あたらしくまゐりた
北方

いふせき心ちす 清少も新巻の内にて北の
方の見え給はざりし

の日のまらそく願

女房達の一切経供養の日の出たし願
願合する

まろは何が只あらんにまかせたな あまり
にいごみて一向に手をつけぬやうにいふま
ま。我は何が用意せん只あるにまかせん
と云て。たゆめて結縛せん心なり

かゝる事にまかづれば
當日の用意のために退出すれば。后宮も
いさま給はると

御前人すくなくひはねばいよし

【訂】イ本には「御前人すくなくいよし」と
あり

弘接。こは原本さイ本さほうらうへの相異
なれど。此所は本のまゝの方よろし

なきてわかれんころに
拾遺集「まらはな露にぬれたる色見れば
なきてわかれし人ぞいひしき」

引たふし
【訂】原本に「たふし」とあるは誤。上の九巻に。
おほきなる水もたふれ」又此の下にも「た
ふれぬべく。」又下の十一巻にも「たふれぬ
たふれす」さあるが如くたふさあるを正しけ
れば改めり

る人々には見え給はねは。いふせき心ちす。さしつとひ
で。かの日のさうぞく扇などの事をいひあはするも有。又
いごみかばして。まろは何が只あらんにまかせてをなご
いひて。例の君などにくまると。よごりまかづる人もおほか
り。かゝる事にまかづれば。えごごめさせ給はず。うへ日
々にわたりよるもおはします。君たちなどおはすれば。御
前人すくなくひはねばいよし。内の御つかひ日々にな
る。御前の櫻色はまさらで日なごにあたりてしほみわ
るうなるだに侘しき。雨の夜るふりたる。つとめていみ
しうむとく也。いとくおきて。なきてわかれんかほに心
おどりこそすれといふをまかせ給ひて。ゆに雨のけはひ
しつるぞかし。いかならんごておどろかせ給ふに。殿の御
かたよりさふらひのものども。けすなご来て。あまた花
のもとにたゞよりによりて。引たふしとりてみそかにい

まだくちからんにされき
作花に雨のいらば花預て見にくからんを
思召て。人見ぬほどにされき仰付られしな
るべし

いさなをしくて 花のあしくなりしをさら
さらたまふを感ずる心
いはばいはなんぞされきみか事を思ひたるに
や

後撰「山守はいはいはなん高砂のなのへ
の櫻をりてかさいん」是は紫性の哥也。兼
澄の集にもある可勘也。此哥の心を
ひて入はさむるさもならんさて引たなり
ゆくかこの儀

いかに見るかひなすらしき見て
「紅」イ木には「いかにびんなきわたらならま
しと思ふさもつくもいはばいさあり

あかつきの人
「紅」万歳抄には「あかつきに花をす人」さあ
り

きて。まだくちからんにされきとこそおほせられつれ。あけ
過にけり。ふびんなるわさかきとくくとたふしとるに。
いとをかしくて。いはばいはなんぞ。かねずみが事を思ひ
たるにやとも。よき人ならはいはまほしけれど。かの花ぬ
すむ人はたれぞ。あしかめりといへば。わらひていととに
けてひきもていぬ。猶どの御心はをかしうおはすかし。
くきともぬれまろかれつきて。いかに見るかひなから
ましと見て入ぬ。かもんづかきまゐりて。御かうし参りと
ののりの女官御きよめまゐりはてし。おきとせ給へるに。
花のなければ。あなあさまし。かのなははいづちいける
と仰せらる。あかつきぬす人ありといふなりつるは。猶枝
などをすこしをるにやとこそきつれ。たがしつるぞ。見
つやと仰らる。さも侍ず。いまだくちからんてよくも見侍らざ
りつるき。しろみたる物の侍れば。花ををるにやとどうしろ

いでよも侍らし
いでよも殿の取すくまを給ふには侍ら
し。春風こそ花の怨敵なれば侍つらんと
こ。やさしき詞なるべし
ふりにこそふるなりつれ
拾遺「入丸」我がこころや雲の中にもせもふ
らん雨もなみだもふりにこそふれ「雨は
りされり
めづらしき事ならねど
此后宮の御ありさまのめでたきをほむるは
めづらしけれ。又此本哥の事な
ふ。此古歌めづらしけれ。

我よりまきにこそ
殿下しちざりけるよと仰せられねども。清
少見付ぬ已前より殿には御存知ならんと思
ひしこと「驚のなくれなきけ山ふかみ我
よりまきに春はしりけり」詞はかりなされ
り。此歌新拾遺ニ思見。風雅ニ源清明

さりげなる物を 探は人の引たふしける物
な

めたさに申侍つると申す。さりとともかくはいかどかどらん。
殿のかくこせ給へるなめりとしてわらはせ給へば。いでよ
も侍らじ。春風のして侍りなんどけいするを。かくいはんと
しといはんとて殿のせまを給ふ事を隠すかこ
てかくすなりけり。ぬすみにはあらでふりにこそふるなり
の御心
つれと仰らる。よめめづらしき事ならぬといみしうめでた
き。殿おはしませせは。ぬくたれのあさがほも時ならずや御ら
んせんと引いらる。おはしませすまよ。かの花うせにける
は。いかにかくはぬすませしぞ。いざたなかりける女房達か
な。しらざりけるよとおどろかせ給へば。これぞ我よりさ
きにとこそ思ひて侍るめりつれと忍びやかにいふを。い
ととくきつつけさせ給ひて。さおもひつる事を世にこと
人出て見付じ。宰相とそここのほどならんとおしはかり
つとていみしうわらはせ給ふ。さとりけなる物を。少納言は
春かせにおほせけると宮の御前にうちあさせ給へるめで

そらごをばせ侍と
殿の仰にて候のなくなりしを清少知な
ら。春風のせしならんといひしはそらご
を風におほせしこと
今は山田もつくるらん
春風におほせし事の味吟云。實之集二山田
さへ今はつくるをちる花のうごこは風にお
ほせざらん
まばかりいましめつる物を
くらからんほごに花をされ人に見付られな
と仰付し物をさす。前にまだくらからんに
されごそ仰られつれ。明過にけり。不便
なるわざ候といひし首尾
つるせく
【訂】原本にはうらまきあり。古木井に異本
にうらまきあるをよしとすべし。源氏繪
木の巻にもうらまきといふ詞あり
こわつ君
【増】源接。こわつ君は幼稚の時の尊稱にてた
れがうへにいふこと。うつは物語としがけ
の巻にも。うらまきのことをはしめめのはご
はこわつ君といへり。又卷十一に。此若君の
名を松君といへり
それはいさく見て
小若君の詞之。清少とく見付てきなり
爾にぬれたりなご。前になきて別心願に心
おこりこそすれ清少いひし事
さて八日九日のほどに
前に二月初日の程。二條の宮へいらせ給ふ
ごあり。其二月の八九日比也。此一切經供
養は十日比なれば。后宮の御供の用意に清
少退出する
花の心開たりやい

后宮の御白ごのの給ふ詞
たし。そらごをばせ侍も候。今は山田もつくるらんと
うちずんせとせ給へるもいとなまらめををかし。こてもね
たく見付られにける哉。さばかりいましめつる物を。人の
所にかゝるしれものゝあるこそこのたまはず。春風はそ
らにいとをかしようもいふかなとずんせとせ給ふ。たごこ
とにばうるせくおもひより侍つかし。けごのさまいか
に侍らましとてあらはせ給ふを。こわか君。されごそれ
いととく見て。雨にぬれたりなど。おもてふせなりといひ
侍りつと申給へば。いみしうねたからせ給ふをかし。さ
少の見たれば
て八日九日のほどにまかづるを。今すこし近うなしてな
ご仰らるれご出ぬ。いみしう常よりも長閑にてりたるひ
るつかた。花の心開けたりや。いかういふこのたまはせな
れば。秋はまだしく侍れご。よに此たびなんのほる心ちし
侍るなど聞えとせつ。出させ給ひし夜。車の次第もなくま

日の服に付て。し。雨にしほれし花の心も
開けたるごこと。古詩の詞なるべし道而可
考
秋はまだしく侍れご
是亦かの花の心開けたりといふ古詩の詞な
るべし
車の次第もなく
人々の品によりて乗車の前次第あるべき
を女房の急ぎて我まきにとのるまき
わらひあひて。可然上藤三人と清少と
おしこりて。押取也。おしこりなりて。人
々あはて一乗車する
かうかといふに。車の参行などのを。早是
ばかりかといふに。まだこにのちで有
清少などの答たる
宮司。中宮大夫以下
さくせんなのせんさしつる
得選三人ありと。禁秘抄云。凡於三車寄
乗車女房近代例也。況得選不可然事也。
行幸走内侍同車時隨之近代事也

可然上藤と清少と
づくとこのりさわくがにくければ。さるべき人三人と。猶
此車にのるさまのいとさわがしく。祭の歸さなどのやう
にたふれぬぐまごふいと見らるし。たごされ。のるべ
き車なくてえまゐらずは。おのづからまごしめしつけて
たまはせてんなご笑ひ合てたてるまへよりおしこりて
まごひのり果て出て。かうかといふに。まだこにのち
ふれば。宮司よりきて。誰々かおはするを問聞て。いとあ
やしかりける事哉。今は皆のりぬらんとことを思つれ。こは
てのりせくれ給ふごこと
なごてかくばおくれさせ給へる。今はとくせんをのせん
としつるに。めづらかなるやなど驚きとよせとすれば。さ
はまづ其御志ありつらん人をのせ給ひて。つぎにもと
ふ聲聞付て。けしからず腹きたなくおはしけりなどい
はのりぬ。其次には誠にみづしが車にあれば。火もいと
くらきを笑ひて。二條の宮に参りつきたり。みこしはとく

左京小左近 イ左京小左近近首女房の名な

るべし
「町」原本には右京とあれど。こは上にも左京とあれは左京とすべし。イ本にも左京とあり

まわる人ごにみれどなかり
只今まわる人々を左京小左近などが見れども清少はまわらざるこ
おるにしたがひ四人づゝ

「町」此の十八字。イ本并に万葉抄には「あやしなまき」あり

いつのまにかうは年比のすまひのままに
二條の宮ばかりの御所なるに。いつのまにかく年比住嗣給ひし所のやうにあるぞと感下見る心。前に皆しつらひひるませ給ひけりさある首尾なり

「町」申上ればまごひのりし人のあやまりあらはるれば
ほさく 殆。ホトトギス

みづしがいさほしがりて
御厨子が突止がりて。おのが車にのせしこ。前にみづしが車にあれば火もいさくらきと有し首尾

又なごは心しらすらん物こそつゝまめ心しらす物こそ制する事なも遠慮せめ。右衛門などはさやうにみだりに乗車するを罰せよかしと仰らるこ

いらせ給ひて。皆しつらひるさせ給けり。こゝによべと仰

られければ。左京小左近などいふ若き人々。参る人ごに

みれどなかりけり。おるににしたるがひ四人づゝ御前にま

ありつとひてさふらふに。いかなるぞと仰られけるもし

はしらすに
「町」ある限あり果てぞからうして見付られてかばかり
御厨の上を清少にいふ詞

仰らるにには。なごかく遅くとて引ゐて参るに。見れ

は。いつのまにかうは年比の住ひのすまにかはしましつ

きたるにかとをか。いかなればかう何かと尋ぬばかり
「町」見えざりつるぞと仰らるに。どかくも申さねは。諸共
に乘たる人。いとわりなし。さいはての車に侍ん人はいか
でかどくは参り侍ん。是もほさくえのるまじく侍つる
を。みづしがいとほしがりてゆづり侍つる也。くらう侍つ
る事こそ佗しう侍つれと笑ふくけいするに。行事する
物のいとあやしき也。又なごかは心しらすらん物こそつ

かたへの人にくしと聞らん

此右衛門が詞を傍輩の女房達にくまんと清少のきいたるこ。前に清少の后宮の御尋にさかくも中さざりし首尾。傍輩の遠慮に定めたらんさまのやんごこ
・車の前後定法のこごとく正しからんこそよからめと

くるごよにりて

「町」イ本。くるしければとあり
申なほす

「町」活本。申なすあり

女房の名

「町」まめ。うさおんなどはいへかしなと仰らる。これどい

でかはしりしと立侍らんなどいふも。かたへの人にくし

と聞らんをさこゆ。さまあしうてかくのりたらんもかし
「町」右衛門の詞のきこえしと后宮の御厨清少などに先立より乗車のさまもさわかし
こかるべき事かは。定めたらんごまのやんごこなからん
こそよからめと。物しげに思召たり。おり侍るほどの待と
ほにくるしきにりてやとぞ申なほす

三四のきみ 是も后宮御妹也。三の君は我
道親王の北方也。四君は一條院の御くしげ
殿と燈花物語に有

みな打われてたにあらは
皆一度にのらばまきわけてもあらんを也。
あまりあらはにて物おしりしをいはいんぞ
て

【訂】活本。せむせむし「をあり
おほしりし」

【訂】活本には。伊周を藤家のすたきあげての
は給ふ所の事

【訂】活本には。おて「そのみあり
おほしりし」

に殿すませ給へは。宮にもそこにおはしまして。まづ女
房。車にのせさせ給ふを御覽すどて。みすのうちらに宮。し

けいしや。三四のきみ。殿のうへ。其御をどうとみとこころた
ちなみておはします。車の左右に大納言三位中将二所し

てすだれうちあげ下すだれひきあけてのせ給ふ。みなるう
ちむれてだにあらは。かくれ所やあらん。四人づゝかきた
てにしがひて。それくくとよびたてのせられ奉り。あ

ゆみゆく心ち。らみしう。まこととに淺まじう。けそうなり
ともよのつね。みすのうちらにそこのの御目ごものなか
に。宮の御まへの見らるしと御覽せんは更に危しき事か

きりなし。身よりあせのあゆれば。つくるひたてたる髪を
どもあがりやすらんとおほゆ。からうして過たれば。車の
もとにらみしうはづかしければきよけなる御まごもし

で。うちらみて見給ふも現ならず。それとたふれずそこま

【訂】活本には。おて「そのみあり
おほしりし」

【訂】活本には。おて「そのみあり
おほしりし」

【訂】活本には。おて「そのみあり
おほしりし」

【訂】活本には。おて「そのみあり
おほしりし」

【訂】活本には。おて「そのみあり
おほしりし」

をばらきつをぬること。かしこきかほもなきかとおほゆ
れど。みなのりはてぬれば。引出て。二條のおほぢにしぢ

たて。物見なるものやうにてたちならぶたるいとをか
し。人もさ見るらんかしと心とせめまぜらる。四位五位六

位などいみしうおほういせり。車のもとに來てつくる
ひ物いひなごす。先院の御むかへに。殿をばしめ奉りて。

殿上と地下とみなまありぬ。それわたらせ給ひてのち宮
は出させ給ふべしとあれば。いと心もどなしと思ふほど

に。日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五。よつ
は尼の車。一の御車はからの車なり。それにつぎきて尼の

くるま。しり口よりするさうのす。うすみのけさころ
もなごらみしう。すだればあけず。下すだれもすいら
のすそすこしとこも。つぎにたゞの女房の十。櫻のからきぬ。

つすみわたるに
「訂」万歳抄には。つすみわたれるに「さあ

きこえするに

「訂」万歳抄此の次に。いこひまじの五字あ

り。イ本もおなじ

青すそこのもくたいひれ

青未濃装。裾帶。領巾也。采女の出立

えひそめのおり物のさしゆき

蒲陶染織物。指貫。采女腹前が出たちなる

べし。むかしは女房も馬にのる時はさしゆ

きを着たる也。御稷の行幸の時。走馬平組

の指貫着たる事西宮記にあり。又堂侍命婦

も振袴の上に平組の指貫を男のごさく替て

馬にのりて。御稷行幸に供奉の事第一條の

御聞の秘訣にあり

「訂」原本には此一句なし。今イ本。活本。万

歳抄皆あれば。加へつ

しうなまめかし。日はいとうちうかなれど。そらはあさみ
どりにかすみわたるに。女房のさうぞくの匂ひあひて。い
みしきかり物の色々のから衣などよりもなまめかしう
をかしき事かぎりなし。關白殿其御つぎの殿はらおはす
るがぎり。もてかしづき奉らせ給ふ。いみしうめでたし。
これら見奉りさうわら此車ごもの二十立ならべたるも。又
をかしと見ゆらんかし。いつしか出させ給はゞなごまち
きこえさするに。いかならんと心もとなくおもふに。から
うしてうねめ八人馬にのせてひき出めり。青すそこのも。
くない。ひれなどの風に吹やられたるいとをかし。ふぜん
といふうねめは。くすしまけまごかする人なり。えびぞ
めのおりものしめきをききたれば。いと心ことなり。し
けまごは色ゆるるにけり。山の井の大納言はわらひ
給ひて。皆のりつゝきてたてるに今ぞ御こし出させ給ふ。

かしらのけなご
かしらの毛立あがるさいふもまごさごさご
に有

「増」これも上に髪なごも云々あるが如く。

見たてまつるに耻ひしくも添多もある朕

をいふ

さてのちにのみあしからん人も

髪のたちてなでつけし毛もそいけたれば。

悪き髪あらはに見えて。のみあしき人も

こたんと

かしらぞおほゆる

「訂」原本ぞも下なし。さては照格ごのほす。

イ本活本に従ひて。補ひつ

車のしごご

女房の車ごもに牛をやすめて。楯にながえ

をおろしおきたりつるを。又こしにかけ

御供につらなんとするま

大門のまご

「増」法興院釋尊寺の大門也。二條の北東極の

東にあり。關白兼家公の邸にてありしご

こまもろこのかくして

樂に。高麗の樂。唐の樂とあり。拾芥に

は下り女院の御ありさまのめつた見えしにくらふくもあらすご
めでたしと見え奉りつる御ありさまに是はくらふべか
らざりけり。朝日はなごごとしあがるほどに。木の葉の
と花やかにかゝやきて。みこしのかたびらの色つやなごご
へぞいみしき。御つなばりて出させ給ふ。御こしの帷子の
うちゆるきたるほど。まごごにかしらの毛なご人のいふ
はさらばそらごごならず。扱のちにかみあしからん人もか
こちつべし。あごまじういつくしう。猶いかでかゝる御前
になれつかふまつらんと我身もかしこうぞおほゆる。御
こし過させ給ふほど。車のしごごも人だまひにかきおろ
したりつる。又うしごごもかけて。みこしのしりつゝきた
る心のもでたう興ある有さまいふかたなし。おはしまし
つきたれば。大門のまごごにこまもろこのかくして。獅子
こま犬まごごまひ。さうの音つゞみのこまに物もおほえ
ず。こはらつづくの佛の御國などにきけるにあらんと。

わけはり
【増】和名抄に云。輿。和名阿計波利

のりつる所だに
さきに乗車せし所さへはれがましかりに
と

色のくろさあつま
あまり晴々しくて髪の色かえわづれぬさ
はまなるが

【増】此の次の「いざ信しより以下いふほど」
さあるまでの三十字は活本になし
まづしりなるこそは

清少の恥て下乗し他て。先車の尻にのりた
る人におり給へさゆづるこ
それもおなト心にや

車ノの尻の人ノも清少ノとおなトく恥たるにや
笑ひて立かへりからうしておりぬればよりお
はして

大納言殿の笑ひしりぞき給へるが。清少の
下りたるに又立かへりよりおはしてと
むれたつなどに見せや

是后宮の御前を伊周の申給ふ。清少をむ
れたつに見せすして下車させよの仰せ故
來りしな。かへりて我を恥るはつひなき事
と

ひきおろしてみてまかり
これ清少后宮の御前ちくくめしよせられて
上臈の女房と等前の座めしつはれしはや
めの事なへるこ

を申給へば

【訂】原本には。うし給へばさあり。イ本活本
万歳抄。皆と申さあり。故に改めつ
またのちの御ども奉りながら

御奥の内にては后宮も装ひらきわめしたる
にや

紅の御ぞよろしからんや
后宮御装束に紅をめしたらばよろしがるま
トくやとめつらしき文体
地ずりの 抽扱。挿給なごのたぐひ
さうがんにされたる

泉眼。唐のきわの名也。桃葉御殿。御は
そき泥給なごしたるこ

【増】 榮花云。さうがんとすもの「侍中群要
云。下臈泉眼」廣景殿給云。ふたあいの
さうが。又云ふかみじりのさうが。などあ
り。谷川士清云。うすもの「名」

それは殿の大夫の
勅物云。云有長公。これより后宮の出御
のおそりし故を御物たり
院の御供にきて

女院の供奉にて人に見られし同じ下臈をき

空にひゞぎのほるやうにおほゆ。内に入ぬれば。いろいろ

の鋪ハシのあけはりに。みすいとあそくてかけわたし。へいま

んなどひきたるほど。なべてたゞに此世とおほえず。御さ

じきにさしよせられたれば。又此殿はら。立給ひてとくかりよ

とのたまふ。のりつる所だにありつるを。今すこしあかう

けそうなるに。大納言殿いと物くしくきよけにて。御し

たがさねのしりいとながく所せけにて。すだれうちあけ

て。はやどの給ふ。つくろひをへたるかみも。からぎぬの中

にてふくだみ。あやしうなりたらん色のくろさあかさま

へ見わかれぬべきほどなるが。いと信しければ。ふともえ

かりず。まづしりなるこそはなごいふほども。それもおな

じ心にや。しりぞかせ給へかたじけなしなどいふ。はぢ給

ふかなど笑ひて。立かへり。からうしておりぬれば。より

おはして。むねたかなどに見せでかくしておるせと。宮の

仰らるれば來たるに。思ひくまなきことてひきおろしてあ

てまより給ふ。さきこそえさせ給ひつらんと思ふもかたじ

けなし。もありたれば。はじめおりける人どもの物の見え

ぬべきはしに。八人はかり出るにけり。一尺と二尺ばかり

の高さのなげし中宮のうへにおはします。こゝにたちかくし

て。ゐて参りたりと申給へば。いづらとて几帳のこなたに

出させ給へり。まだからの御ども奉りながらおはします

ぞいみしき。紅の御ぞよろしからんや。中中宮からあやの柳

の御ぞ。えびそめの五重の御ぞに。あかいろのからの御ぞ。

地ずりのからのうす物に。さうがんかさねたる御もなど

奉りたり。おり物の色。更になべてにるべきやうなし。我

をはいかゞみるとおほせらる。いみしうなん候ひつるな

どもことに出てはよのつねにのみこそ久しうや有つる。

それは殿の大夫の院の御供にきて人に見えぬ。おなじ

て。又后宮の御供にもまゐらんは人目わるし。さて。別に下殿を御堂殿の註せ給へるゆゑそれを待て行啓もせせりしこと

御いたひあげさせ給へるまいし
「訂」原註に「際次之御願のまはなふなるべし」とあるは非也

弘按。まはしは叙子也。叙子とは婦人儀式のとき御髪にさす具也。後世の御の類之兵衛督忠君

九條右大臣師輔公男。法興院白兼家公と同母の弟なれば。道隆公の御をさすいふことの中納言は此むすめ也

「訂」弘云。忠君は原註には忠尹とあり。又本文にはたゞ忠とあれど万葉抄よりて改めつ。大鏡并ニ藤氏系譜ニ忠君は見ゆれども忠尹は見えず

宮小路左大臣 顯忠公也。顯忠公の次男。左衛門佐重輔のむすめ宰相の君也

宰相はあなたにむすめ
后宮清少を近くめしよせんと思召せども。宰相かくてあればやうに被仰なるべし
こゝに三人いとよく見侍ぬべし
宰相の詞也。中納言と宰相と清少と三人あらんこと

殿上ゆるまるゝ内舍人

百家訓要云。是は重殿上などのなる官也。昔は武勇を習はせけるほごに。内舍人をば。坂東國へつひはされけること。今はさやうの事もなし。未元服せしめて。殿上の間に付はみな内舍人云々也。清少は女にて元服せで殿上ゆるされれば。内舍人と准へ云々ふきかたり

「訂」源云。今俗にいふ吹簾の吹の輪也。

あいなくかしら御事にうりて。悉けれもあぢきなくおそれおそれし事にうりて。うらひいひて。おそれおほはれぬべし

あなかつたけなき事なごは又いかゞは主君の召上らるゝに。人のおもはくを障りて。あちおそれおそれし辭退申さんは。又いかゞなれば。御意のまゝに登上して。殿に身に通たるありさまも有けん也。是清少の出頭の人のおもはるゝに有し事をいふなるべし

陣にちかうまわりけるまゝ、
后宮の御機敷の前に。此日近衛司陣をひけるを見えたり。其故に歴家陣に有し出立のまゝに弓箭を帯しておほせしなるべし
どうぞをおひて

武官の調度弓服など。延喜式云。凡大儀は中將武禮冠。濃緋襦。錦袴。將軍帶。金裝袴刀。裝着袴云々

下がさねながら。宮の御供にあらん。わろしと人思ひなんどて。ことゝ下がさね。ぬはせ給ひけるほどに。おそきなりけり。御堂殿の好色の事いとすき給へりなごうちわらはせ給へる。いとあきらかにばれたる所は今すこしけさやかにめてたう。御ひたひあけさせ給へるさいじに。御わけめの御らしのいさゝかよりしてしるく見えさせ給ふなごうちぞきこえんかたなき。三尺の御きちやうひとよろひをさしちがへて。こなたのへだてにはして。そのうしるにはたゞみ一ひら一枚をながさまにへりきして。なけしの上にしきて。中納言の君といふは。殿の御をぢの兵衛のかみたゞきみとさきこえけるが御むすめ。是も后宮の女房也宰相の君とは富小路の左大臣の御孫。それ二人が上にあるて見え給ふ。御覽じわたして。宰相はあなたにるて。うへ人どものゐたる所いきて見よと仰らるゝに。心得てこゝに三人いとよく見侍ぬべしと申せば。さば

さあちばて清少を召上る

とてめしあけさせ給へば。しもにるたる人々殿上ゆるさるゝうごねりなりりとわらはせんとおもへるかといへば。うまごへのほどぞなごいへば。そこに入るて見るはい清少の心どおもたし。かゝる事なごをみづからいふは。ふきかたり就語之身をふけりりにもあり。又君の御ためにもかるゝしう。かばかりの人をさへおほしけんなどおのづから物しり世の中もどきなどする人はあいなくかしく御事にかゝりてかたじけなけれど。あな辱き事なごは又いかゞは。誠に身の程過りさまあらんこと是より又女院などの御機敷の事を云云たる事もありぬべし。院の御さしき所々のさじきごも見わたしたるめでたし。殿はまづ院の御さじきにまゐりたまひて。まはし有てこゝにまゐり給へり。大納言一所三位伊用と道頼との中將は陣ちかうまゐりけるまゝにて。どうぞをおひていどつきくしうをかしうておはす。殿上人四位五位とちたううちつれて。御供に侍ひなみゐたり。入せ給ひて見

事々しく
關白殿后宮の御つたへ

今いらいけふはと申給ひそ
こ。今より以來にも。けふはかく窮屈なる
目見下と申給ひそ。各々唐衣にて行儀
正しき故。

【訂】原本にいらはとあるは非。イ木いらい
とあるに從ひつ
又云イ木にはけふはと次に「入々しめ
るはさ」の八字あり
此なかの主君には

【訂】此なかの主君にはの八字。活本には此し
ふにはとあり

さらばもし又 清少の相をかたりたらは。若
又假にまじふま下からんをこの御たはふれ
事。

【訂】或云清少の相をかたりたらは。若
又假にまじふま下からんをこの御たはふれ
事。

【訂】或云清少の相をかたりたらは。若
又假にまじふま下からんをこの御たはふれ
事。

奉らせ給ふに。女房あるかぎり。も。からきぬ。みくしけ殿
まできたまへり。殿の上は。裳のうへに高内侍こうちきききき給
へる。繪にかきたるやうなる御さまども哉。今いらいけふ
はと申給ひそ。三四の君の御もぬがせ給へ。此なかの主君
にはおまへこそおはしませ。御さじきの上へにぢんをす
ゑさせ給へるは。おほろけの事かどてうちなかせ給ふ。け
にとみる人もなみだらまじきに。あかいろさくらの五重
のからきぬを着たるを御らんじて。法服ひとくだりたら
ざりつるを。にはかたきとひしつるに。これをこそかり申
べかりけれ。さらばもし又。さやうの物をきりしらめたる
にどの給はするに又わらひぬ。大納言殿すこしきききあ
給へるがきし給ひて。せうさうづのにはやあらんとの給ふ。
ひとこととしてさかしからぬ事をなまや。僧都の君あか
色のうす物の御ころも紫のけさ。さうすき色の御ぞと

【訂】或云清少の相をかたりたらは。若
又假にまじふま下からんをこの御たはふれ
事。

僧綱の中に威儀具足
僧正。僧都。律師を僧綱といふ。僧都に
てまじませば。僧綱のなかに威儀を正して
こそまはさめと隆圓に女房の申すたはふれ
也。此時隆圓をさなひるべし

紅梅のせり物 表紅うらむらむと

大行道導師まわり
法會のさま。大行道あり。導師まわりて
其法事あるさま

あぐらたてし
胡床アケラ。腰ぐる床敷のたぐひ。動
使座したるなるべし

も。いしめきき給ひて。ほちちの御やうにて。女房にまじり
ありき給ふもいとをかし。僧綱の中に威儀具足してもお
はしませ。見るしう女房の中になどわらふ。父の大納
言殿御まへより。松君あて奉る。えび染のかりものなほ
し。こきあやのうちたる。紅梅のおり物なき給へり。例
の四位五位いとおはかり。御さじきに女房の中松君をにいれ奉
る。何事のあやまりにかなきのしり給ふさへいとばえ
と。事法事はじまりて一切經をばすの花のあかき一様に一は
なづ一巻ににいられて。僧ぞく上達部殿上人地下六位何くれま
でもて渡るいみしうたふとし。大行道終日導師まわり。あか
うまはしまちてまひなどする。日ぐらし見るに目もたゆ
くるしう。内の御つかひに五位の藏人まわりたり。御さ
じきのまへにあらたてしるたるなど。けにぞ猶めでた
き。夜とりつかた式部のせう即理前二註のりま后宮への御使とまありたり。やがて